麻原彰晃の世界スペシャル
聖地巡礼の旅

THE DESTINED LAND

約束の大地



尊師・麻原彰晃が初めて明かす
仏教の最奥儀

ラオス　チベット　インド



はじめに

半年ほど前のことです。麻原彰晃尊師のお体がガンに侵されているということが判明しました。それも恐ろしい肝臓ガンです。

その死亡率の高さなどのデータを、内弟子である医師からお聞きになった尊師は、

「いろいろな所に行って確かめたいことがたくさんあったんだけどなぁ……。」

と、つぶやかれたのでした。そのお気持ちは痛いほどよくわかりました。

しかし、それが許されるはずもなく、尊師は修行と治療に専念する毎日を送ることとなったのです。

「ガンが大きくなった。長生きすると約束したけどもうだめかもしれない……。」

あと二、三カ月の命という、末期ガンの状態にまで追い込まれたのは、それから間もなくのことでした。

通常だったら、おそらくこの時点で生への望みが絶たれてしまうに違いありません。

しかし、尊師は、事実は事実として冷静に受け止め、黙々と端目にも死ぬよりつらいだろうと思われる修行と治療を続けられ、ついにガンを消滅させることができたのでした。このような〝奇跡〟を起こすことができたのは、尊師に〝自己の苦しみを喜びとし、他の苦しみを自己の苦しみとする〟という大乗の仏陀としてのお心が根付いていたからという気がします。

さて、こうして、尊師の活動は再開され、特に意欲的に仏教ゆかりの国々を訪ねられることが多くなりました。今回の死病との闘いを通じて〝今やらなければならない〟という気持ちが強くなられたのでしょう。

本書をお読みになっていただければ、おわかりになると思いますが、尊師がそれぞれの国で語られた内容には、瞑想・修行の奥儀ともいうべきものが、随所にちりばめられています。これらは、わたしたちのように尊師にご指導を仰ぐ者にとっても非常に高度な教えであり、この時代にはなかったものです。

そのような教えを尊師はその場、その場に残されているデータ（例えば、釈迦牟尼だったら釈迦牟尼が残されたデータ）によってお知りになっているのです。もちろん、神通力がなければこんなことはできません。

わたしは、この繰り返しを間近に見ながら、尊師が、

「いろいろな所へ行って確かめたい。」

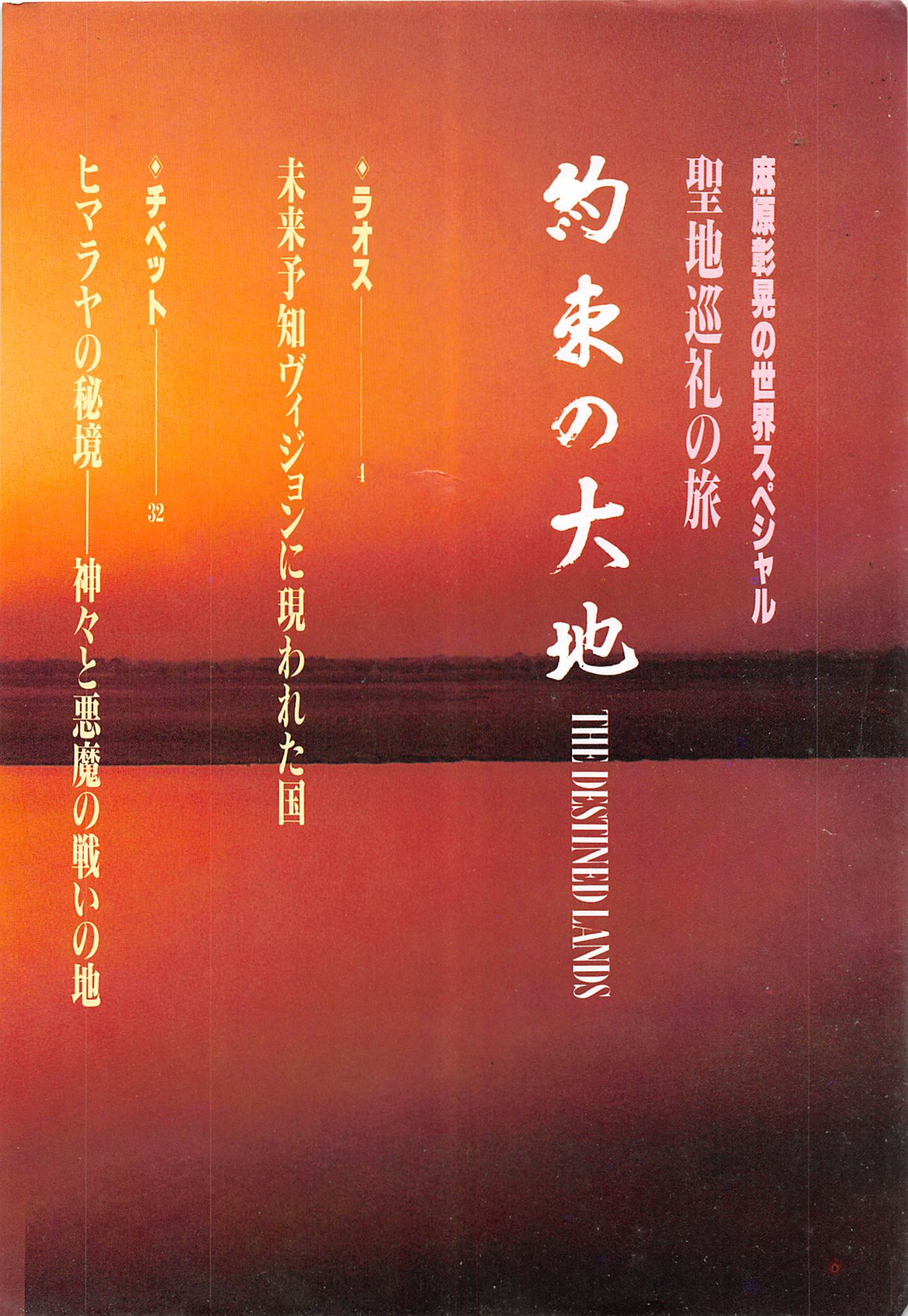
とおっしゃっていた意味を理解することができました。また、その記録を後世の人々のためにも残しておかなければならないと思いました。

その結果生まれたのが、この「約束の大地」なのです。

わたしは尊師の弟子として妻として、本書を世に出せたことをうれしく思います。

――一人でも多くの人が、本書によって真理の教えと縁を持つことができますように――

一九九一年　長月　ヤソーダラー



麻原彰晃の世界スペシャル

聖地巡礼の旅

約束の大地

THE DESTINED LANDS



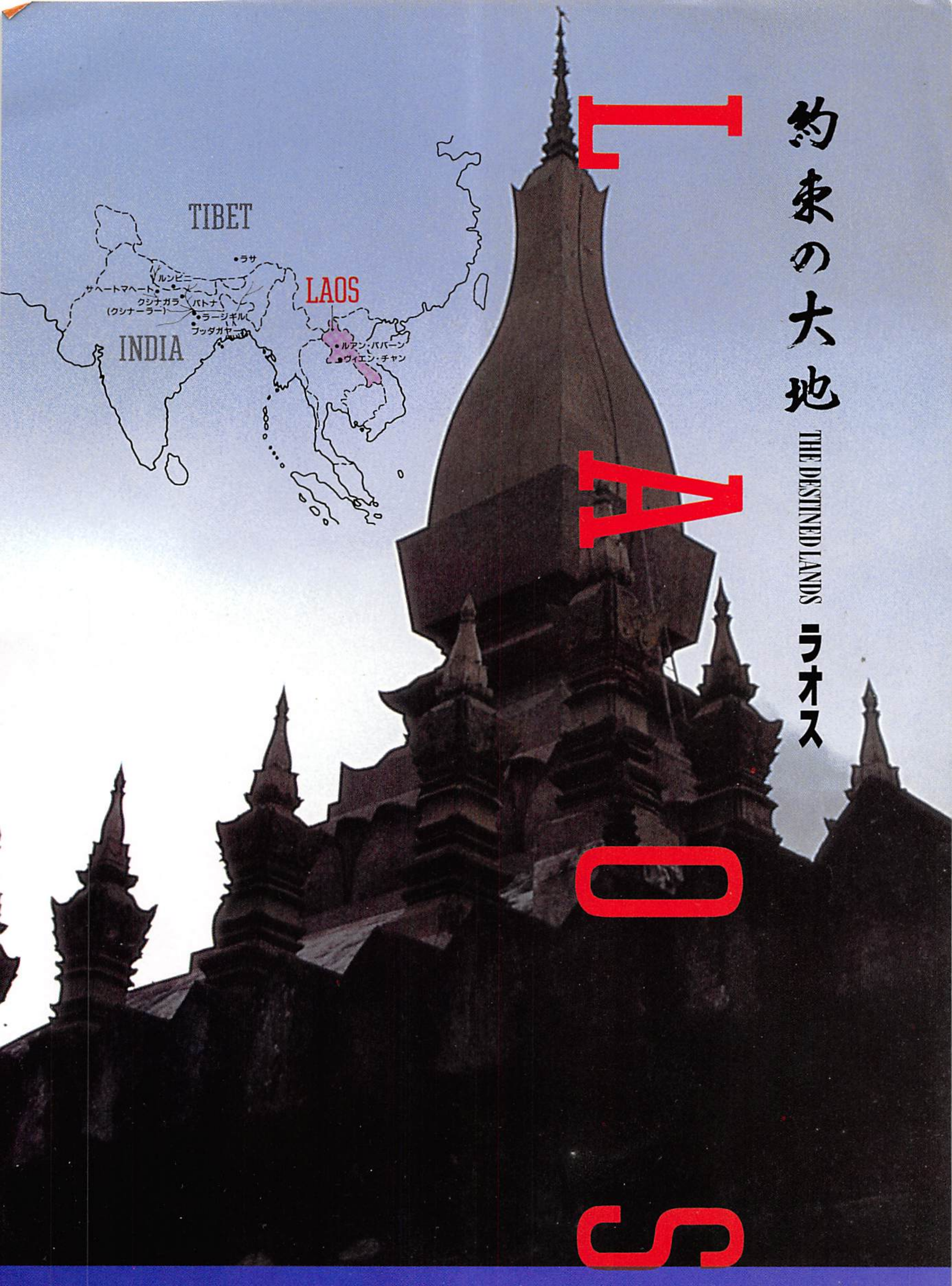
封印は解かれた——明かされる仏陀釈迦牟尼の秘密

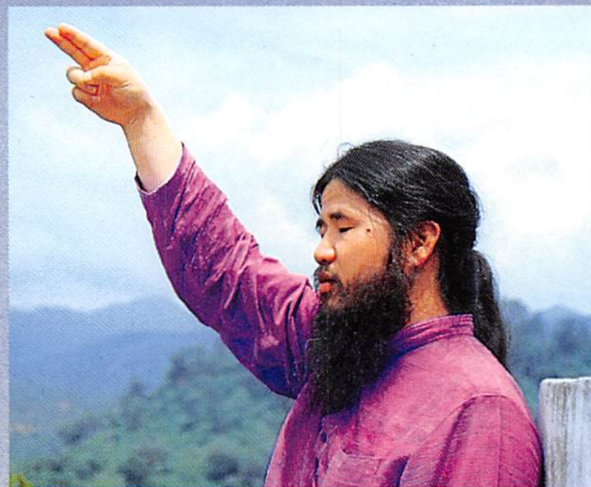
●ルンビニー
●ブッダガヤー
●サヘートマヘート
●ラージギル
●パトナ
●クシナガラ

文——ヤソーダラー正大師

約束の大地 THE DESTINED LANDS ラオス

LAOS





◆未来のラオスで見たものは？

ラオス——この、あまりなじみのない国の名を聞いたのは三月のことだった。尊師があるヴィジョンを見られたのだという。
(東南アジアのどこかに、そんな国があったなぁ。)
と思いながら、その内容を聞く。驚いたことに、尊師はそれまで全くご存じなかったラオスをヴィジョンによってお知りになったらしい。それは、

未来予知ヴィジョンに現われた国







静かなるメコンの流れ

「ラオスという国があるはずなんだよ。」

という言葉から始まった。

「わたしは、そのラオスという国の未来を見てきた。しかし、わたしの見てきたものについては今はだれにも話せない。なぜなら、大変重大すぎる出来事だから。ただ、シヴァ大神から、そのとき、『仏教国ラオスへ行くように』とのご指示を受けたので、それは実行しようと思う。」

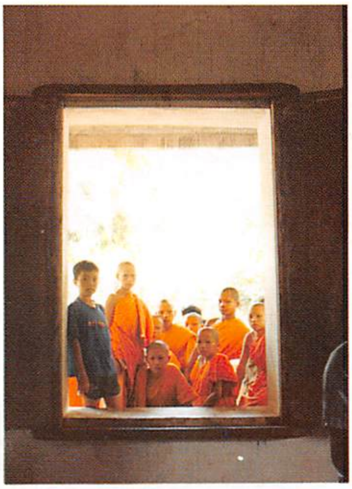
尊師は言われた。また、

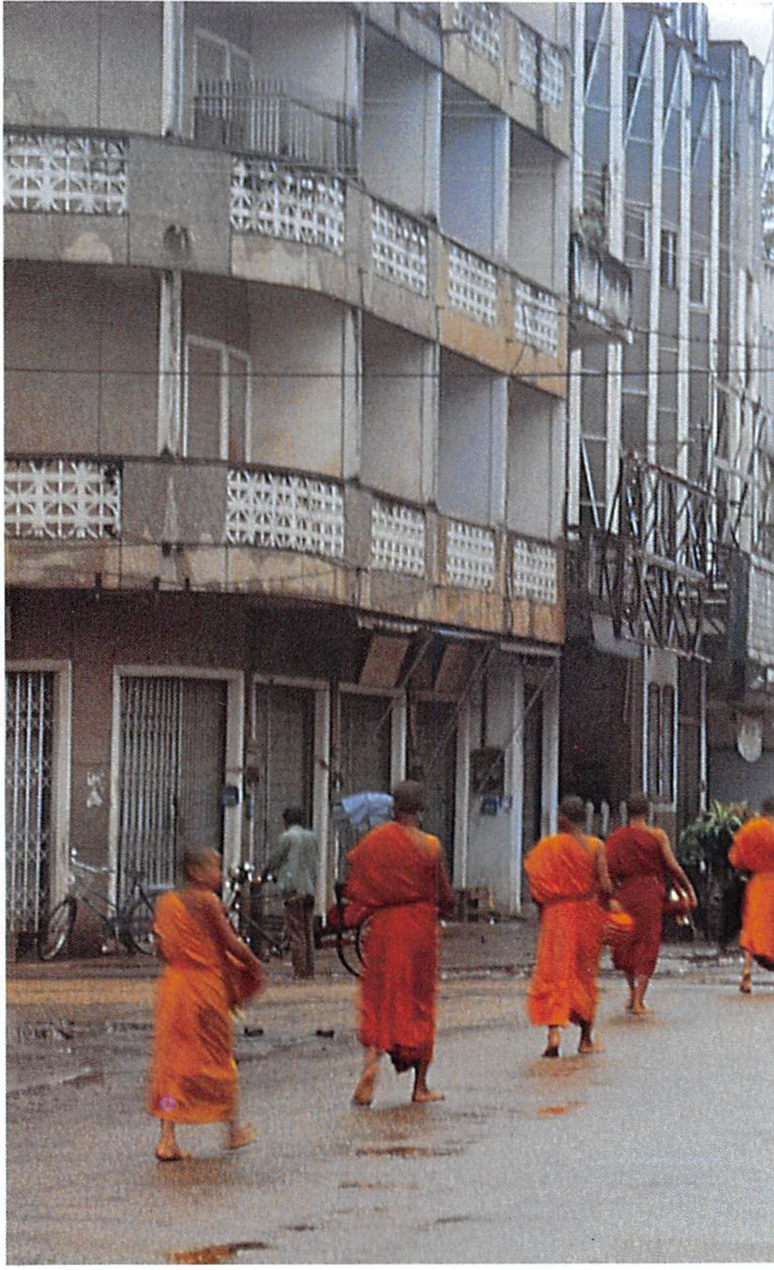
「三月のできるだけ早い時期にラオスに行かなくてはならない。」

とも。

早速ラオスについて調べたところ、ラオスという国の存在はもちろんのことであるが、まず、尊師の語られたラオスの人々（ラオ人）の身体的特徴が、現実のそれと一致した。

また、尊師がシヴァ大神から、「ラオスの仏教に協力するように」と指示されたというこのお言葉の正しさを証明するかのように、仏教徒が国民の九十五パーセントを占めるほどの仏教国であることがわかったのである。





いつものことながら、尊師の変化身（下位アストラルと呼ばれる異次元で活動する身体）の体験の正確さには素晴らしいものがある。となると、

「今はだれにも話せない。」

とおっしゃっている内容もひどく気になってくるところであるが、一体尊師は未来のラオスで何をご覧になったのだろうか。

オウム真理教では、早速日本にあるラオス大使館と連絡を取った。そして、尊師がヴィジョンを見られて間もなく、ラオス仏教のトップであられた高僧が亡くなられたということを知った。何やら、因縁めいたものを感じざるを得なかった。なぜなら、尊師のお言葉どおりにすぐにラオスへと行っていたなら、その高僧が亡くなる前に会うことができたはずなのだ。

その後も尊師が、

「一度ラオスを訪ねたい。」

というお気持ちを持っていらっしゃいながら、また、ラオスの方からも、

「ぜひラオスへお越しください。」

と歓迎の意向が伝わってきていながら、な



かなかラオスへ行く機会に恵まれなかった。それもそのはず、当時の尊師は、死病肝臓ガンとの壮絶なる闘いを余儀なくされていたのである。

だが、ついにラオス訪問のときがやってきた。チベット（本書・チベット編参照）からそのままラオスへ向かうことが決定されたのだ。「この機会を逃したら、今度いつ出られるかわからない」（尊師）からである。

◆国賓として迎えられて

オウム真理教の一行は、隣国タイから飛行機でラオスの首都ヴィエン・チャンへ入った。

ヴィエン・チャンの空港で、まずびっくりした。

「どうしたんだろう？　人がいやにたくさん集まっていますね。」

「本当だ。」

「どれどれ、あ、あれはモンク（出家修行僧）だ！」

と、ここに至って、その人たちがオウム真





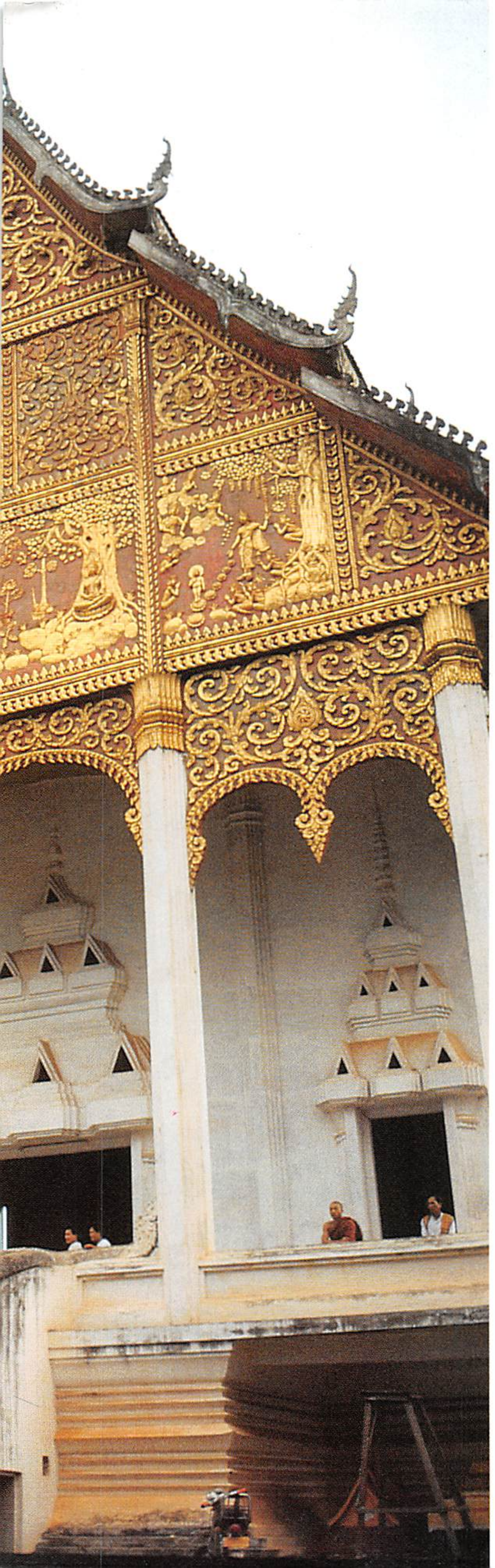
理教の一行の出迎えにやってきているということを知った。国賓として迎えるというラオス外務省の言葉は本当だったらしい。僧、男女の在家信徒を合わせて四百人もの人々に歓迎されたのだ。僧はすべて小乗仏教の象徴である黄色い僧衣を身に着けている。

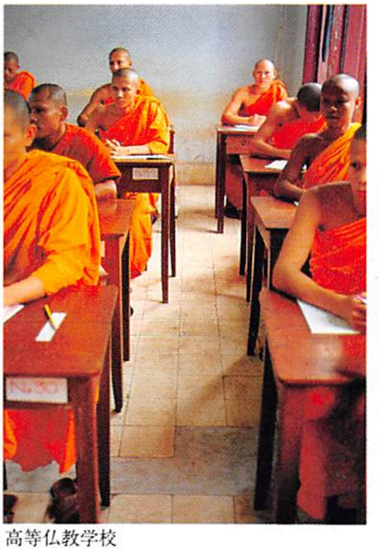
タラップを降りられた尊師は、しばらく歩まれた後、ラオスの大地に祝福を与えられた。

みんなにこやかに笑いかけてくれる。女性は皆色とりどりの花束を銀色の鉢に入れて尊師に捧げる。美しい風習だな、と思った。

その日の午後、タート・ルーアンに隣接するヌワ寺院を訪問。タート・ルーアンとは、大きい塔という意味である。これは、一五六六年に当時のランサーン王国の王であったセタティラート王が、王宮の内庭の古い塔の上に建てた仏塔であり、人々の厚い信仰に支えられたヴィエン・チャンの象徴ともいうべきものである。

また、この王宮の内庭にあったとされる





高等仏教学校

古い塔にもいわれがあり、その最初の塔は当時のヴィエン・チャンの統治者チャンタブリーによって建てられた仏舎利塔なのだという。

さて、この地にあるヌワ寺院を訪問したわたしたちを迎えてくれたのは、ビシェット・シンハラット大師である。大師は現在ラオ（ラオス人は自国のことをラオと呼ぶ）仏教連盟の会長であり、出家修行者の頂点にいらしゃる方である。すなわち、尊師が三月初めに会うべきだったとされる高僧の跡を継がれたのが大師なのだ。

尊師は大師と親しみを込めたあいさつを交わされ、サキャ神賢※（釈迦牟尼）に対してマントラを唱えられた。そして、

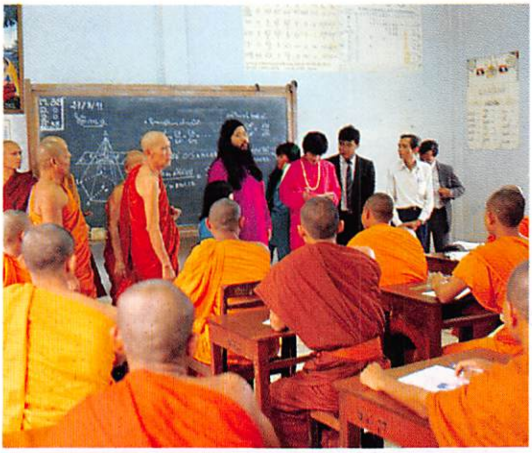
「三月のできるだけ早い時期に行きなさいという示唆に従い、本来はもっと早く、その方が亡くなる前に来るべきだった……。」

と、大師に語られた。

このヌワ寺院は、代々の会長が来ることになっている重要な寺院であるという。ということは、三月の初めには、その高僧がここに座られていたということになる。

その後、ヌワ寺院の横にある高等仏教学

※「釈迦牟尼」は漢語の訳語であるが、パーリ語原典を忠実に訳すと「サキャ神賢」となる。「覚者」なども同じ。


教室で説法なさる尊師


ヌワ寺

校へ。ここの生徒は国中から集まっている若き出家修行者である。ここでは、地理・歴史・数学・物理などの一般教科の他に、仏教に関係するダルマ・仏教史・パーリ語が学ばれている。

　折しも授業中。突然訪れた異国の仏教の実践者たちの姿に、生徒たちもそわそわと落ち着かない様子。だが、尊師が予定外に、ある教室でご説法を始められたところ、生徒が次第に真剣な表情を見せ始めた。一人、また一人とメモを取るようになっていったのが特に印象深かった。

　そして、夕暮れが迫りかけたころ、わたしたち一行は全員、仏舎利塔であるタート・ルーアンに灯明の供養をし、サキャ神賢をしのんだのだった。

◆苦難の歴史を背負って

　翌日、午前中にラオスの瞑想センター訪問。所長は、ラオ仏教協会の副議長をされ、併せて、ラオス中の瞑想と仏教教育を担当されているというサーリー師である。

　ここには、男性の出家修行者の他に女性



タート・ルーアンを案内してくれた、ラオ仏教連盟会長ビシェット・シンハラット大師（中央）。

の出家修行者も大勢いて、女性の場合は白い僧衣を身に着けている。ちょうど、在家信徒の女性たちが、瞑想センターの出家修行者への食事の供養のために集まっていた。

ここラオスでは、今でも出家修行者は、このように在家信徒によって持ち寄られる食事、あるいは、托鉢によって得る食事のみの生活である。

案内役の外務省の役人、ビラさんが通訳しながら説明してくれる。

「仏教を理解しようと思えば、ここを訪れなければなりません。いつもここでは修行が行なわれています。戦時であろうと、平和時であろうと、修行が行なわれています。」

戦時であろうと、平和時であろうと……！　わたしはこのとき初めて、この国の戦争のにおいをかいだような気がした。

実はこの国も長い苦難の歴史を持っているのだ。一九〇〇年代に入ってからでさえも、フランスの植民地化、日本の支配、独立運動、革命運動、そして、三十年にも及ぶ内戦を経験している。

特に、この内戦は、ラオス国内での二派、三派分かれての戦いだけにとどまらず、フ



灯明の供養

ランスの再侵略に激しく対抗する第一次インドシナ戦争、それに続く第二次インドシナ戦争、そして、ベトナム戦争が複雑に絡み合い、激しい戦闘が繰り広げられた。

これは、米ソが冷戦の形を整えてくる時代の局地戦争でもあり、ベトナム民族統一戦線と協力関係にあったラオス愛国戦線（パテト・ラオ）の本拠地一帯と北ベトナムの輸送ルート（ホー・チ・ミン・ルート）が通ったラオス南東部は、アメリカ軍の直接軍事介入によって徹底的な爆撃を受けている。アメリカ軍はラオスに百五十万トンの爆弾を投下したといわれ、これは北ベトナムへの百万トンを大きく上回る量なのだ。ラオス側の被害については〝推して知るべし〟である。

この国際政治が複雑に絡み合ったラオスの内戦が終結するのは一九七五年。この年、ラオスに社会主義政権が樹立した。

そして、現在ラオスでは社会主義と仏教が調和し共存しているのである。発展途上国ではこのような形態がよく見られるという。尊師も、

「仏教はすべての人の豊かさを願うものな



ラオス国家建設戦線本部にて、プーミー・ヴンヴィチャ氏と会談。

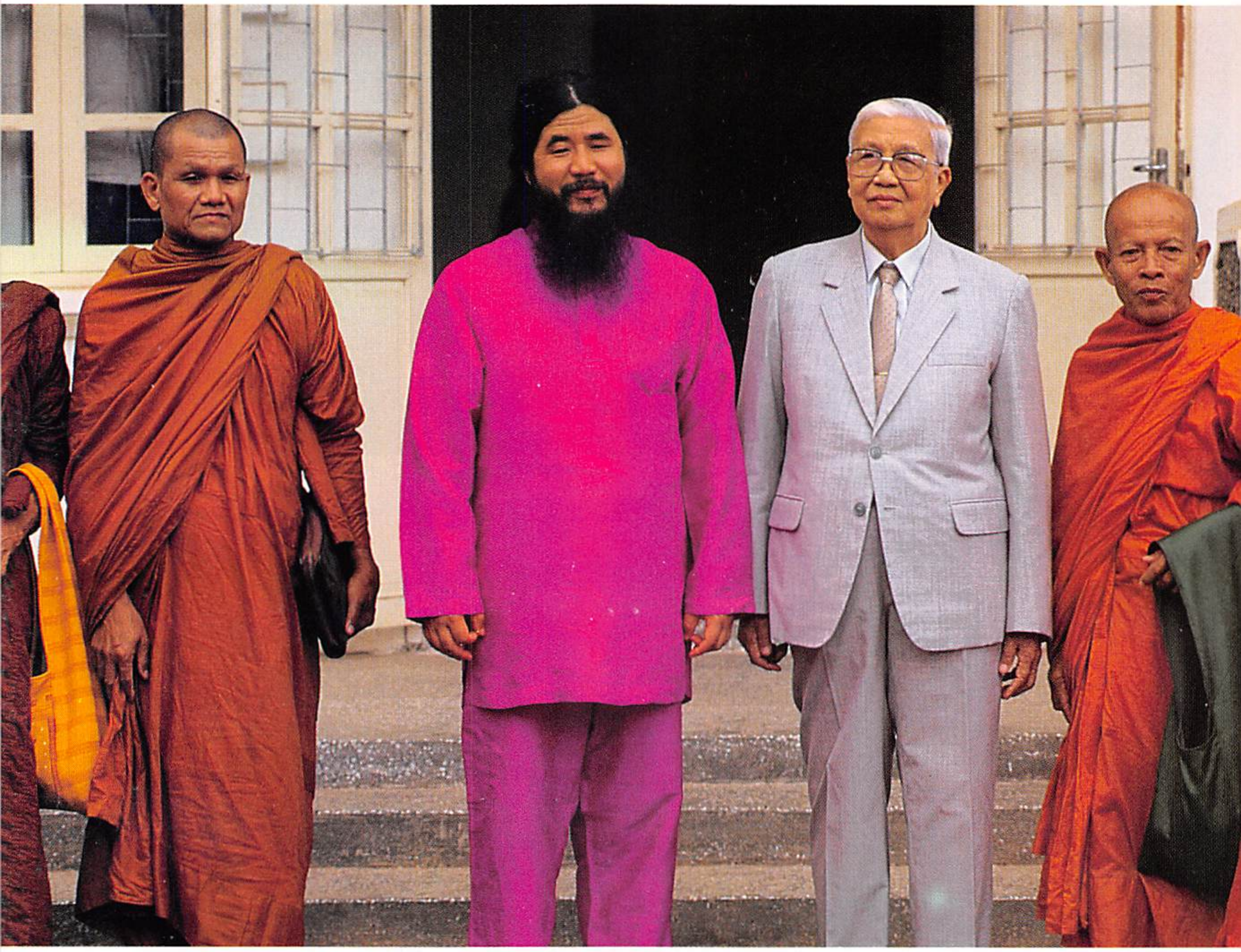
ので社会主義と共存しやすい。」とおっしゃっている。

◆ヴンヴィチャ氏との会見

「ラオス国家建設戦線（NLFC）の本部にお迎えできて大変うれしく思います。」と、尊師を迎えたのは、わずか二週間前まで大統領代行を務めていたNLFCの長であるプーミー・ヴンヴィチャ氏だ。宗教界の最高責任者でもある。NLFCの前身は、先に名を挙げたラオス愛国戦線で、一九七九年にその歴史的使命を果たしたとして、組織・名称が改められた。

　フランスの再侵略を阻むため、武装勢力を誕生させ、ホー・チ・ミンの支援を得、ラオス抗戦政府内相、ラオス愛国戦線書記長などの任務に就きながら激動のラオスを生き抜いたこのラオスの立役者は、今穏やかな微笑をたたえて尊師の前にあった。

「ラオは一つの後進国であります。それは、戦争、そして諸外国からの、敵国からの攻撃があったからです。そのため、多くの寺院が壊されてしまいました。今我々はそれ



を修復しなくてはいけないときにあります。
ラオス国家建設戦線は、我々の国の様々な宗教団体を指導しており、ラオ仏教友好協会もその組織のもとにあって、人々を平和に導き、平和な生活が送れるように教育する立場にあります。
ラオの出家修行者はラオの人々に悪いことをなさない、そして善いことをなすことを説き、透明な綺麗な心を持つように教育しています。ラオの人々は出家修行者のことを我々の教師、もしくは我々の教育者と呼んでおります。ラオの人々はラオの出家修行者に従います。その理由というのは、出家修行者がラオの人々に、盗まないこと、殺さないこと、お互いに戦わないこと、そして悪い行ないをしないことなどを教えるからです。
わたしはラオ建国戦線、およびラオの出家修行者、およびラオの仏教徒、およびラオの国民に代わって、あなた方の使節団をここにお迎えできて大変うれしく思っています。」
との言葉に、尊師からも、
「今回は心のこもった歓迎を受け、大変感





プーシー山から望むルアン・パバーン



タート・サンティチェディ

謝をしています。これもひとえにあなたをはじめとする建国戦線の方々の協力があってのことだと考えています。ラオスの国民の皆さん、特に今回は仏教徒の出家修行者の方とお会いすることができたわけですが、この方々は大変友好的で、そして親切で、平和な方々であることをわたしたちは知りました。

　仏教の経典によると出家修行者というのは福田、つまり、わたしたちに幸福の米を与えてくれる衆生であるというふうにうたわれていますが、まさにラオスにとってこの出家修行者の方々は最高の福田であるということを感じました。」

などのお言葉が述べられた。（この会見は最終の日のものであるが、都合上ここに入れさせていただいた。）

◆ルアン・パバーンにて

　二日目は飛行機でルアン・パバーンへ。ここは、かつてランサーン王国の首都サワーであった。

　中世のラオ語の古書によると、ラオスの



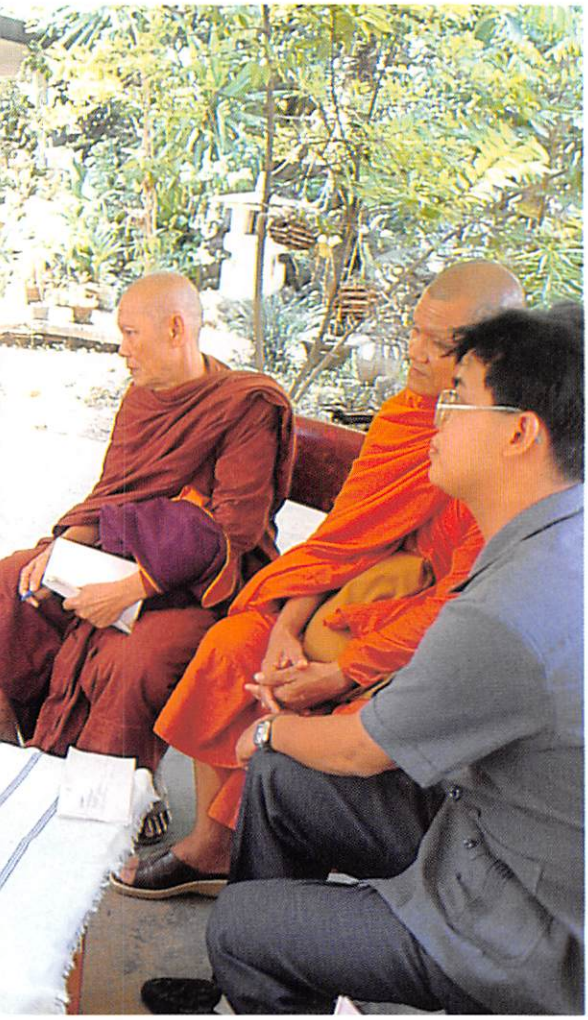
ルアン・パバーンの瞑想センター（タート・サンティチェディ）。壁にはリアルな"六道図"が描かれている。

仏教は、ランサーン王国をつくったファー・グム王の王妃ケオ・ケーンガンガーが、夫を通じて父親のクメール王に対して仏教使節団の派遣を要請したことに始まるとされている。当時クメール帝国（カンボジア）の住民の間では、スリランカから伝わった小乗仏教が信仰されていたのである。

一三五七年、王都サワーに仏教使節団到着。多数の経典とともにパバーン金仏像が寄贈された。そして、一五六〇年にヴィエン・チャンに遷都されたとき、サワーにはこのパバーン金仏像が残され、それにちなんでルアン・パバーンと呼ばれるようになったと伝えられる。

しかし、実際は小乗仏教伝来よりもはるかに昔、AD六九年ころに大乗仏教への信仰が漢族を経て民間の間に広まったということがわかっている。そして、ラオ族がシェントーンに住みついてから、次第に大乗仏教への信仰を捨てて、もともとのアミニズムに戻っていったのだそうである。

ここルアン・パバーンでは、いろいろな寺院を訪問し歓迎された。ワット・シェントーン、ワット・セーン、ワット・ヴィス





タート・パトゥム



ワット・シェントーン

ン、ワット・パバートタイである。ワットとは寺院という意味。

その他、聖なる山といわれるプーシーに登り、また旧王宮である王宮博物館へも。ただし、尊師は王宮博物館など、

「行っても無駄。」

として、自動車から降りられなかった。もっともこれはラオスの外務省の方でスケジュールを組んだだけであって、日本においても外国においても、尊師が宗教的なところ以外に出向かれないのはごく普通のことなのだ。

さて、ここルアン・パバーンのホテルでは、ラオ仏教協会の出家修行者（僧）の方々と対談された。その中の一人は、ラオスで一番の瞑想家とされるサーリー師である。

◆対談──瞑想ステージについて

（尊師）仏教には四つの瞑想ステージがあると思いますが、その第二、第三、第四の細かい定義については、ラオスの仏教ではどのように考えているのでしょうか？

（僧）四つのステージとは大きく分ければ





二つのステージになります。サマタパバナ、これが第一のステージです。これは、わたしたちの体、そして心を極めて平和な状態にします。

二つ目は、次のことに対して正確な理解を得ることです。その次のことというのは、肉体、マッシィ（「哀れみ」などの意味であるが、本来ここに「感覚」が来なければならないので、ラオ語から英語に直す段階で正確に言葉が伝わっていない可能性がある）、三番目が心、マインド。そして四番目が法、ダルマです。

まず第一のステージは心、そして言葉、体を非常にピースフルなものにしなくてはなりません。その第一段階を通過しなければ、第二段階には行けません。そして、それらすべての段階についてはっきりと正確に理解するなら、幸福でかつ至福の状態に至ることができます。」

〈尊師〉 四念処だな（これはオウム真理教のサマナ〈出家修行者〉に対してのお言葉）。

〈僧〉 瞑想の間は心に集中しなくてはなりません。我々自身のことに関しては何も考えてはいけません。そして、ハートの下に



あるスピリット、魂によってすべてを見ることができなければそれは成功ではなく、魂を通じてすべてを見ることができれば、これらの段階において成功したということができます。二つは一緒に進んでいきます。サマタというのは静けさのことです。」

（尊師）もう一つは？

（僧）イパッツナ。霊的、精神的洞察力、サマタは静けさ、寂静、寂止です。

（尊師）寂止と正観だね（と、これもサマナに対して）。

（僧）この二つを合わせて瞑想といいます。魂を通じて我々の体を見るなば、それは苦であると見えます。

（尊師）これは四念処観だな。

（僧）この四つの段階すべてを見るならばそれは成功であり、エンライトメントに向かうことになります。心を通じてすべてを見ることができれば、あらゆる欲求を持たなくなるでしょう。次に、復讐したり、対立したり、戦うことを望まなくなります。この段階にきて、怠けることなく、消極的であることなく、一生懸命働くようになり、そして活動的になります。五番目の、最後



のステージで、魂によってすべてを見、すべてについて疑うことなく、すべてについて確信があるようになります。

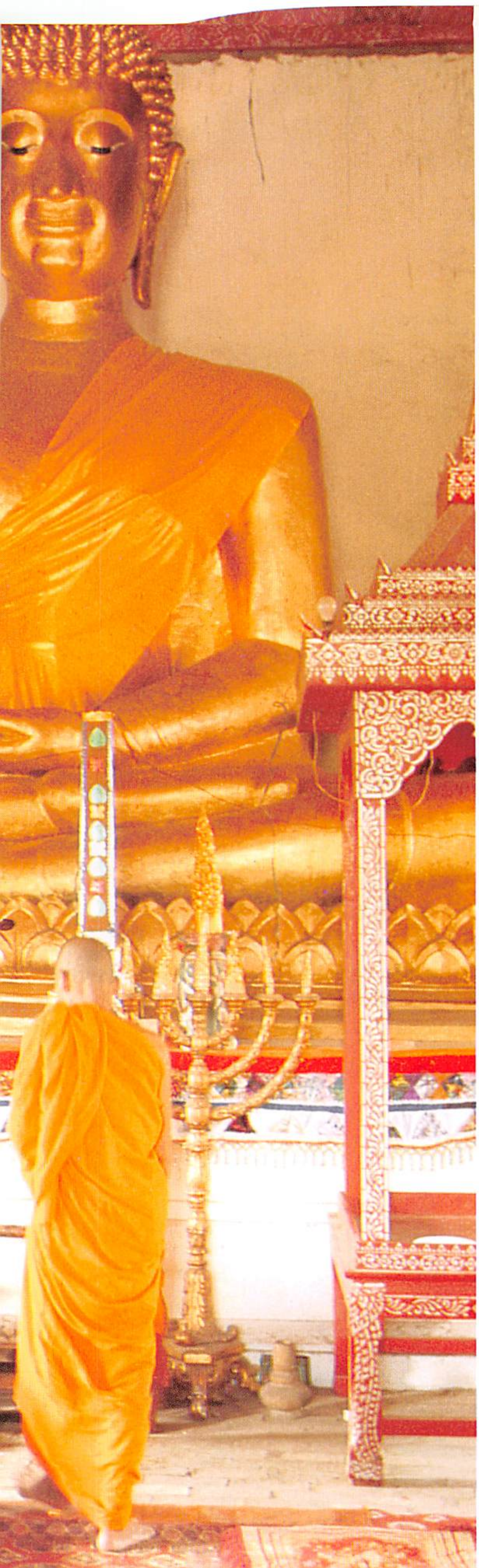
この最後のステージ――これは四禅定の第四段階であり、阿羅漢＝覚者を表わしていることが話からわかったが、これについて、尊師の方から疑問が投げかけられた。

（尊師） デーヴァダッタは最終ステージに到達し、覚者の称号をサキャ神賢に与えられたにかかわらず、サキャ神賢と対立するようになります。これについてはどう考えていらっしゃいますか？

なぜ尊師がこういう質問をされたかというと、ご存じのように彼らのいう最終ステージは、オウム真理教ではまだ最終ステージに到達する途中の段階とされているからである。

しかし、それについての明確な答えは得られないままとなった。ラオスに小乗の教えしかない以上無理ないのかもしれない。

その場にいたオウム真理教のサマナは、





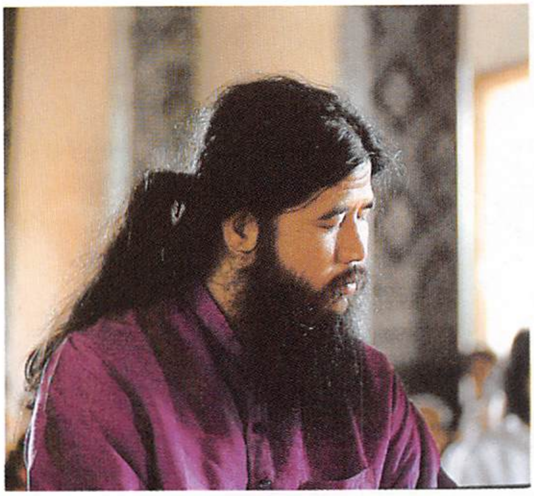
伝統的なバーシーの儀式による歓迎。貴重な客を迎えるときにのみ行なわれる。

みんな彼らの言っている内容については既に知っていたと思うし、それが途中までしか示していないということも理解したはずだ。

わたしは、尊師がいつもわかりやすく法を説いてくださるので、難しい仏典を読まなくても、法というものが根付いてきているんだということを感じた。そして、この小乗仏教だけでは満足できないということも。尊師が、小乗仏教の完成を越えて、さらに高いステージである最終解脱への道を示してくださっていることに感謝したい気持ちになった。

◆ラオスの仏教

八月二十八日、前述のプーミー・ヴンヴィチャ氏との会見に先立って、ラオス国家建設戦線主催の朝食会が催された。朝食会になったのは、ラオスの出家修行者が午後に一切の食事を取らないことになっているからである。同席したのはビシェット・シンハラット大師を中心とするラオ仏教協会の中心メンバーであるが、このとき、ラオス





の仏教の様子を知ることのできるやり取りがあったのでご紹介したい。

(尊師) ラオスの出家修行者は、どのような一日を過ごされるのでしょうか?

(ビシェット・シンハラット大師) 朝お祈りがあります。非常に早く四時ごろからです。六時から托鉢に行きます。在家の人から、ご飯とか穀物というような食物や、ビスケットなどの甘いものをいただきます。たまにはお香やお金や花などもいただくことがあります。何を施すかは在家の人たちの自由です。

昼間は勉強します。勉強の対象は、戒と法です。仏教の経典によって勉強するのです。それに加えて、在家の人たちを利する活動を行ないます。

夜七時に晩のお祈りがあります。それに加えて仏典の勉強、椰子の葉に書かれた仏典の勉強をします。そしてわたしたちは心を落ち着け、そして就寝、休むことになります。

これが一日の、毎日行なわれる日課です。

(尊師) 次に出家制度についてお聞きした



マロ寺



いと思います。どのように出家するのかと。つまり、自由に出家できるのか、あるいはお寺ごとに出家するのか、あるいは、仏教協会が寺ごとに割りふるのか。それから、どのように出家したての人は勉強しているのか――。

(ビシェット・シンハラット大師) 出家修行者になりたければ自由になることができます。完全に自由意志によります。それは、お寺ごとに申し込むのです。そして、出家した場合、他の出家修行者と同じように戒律、そして法を学ばなければなりません。新参者は仏教経典を学び、新参者として何をしなければならないかを学ばなくてはなりません。

(尊師) ちょっと下劣な質問になりますけど、出家修行者にはお給料というものはあるのでしょうか?

(ビシェット・シンハラット大師) ラオの仏教徒はサラリーもなければ、いかなる私的なお金も持っていません。プライベートなお金は持っていないのです。

(尊師) それはすごい。それでは、どうしても必要な生活必需品、個人的なものはどうなさっているんですか?

(ビシェット・シンハラット大師) すべて在家の人がくれます。

(尊師) 原始仏教の形態ですね、それは完全に。素晴らしいことです。ただ、今、何ていうかな、どんどん経済社会が発展していっている中で、その態勢は今後も維持できそうですか?

(ビシェット・シンハラット大師) 将来も維持しようとしています。

(尊師) ラオスの仏教と政治との関係はどうなっていますか?

(ビシェット・シンハラット大師) 今、政治とラオの仏教の関係は非常に良好です。なぜなら、我々は人々にどのように自由に生き、どのように正直に生き、どのようにこの国の中で生きるかということを教えているからです。

(尊師) 全人口に対する出家修行者の割合はどうなっていますか?

(ビシェット・シンハラット大師) 人口四百万人中二万人ほどです。

(尊師) 在家の信徒は仏教にどのようなことを期待しているのでしょうか? つまり、



恩恵をどのように受けているのですか?
(ビシェット・シンハラット大師) 精神的に幸福になることを望んでいます。
(尊師) 生活面ではどのような関係となっているのでしょうか? 葬式とか、結婚とか、出産とか、そういうものと仏教は関わっているのでしょうか?
(ビシェット・シンハラット大師) 結婚式や子供が生まれたとき、葬式のときには、出家修行者がその家に行き、その人を精神的に教育し、例えば、結婚式のときはお互いが誠実であるように説きます。子供が生まれたときも、そのためのリプリタモンクという特別な祈りを捧げます。だれかが死んだときには、その遺族に対して祈ります。それはもうこの人は死んだわけだから、それに対して悲しむのはよくないと。あまりにも悲しみに暮れるのではなく、穏やかな状態にするために祈ります。

♦未来仏マイトレーヤ

(ビシェット・シンハラット大師) 今度はあなた方の国の仏教や、あなた方の団体に



ついて知りたいと思います。

（尊師）それではまず、日本の仏教からご説明しましょう。日本には大乗仏教というものが昔伝えられました。しかし、それは原始仏教ではないのです。結局、仏教的土台、原始仏教が伝わっていなかったがために、その仏教は揺らぎ、神道と融合された形で発展してきました。神道というのは、要するにアニミズムです。揺らいだというのは、仏教が衰退したということです。

今から百数十年前に明治維新が起きて、そこで完全にいったん仏教が崩壊の危機に入りました。いわゆる廃仏棄釈運動です。これが一段落した後に、文化遺産として仏教寺院が尊重されるようになりました。

結局仏教というものはどうなったかというと、完全に儀式化されて、僧も修行しないし、勉強もしないし、ただ葬式とかそういうときに出るだけであって、だいたい現在では掛け持ちしています。いろいろな学校の教師と僧を掛け持ちしていたり、幼稚園を経営していたり。

で、オウム真理教とは何かというと、オウムとはA・U・Mという三音、これはサ



ンスクリット語で無常を表わしています。そして真理の教えと。では、このオウム真理教の教義とは一体何かというと、要するにパーリ仏典、これはスリランカに伝わったもの。それと北伝系のチベットに伝わっている小乗、大乗、それからタントラ・ヴァジラヤーナの教え、これを根付かせるために設立されている教団なのです。出家した弟子がだいたい七百名。そして日々真理の実践をしている在家の信徒が約五千名。オウム真理教の書籍類を読んでいる人はトータルして十万人くらいいます。

（ビシェット・シンハラット大師） ラオの仏教は、自分のお金を持つことなく、すべて人からのお布施で賄われていますが、あなたの団体はどうですか？

（尊師） 同じです。ただ、少し違うところもありますね。出版、アニメーションの制作、あるいは「死と転生」（真実の死と転生を再現したオペレッタ）の公演とか、すべて出家修行者がやっています。つまり、布教活動の一環として出家修行者がやっているわけです。だから、その出家修行者というのは、純粋に瞑想修行するときと、そ





タート・ダム

れから、そういう活動に従事するときと二期に分かれます。

ところで、未来仏についてはラオの仏教ではどう考えていらっしゃいますか？

（ビシェット・シンハラット大師）これは夢として信じているという面もあるのですが、我々の仏教では、仏陀が将来生まれるというふうに説いています。

（尊師）その仏陀の名前は？

（ビシェット・シンハラット大師）マイトレーヤ。

（尊師）いつ生まれることになっているのですか？

（ビシェット・シンハラット大師）我々の世界に既に四人の仏陀が現われました。釈迦牟尼は四番目です。また新しい仏陀が生まれるでしょう。わかりません、いつかは。待たなければなりません。

（尊師）では最後の質問です。このカルパは仏典では、人類がいったんものすごく減少して、それから十戒を守る人が生き延びて人類が発展するということになっているわけですけれど、それについてはどういう見解を持っておられるのでしょうか？

（ビシェット・シンハラット大師）マイトレーヤが現われることになっています。

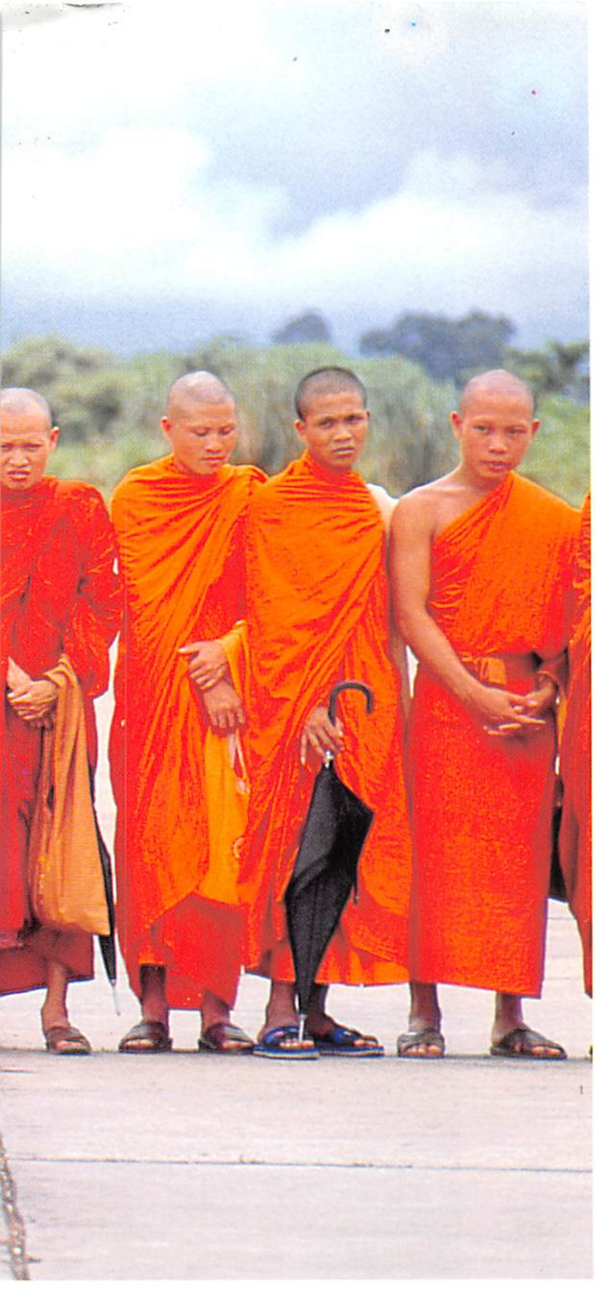
（尊師）人間の寿命が八万歳になったときにマイトレーヤが現われることになっているとされていますが。

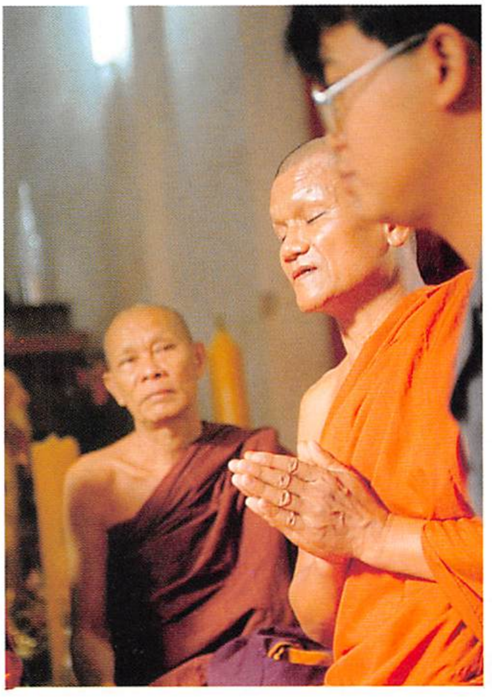
（ビシェット・シンハラット大師）人々の寿命が八万歳になったとき……同じ理論です。

（尊師）コップジャイカ（ありがとうございました）。

♦旅の終わりに——ラオスの未来は？

ラオスの旅を終えて、尊師は次のように語られた。





別れのとき……。

「仏教は伝播の仕方は国によっていろいろな形をとる。それは、仏教の教義体系そのものが深くて広く、いかなる階層の人に対しても、その教えを有しているからである。そして、ラオスに伝わった仏教は一般的にはスリランカ、カンボジアを経てラオスに伝来したといわれているが、率直なわたしの感想は、チベット仏教やスリランカから伝わったタイの仏教の影響も受けているように思われる。

それは特に瞑想のプロセスにその影響を見ることができる。

ラオス仏教の瞑想の第一段階は、四念処である。しかし、第一段階の瞑想を四念処と規定しているのは北伝系なのである。そして、この教えの順番はチベット仏教のスートラ乗において見ることができる。

ところで、ラオスに行って感じたことは、人々がのんびりしているということである。それは、小乗仏教の教えが浸透し、国民一人一人の心がリラックスしていることを意味しているのだとわたしは思った。日本にもっと真理の法を広め、日本人の心を早くリラックスさせてあげなければ、と考えた



ものである。」

八月二十日、わたしたちはヴィエン・チャン空港を飛び立ち、タイのバンコク経由で日本へと向かった。日本では、「死と転生」の東京公演が間近だ。きっと、サマナも信徒も忙しく救済のために動き回っているに違いない。バナナやヤシの木があるゆったりとしたラオスから、全く別の空間へと移動するような印象だ。

それにしても――。

いつになったら尊師はラオスの未来ヴィジョンの全貌を語ってくださるのだろうか？

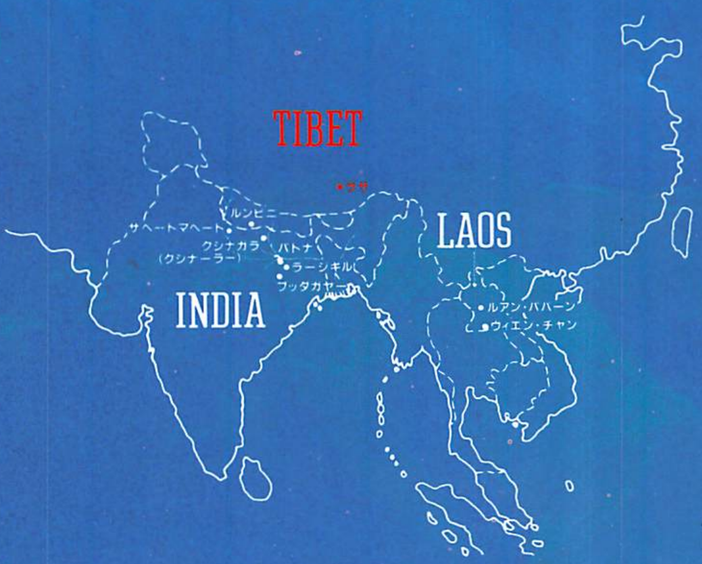
「おそらく、尊師とオウム真理教もそれに関係してくるんだろうな……。」

何となくそんな気がした。

約束の大地
THE DESTINED LANDS
チベット

TIBET







ヒマラヤの秘境
神々と悪魔の戦いの地

◆失われた国

「わぁ、見て、見て！」

成都（中国・四川省）からラサへと向かう途中の機内で、シャクティー・ドゥルガーが声を上げた。思わず外を見てみると、眼下に壮大なヒマラヤ山脈が連なっている。夏なお雪をいただいている山々が、朝日に輝いてひときわ美しい。わたしは、今さらのように、〝秘境チベット〟が確実に近付きつつあることを知った。

チベット――それはいうまでもなく、世界有数の、高度な精神文化が花開いた仏教国だ。実際に多くの成就者を生み出しているし、仏教発祥の地インドではとっくに消え去ってしまった仏典のほとんどすべてがチベット語に翻訳され、チベット大蔵経として今に伝えられている。

また、スリランカなどの国々に伝わった南伝仏教が、原始仏教に徹しているのに対し、この北伝系のチベット仏教には、後世の成就者といわれる人々の経典も含め、あ





チベットへの第一歩。素晴らしいことが起きそうな予感が……。

らゆる教えがそろっているという特色がある。したがって、それは、ある意味では濁っているともいえるし、ある意味では、深く突っ込んでいるともいえる。深く突っ込んでいるというのは、サキャ神賢（釈迦牟尼）がわずか八十年の生涯では説き切れなかった教えを、後世の成就者が補っているということなのである。

なお、タントラヤーナの教えに関していえば、チベットはチベット独特のものを持っているのだ、と尊師が言われている。

例を挙げるなら、チベット仏教ニンマ派の開祖、大聖パドマサンバヴァの教えである。彼は、肉体を捨てるときに、岩山に経典を隠した。それは時を経て、弟子たちによって発見されたが、そのときただ単に経典のみならず、大聖パドマサンバヴァの霊的インスピレーションとともにそれは弟子たちの手に渡ったのだといわれている。

さて、このチベットであるが、現在こういう名の国はこの地球上に存在しない。なぜなら、チベット人は今世紀になって祖国を失い、ある者は亡命して他国に住み、ある者は、中華人民共和国の支配を受けて、中華人民共和国のチベット自治区と呼ばれる所に住んでいるからである（一部は四川省、青海省に組み入れられている）。

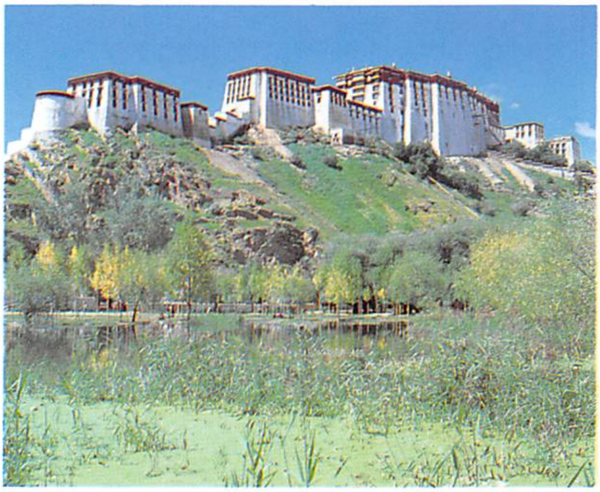
それまで、観音菩薩の生まれ変わりと仰がれるダライ・ラマ法王を政教一致の最高指導者として発展してきた宗教国チベットは、一九五一年の中国人民解放軍のチベット進駐以降、中国の支配を受け始めた。そのため、各地で抵抗運動が激化したが、五九年、ついにラサで大暴動が発生する。このとき、ダライ・ラマ十四世は、秘かにラサを脱出、インドへと亡命し、北インドにあるダラムサラーに亡命政府を樹立、現在に至っている。

一方、チベットは完全に侵略され、その国は事実上消滅させられてしまったのである。

そして、今回訪れようとしているのが、現在中華人民共和国の一部となっているチベットの都、ラサなのである。

「なぜか今回のチベットは興奮するな。大きな収穫があるぞ。」

という尊師のお言葉とともに日本を発って



ダライ・ラマの宮殿、ポタラ宮。主なきままに、いにしえの名残をとどめる。



ラサ市全景

きたが、今回は一体何が起こるのだろうか?

◆高山病との闘い

飛行機が高度を下げ始め、茶色い山肌が近付いてきた。一瞬不安になる。高山病は大丈夫だろうか、と。何しろ、ラサ＝クンガ空港の海抜は三六〇〇メートルなのだ。ちなみに、チベットの平均高度は四〇〇〇メートル以上になるという。

思ったとおり、一行のほとんどは、ラサ市内のホテルに着いて間もなく、高山病の洗礼を受けることになった。高山病とは、酸素量が少なく、気圧の低い高地に体が順応できずに起こる病気で、頭痛、めまい、吐き気、息切れ、けんたい感、咳、むくみなどが現われるが、その症状は人によって違う。

まず最初に、いつも重いカメラ、バッグを下げてタフに走り回っているTさんが酸欠状態で倒れた（平地に比べると酸素量は六四パーセント程度にまで下がっている）。

尊師が頭痛に見舞われた。アーチャリーも酸素吸入を受けた（ホテルにはちゃんと酸素が備え付けられている）。

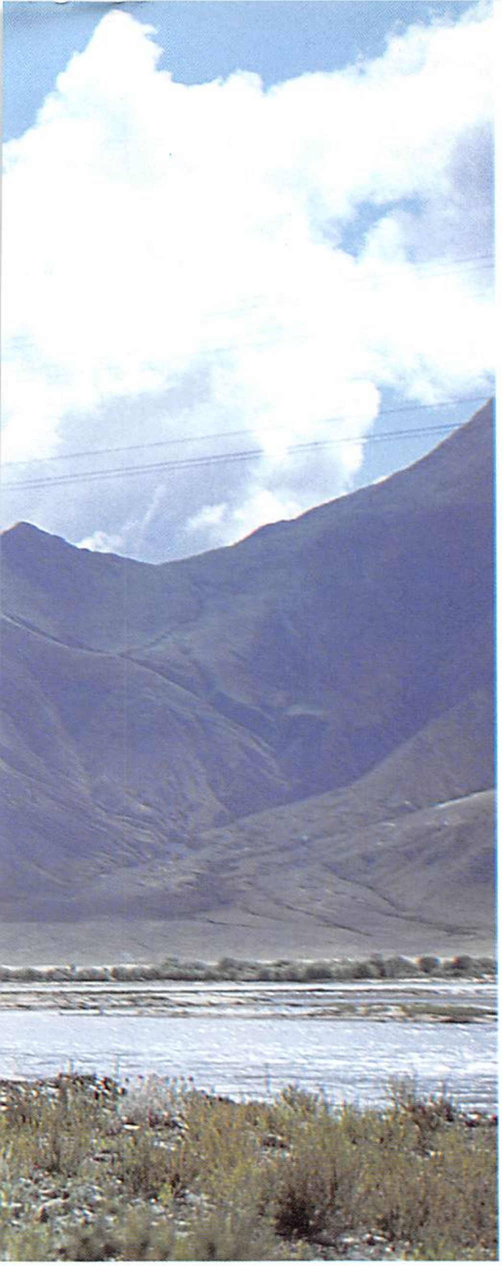
そして、気付いたときには眠っているはずの識華（二歳・四女）の様子がおかしい。いつも識華を診てくれていた同行の某医師は、既に自分が高山病にかかって動けなくなってしまっていたので、もう一人の医師、クリシュナナンダ師に来ていただく。

そして、クリシュナナンダ師が、東京のオウム真理教附属医院からはるばる持ってきたパルスオキシメーターという機器で彼女の血液中の酸素飽和度を調べたところ、平地だと九九～九八を示す値が時々七〇を切るほどに落ち込んでいたのだった。

尊師のご指示によって部屋に酸素を流し続け、事なきを得たが、高山病はあなどれ



幼児にとっての高地は特にきつい。





高山病を克服し、精力的に取材する弟子たち。

ないということを理解した。翌日から丸三日、ラサに滞在する予定であるが、先が思いやられ、気が重くなった。

ところが、わたしたちが高山病に振り回されている間にも尊師は、高山病にかかったご自身の体に綜制を加えることによって、その対策をお考えになっていたのである。夜になってから――といっても、ここでは十時くらいになって日が暮れるので、実際は真夜中になるが――、尊師は次のような指示を出された。

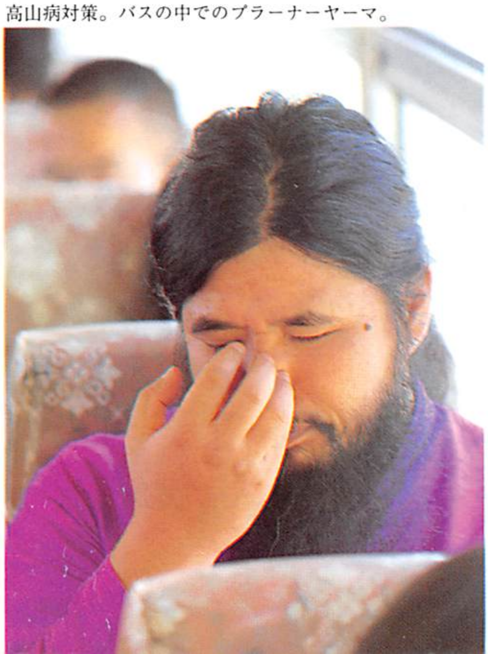
①　ここラサは非常に空気が乾燥している。一番怖いのは乾燥で、酸素を湿らせないで取り入れたような肺の痛み方をする。よって各自部屋ではバスタブにお湯を入れて乾燥を防ぐ。

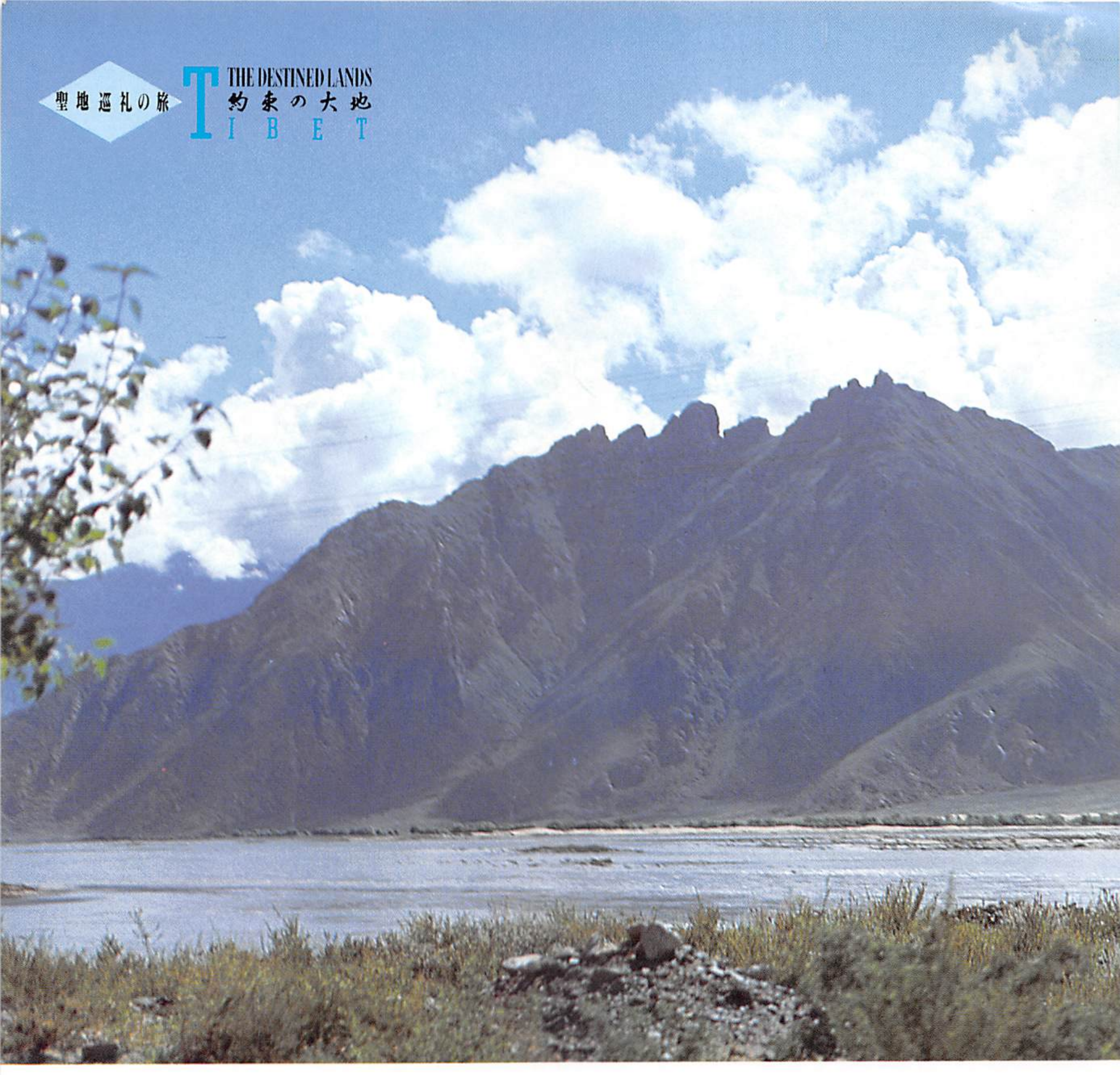
②　肺、横隔膜運動が阻害されるので、絶対横になって休んではならない。座ったまま休む。

③　乾燥が強くて、血管の中の水分が細胞の中に入って血管中の水分が不足してしまう。それを防ぐために、水分を多量に取る。ただし体が冷えることもよくないので、五〇度程度に温めたものを、少しずつ回数を多くして取ることが望ましい。

④　努めてクンバカ（保息）を入れたプラーナーヤーマ（調気法）を行なう。胸の中の

高山病対策。バスの中でのプラーナーヤーマ。





圧力を高くすると、酸素が血液中によく吸収される。

今回も尊師は、現代医学ではどうしようもない高山病を見事に克服されたのである。そして、尊師のアドバイスにより、全員が翌日の行動に支障がないくらいに回復したのであった。

♦息苦しい体制

さて、ラサに着いた当日は、ホテルから一歩も出なかったわたしたちも、翌日からは、いくつかのポイントを回ることにしていた。

このいくつか、というのは、たいてい午前中一～二カ所、それから食事をして午後一～二カ所で、それも、それぞれ二時間以内。自由旅行の許されていない（政府関係者の話によると、自由旅行の許可の出ないことはないが、難しいということだった）中華人民共和国の体制の息苦しさを感じさせた。しかも、中国人ガイドの他に、必ず政府関係者が同行するというものものしさ



なのだ。

このような中国側の体制が、予想以上の障害となるということを、最初の訪問地で思い知った。

その日の午前中、まず最初にギュメー学院へ行く予定であった。ここは、チベットの二大密教寺院の一つである。

チベット仏教では、小乗仏教を修めた者のみが密教、つまりタントラ・ヴァジラヤーナの修行へと入ることができるという決まりがある。ということは、このギュメー学院で密教の修行をしている僧は、かなりステージが高いはずなのだ。

そのことから、ステージの高い僧と会いたいという尊師のご希望もあり、このギュメー学院では僧との会談の予定を組んでもらっていたのである。

ところが、あるトラブルのために、僧との会談はおろか、ギュメー学院へ行くことすらできなくなってしまったのだ。

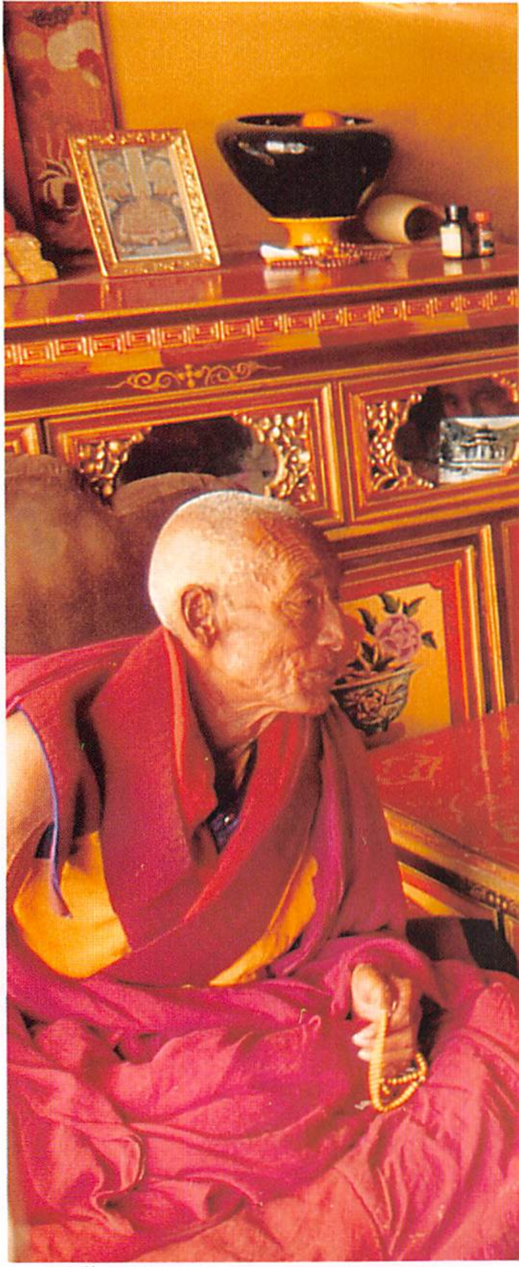
わたしたちがギュメー学院へ入っていこうとしたところ、ガイドがしきりに、

「ここはギュメー学院ではない。」

と言う。しかし、時間もないし、地図を見



ロサン・プンソム師



厳しい条件のもとで。

ても、現地の人に聞いても、そこがギュメー学院であることは確かであったので、そのまま進もうとしたところ、なんと、
「勝手にそのようなことをするのなら、公安局へ連絡する。」
と言うではないか。

結局は、こちら側が行きたいと思っていたギュメー学院と、ガイドが手配していたギュメー学院が全く違うところだったということがわかったのだが、そのギュメー学院は予定外ということで、行けずじまいになってしまった。中国政府の許可なくしては、どこにも行けないのである。

この一件で、ガイドというのは、監視役を兼ねているんだな、ということに気付いた。

◆高僧との会見

仕方なく、ギュメー学院をあきらめたわたしたちは、次に大昭寺を訪ねた。この寺は、チベットに初めて仏教が伝えられたという七世紀に建立されたもので、チベット仏教の最高位に位置している重要な寺である。

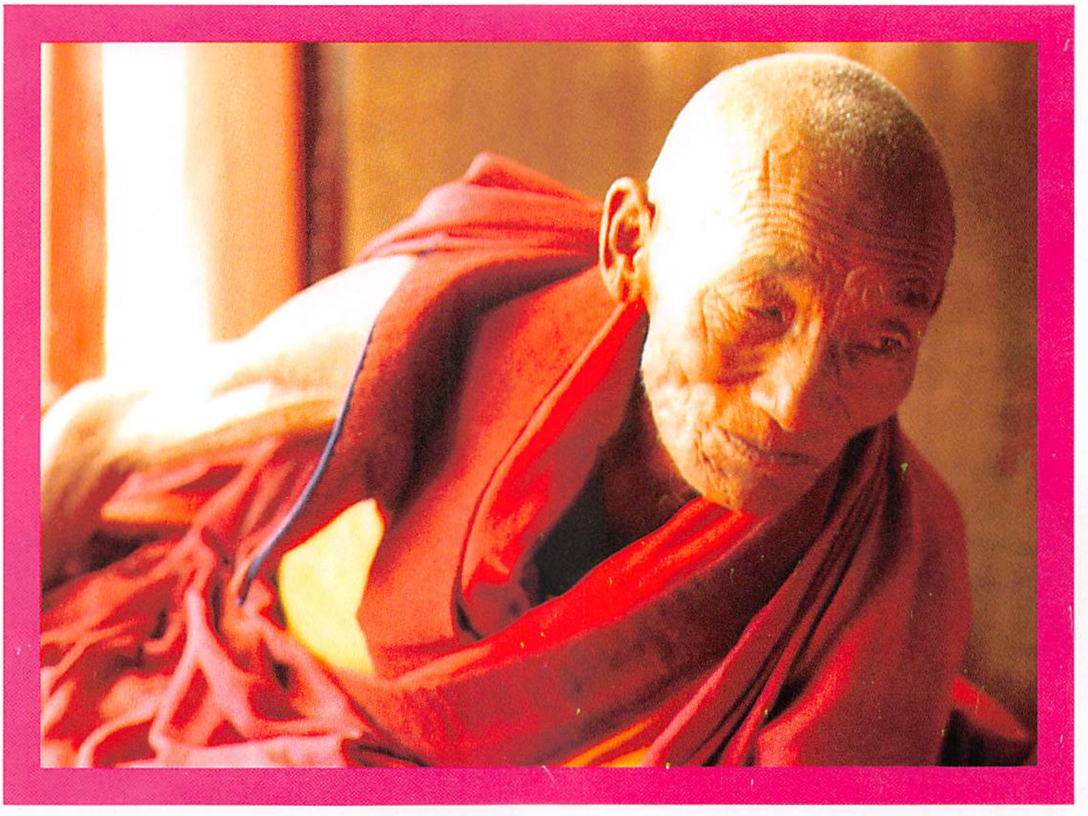


ここの入り口にある石畳の上では、多くのチベット人が熱心に五体投地（立位礼拝）を繰り返しており、内部へ入ろうものなら、巡礼者で身動きすらできないほどにごった返している。

本尊は、チベットを統一して吐蕃王国を建てたソンツェン・ガンポ王の妃、文成公主が唐から嫁いでくるときに持ってきたと伝えられるサキャ神賢像である。この文成公主とソンツェン・ガンポ王のもう一人の妃、ネパールの王女ティツンがチベットに仏教を伝えたといわれている。

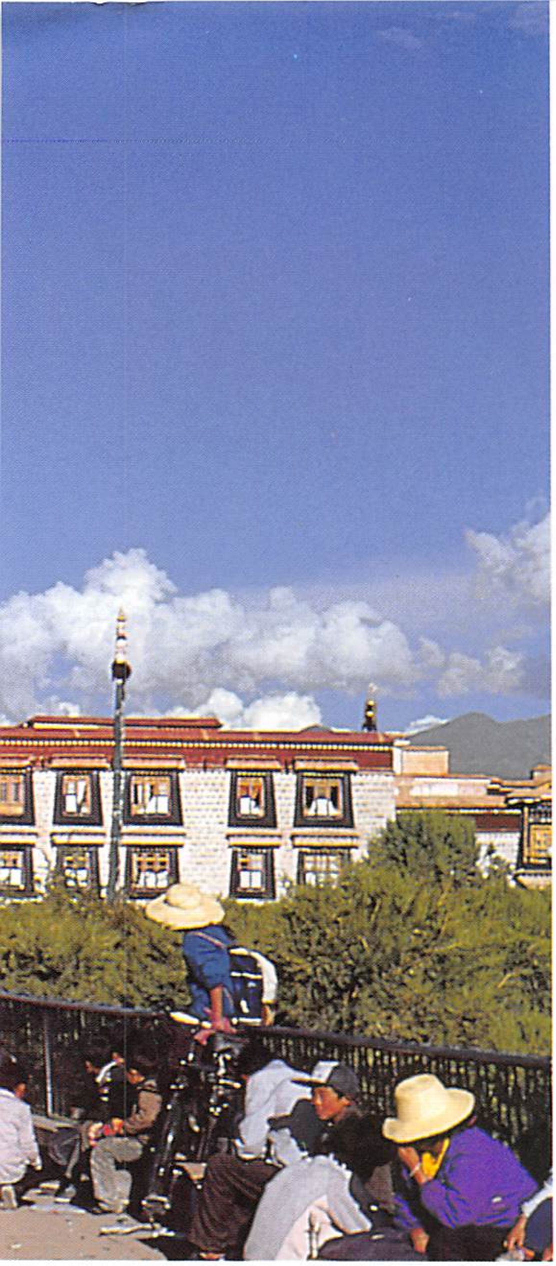
ここで、尊師は、ガイドと政府関係者に、大昭寺の僧院長と会いたいという意向を伝えられた。最終的に、それは認められたが厳しい条件が付けられていた。

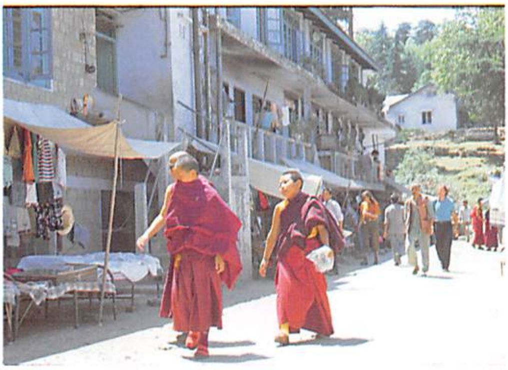
まず、会見時間がわずかに十分（最初は五分といわれたのを、何とか延ばしてもらった）であるということ、政治的な話を一切してはいけないということ、ビデオ撮影もテープ録音もしてはいけないということ、オウム真理教側の入室は尊師以下数名にとどめるということ、ガイド、政府関係者が立ち会うということ……先程のギュメー学



院の一件も含め、これではいまだに厳戒体制が敷かれているんじゃないかと錯覚するほど、厳しい状況である。

中国に侵略されて以来長いことチベット仏教もチベット人も迫害され続け、多くの寺院が破壊され、多くの僧が捕えられたり殺されたりしたと聞いていたが、かなり自由が認められてきたとされる現在でさえこの有り様だとしたら、以前のひどい状態というのは想像を絶するものであったに違いない。九年間も牢獄につながれ、片耳を腐らせてしまったというパンチェン・ラマのエピソードもそのころのものである。パンチェン・ラマとは、ダライ・ラマ法王に次ぐ地位を占める高僧で、ダライ・ラマ法王が観音菩薩の化身とされるのに対し、阿弥陀如来の化身とされている。法王と同じように、代々その生まれ変わりとされる魂がその地位に就いてきたが、一年前に亡くなったパンチェン・ラマ七世の生まれ変わりは、まだ発見されていない。





異境にあるチベット仏教の町、ダラムサラー。
故郷を知らないチベット人が増えている（インド・ダラムサラーで）。





大昭寺前で五体投地（立位礼拝）する人々。

◆亡国の悲しみ

僧院長であられるロサン・プンソム師に対して、尊師は、

「わたしは日本からやってきました。カール・リンポチェ（大昭寺の僧も、カール・リンポチェが亡命先のインド、ダージリンで八九年に亡くなったことなどをよく知っていた）の前生の弟子で、多くのゲールク


大昭寺

派、カギュ派のラマを知っています。ダライ・ラマ法王とも近い関係にありますが、今回は政治的な話はできないので、法王について触れることは避けさせていただきます。今日は、宗教的な話、仏教的な話をしたいと思います。」

と前置きされてから、

「ヒナヤーナでは、十七形状界（色界）、四非形状界（無色界）があるとされていますが、マハーヤーナ、タントラ・ヴァジラヤーナではどうなっているのでしょうか?」

と、質問された。驚いたことに、こういう教義上の話になった途端、通訳をしていた僧が教義をあまり知らないらしく、意思の伝達に苦労するようになってしまった。教学ができていないのだ。教学さえできていれば、たとえそのものズバリの言葉を知らなくても、他の説明から察しがついてしかるべきである。

インドのダラムサラーで会った同じ年ごろの僧が、

「非常に経典などの勉強が厳しい。結核で入院しなければならないことがあったが、そのときもベッドに横たわったまま勉強を



続けなければならなかったほどだった。」
と語っていたのに比べ、著しい違いを感じた。

亡命政府の宗教局の局長であるカルマ・ゲーリックも、五、六歳のときに亡命して、ダラムサラーで仏教を学んでいるが、経典をすべて暗記してしまっていた。ダライ・ラマ法王の率いるチベット亡命政府は、チベットの精神文化を受け継ぐ僧の育成と保護に力を入れているので、その成果が現われているのだろう。

反対に、中国領となってしまったチベットでは、いまだに思うに任せないところが多々あるに違いない。現在に至っても、国境を接するネパールやインドへの亡命者が出ているし、わたしもダラムサラーで亡命したばかりの何人かのチベット人に会ったことがあるが、今やっとその背景にある根深いものがわかったような気がした。何よりも、中国側がチベットの統治をしやすいようにという意図から、チベット人の心のよりどころとなっているチベット仏教の中味を抹殺し、形ばかりのものとしようとしているのだということを、ひしひしと感じた。

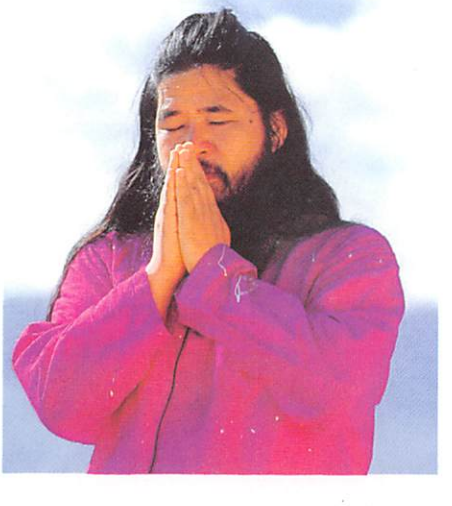
この大昭寺以外の寺でも、自分のいる寺





のいわれや、仏像の名前を知らない僧などを見かけている。痛ましさを感じた。

　また、一般の人たちの生活、モラル等にしてもはるかに亡命政府の指導を受けているチベット人の方が上であるという印象を持った。極端な例を挙げるならば、わたしはダラムサラーでこれまでの六年間にチベット人の乞食というものを一人も見かけてはいない。ただ、一度だけ経典の印刷所でお金を施してもらいにきた老女に出会ったが、彼女はその月に中国から亡命してきたばかりでお金が全くなく、他のチベット人の好意によって援助を受けているのだということであった。

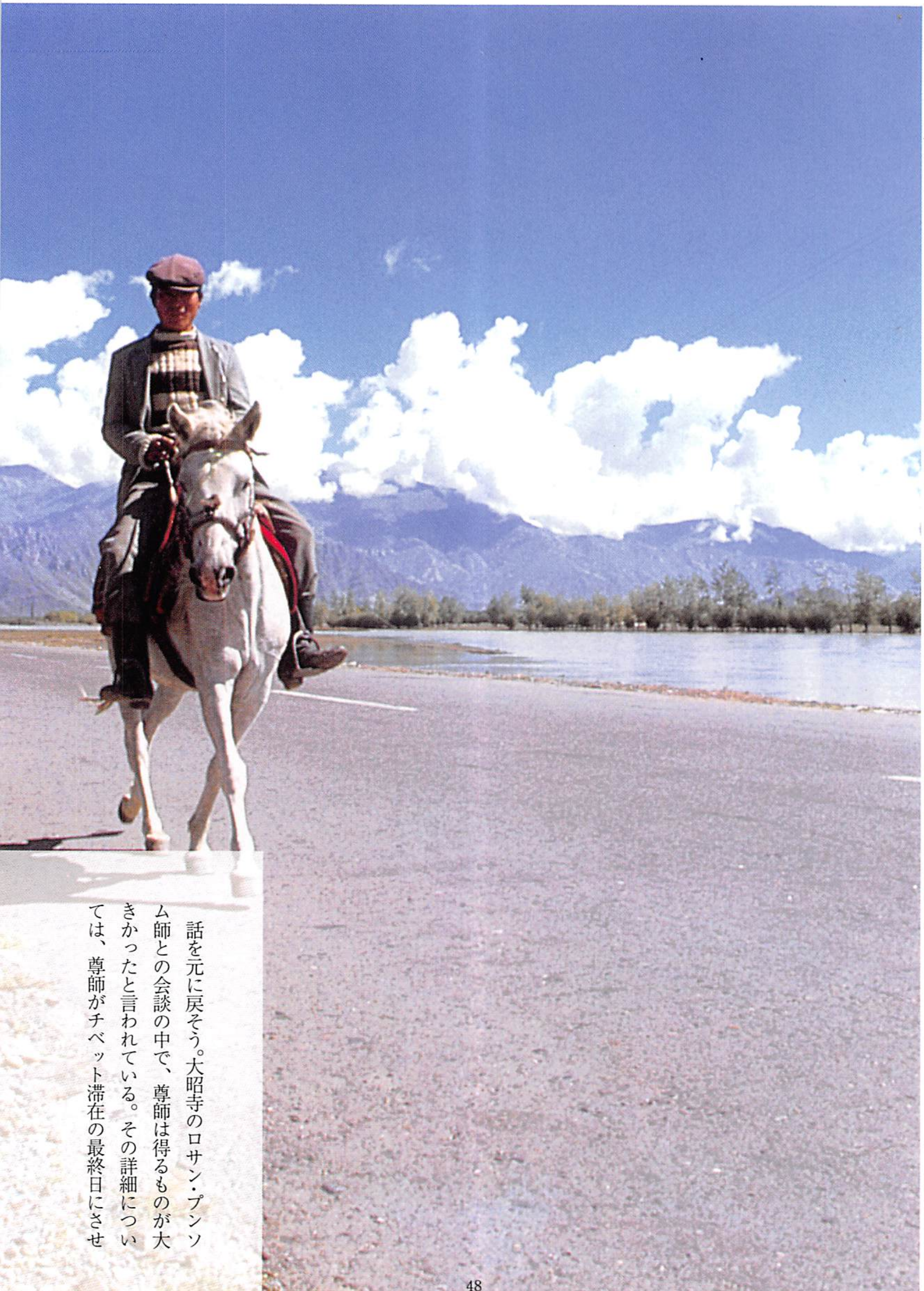




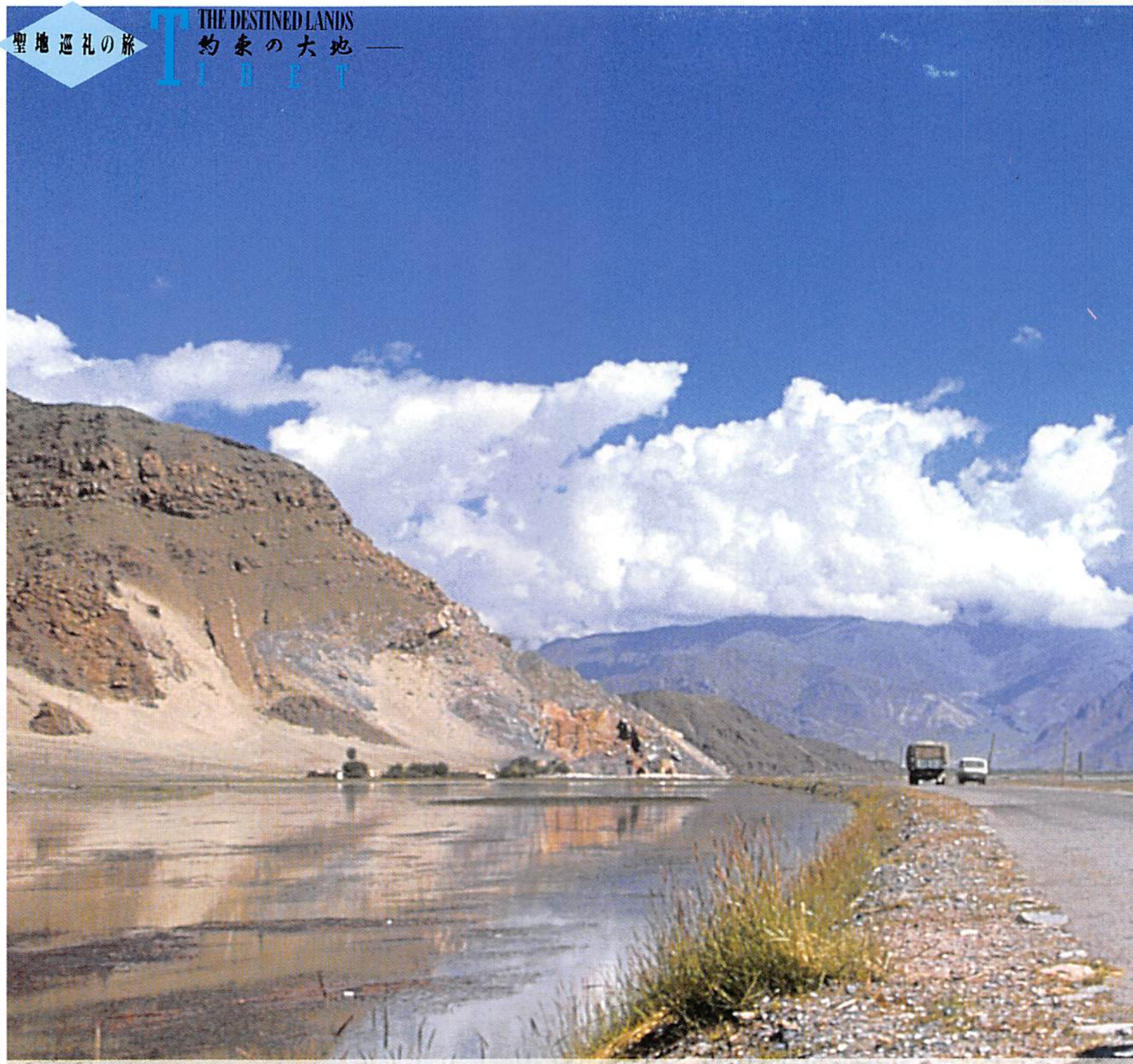


しかし、ここラサでは、観光客にまとわり付いてお金をもらおうとするチベット人が多い。子供までがその中に入っているのである。

子供の教育にしてもしかり。チベット人に対する教育は、漢民族に対する教育と比べて、かなり質が落ちているといわれている。一方、ダラムサラーでは、例えば国語一つとっても、亡命生活の中で成長してゆかねばならない子供たちが、将来困らないようにということで、英語、ヒンドゥー語を学ばせ、併せてチベット文化を守るためにチベット語の学習にも力を入れさせているのだ。



話を元に戻そう。大昭寺のロサン・プンソム師との会談の中で、尊師は得るものが大きかったと言われている。その詳細については、尊師がチベット滞在の最終日にさせ



ていただいたインタビューに答えて語っておられるので、併せてお読みいただきたい。

「いろいろな制約から、思うように話せなかったけど、ダライ・ラマ法王の名前を一回だけ出したときに、僧院長のアストラル（内的世界の一つ。仏教では色界という）がパッと光ったんだよ。」

という尊師のお言葉が印象に残った。彼も、ダライ・ラマ法王がチベットに帰り、チベットが独立国家として真理の実践を行なえる日がやってくるのを願ってじっと耐えているのだろう。ロサン・プンツム師自身は年老い、既に心臓が弱ってきているという。

チベット滞在の三日間、わたしたちは多くのことを経験し、多くのことを知った。しかし、紙面の都合上、すべてをここに書くことができない。大変残念であるが、それは後日に譲りたいと思う。

だが、チベット滞在最後の夜に、尊師にインタビューをさせていただき、尊師にとってのチベットについて語っていただいたので、その模様は何としてでも載せさせていただこう。





◆神々の住むところ

（尊師）チベットは神々の住むところであった。これは間違いない。わたしが、ここに着いた日から、オラクル現象がずいぶん起きて、いろいろな神とか悪魔とかわたしの体を出入りしたわけだけれど、いまだかってこのチベットでは神対悪魔の戦いが続いているというのがわたしの印象です。で、その神対悪魔の戦いが続いている結果として、このチベットが存在していると。

（ヤソーダラー）つまり、完全にはチベットがつぶされていない、という意味ですか？

（尊師）完全につぶされてはいない。チベットはチベットとして、ちゃんと生き残っています。ただ、どんどんどん神の抵抗力が弱まっているという感じがします。それを救い得るのはやはりダライ・ラマ法王以外にあり得ないんじゃないかなと。

（ヤソーダラー）そういう神と悪魔の戦いなどは、どういうふうに感じられるんですか？

（尊師）わたしの場合は、見て聞いて感じ



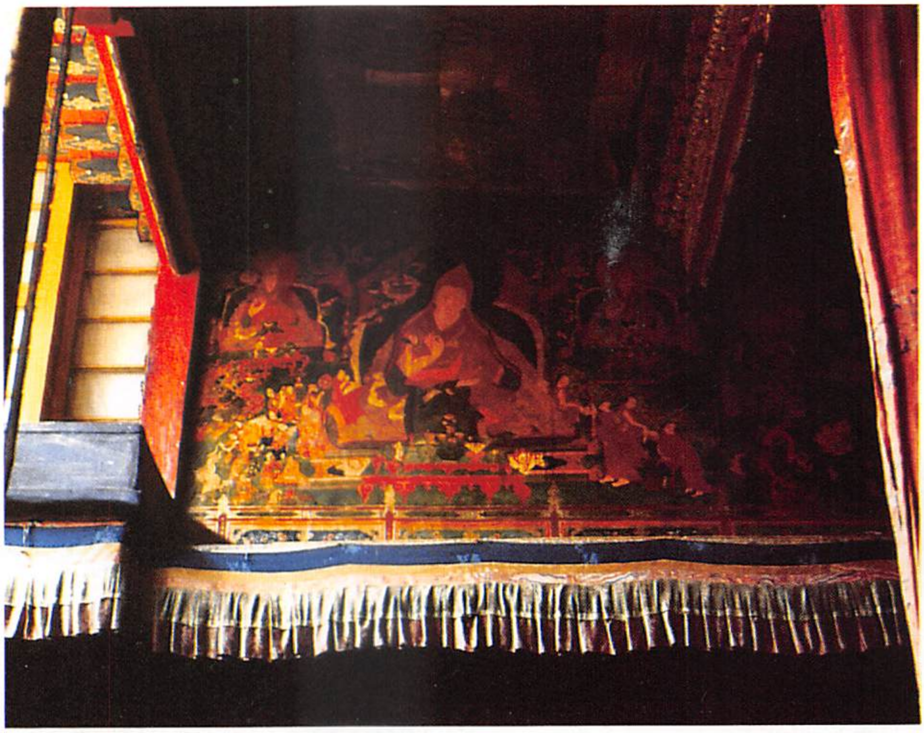
るんですよ。普通と同じように見たり聞いたりするんだね。アストラルをね。そういう意味で、ここに来れば空の理論がもう即、瞬間的に理解できるし――。

(ヤソーダラー) その空の理論とは、どういうことを瞬間的にご理解されたのでしょうか?

(尊師) 要するに、すべては経験の幻影によってどの情報を取るかということで輪廻転生も含めて決まっているということだよね、結論からいうと。だから、それを空の瞑想によって瞬時に破壊することもできるし、それを知らない人は、その幻影をわたし、自己だと考えて苦しみの世界に転生しなければならないと。

(ヤソーダラー) これがタントラ・ヴァジラヤーナの高度な瞑想技術だということをお聞きしましたけれども、それは努力して得られるものなんでしょうか?

(尊師) それはグルが存在すれば得られるわけだけれども。まず、その説明をしなくちゃならないわけだけど、まず、ヒナヤーナの教えで土台を固めると。そして、ディーティの瞑想、つまり、神々に至る瞑想によっ



て、――。

（ヤソーダラー）それはツァンダリーとか、そういう瞑想ですね？

（尊師）オウムの場合は、ツァンダリーとかグルヨーガとか、グルヨーガ・マイトレーヤの瞑想だとかがあるよね。まずそれらの瞑想によって、意識を高い世界へと合わせていくと。そして、最終的にはチベット仏教のカギュ派の場合、マハー・ムドラーというものがあると、ニンマ派の場合、ゾクチェンというのがあるわけだけれども、これは何かというと、要するに空の瞑想なんだよ。無色の瞑想と。――オウム真理教ではこの言葉を使っていないから、非形状界の瞑想という方が正しいのかもしれないけれど、つまり、データに対しての綜制を加えるということだ。では、これは南伝系ではどういう言葉を使っているのかというと、有熟考にして有吟味と。これから入っていくわけだね。つまり。第一静慮ということだね。そして、第二静慮、第三静慮、第四静慮と入っていくというプロセスだよね。だからこの空の瞑想ができるようになったら――。

（ヤソーダラー）同じステージにあるということですね。

（尊師）そうです。空の瞑想イコール第一静慮だと考えて間違いありません。

（ヤソーダラー）第一静慮については、皆さんわかっていらっしゃると思いますけれども……（本書・インド編参照）。

（尊師）ただ、熟考するということは、大変難しいわけね。というのは、弟子たちでも熟考が得意な人というのはほとんどいない。だいたい情報に流されてその情報を――先程言った経験イコールわたしだと考えてしまう。情報というのは経験だからね。別の言い方をすれば。例えば、おいしい料理の番組を見たと。もう、その人はテレビによって経験するわけだよね。で、そのものがおいしいと考えてそこに食べに行ったり、あるいは、その料理を作って食べてみると。そうすると、その前にテレビによって経験しているから、それをおいしいと考えてしまう。しかし、それは幻影である。もし、テレビでそれはうまくないんだという情報を得ていたら、その人は作らないだろうし、食べたとしても、うまくないと考



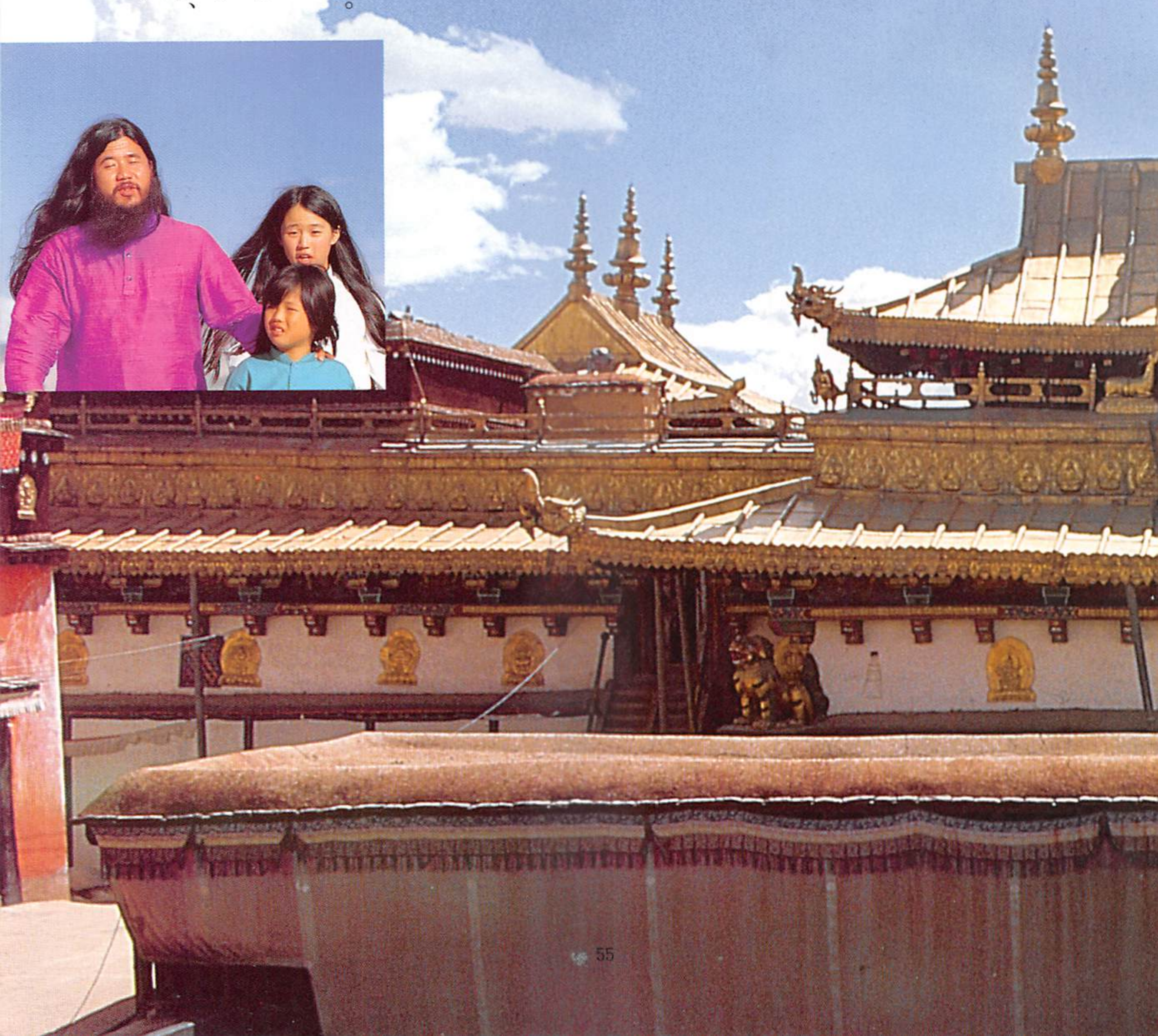
えるだろう。ところが、有熟考にして有吟味の場合は、なぜそれがおいしいといえるのかとか、なぜおいしくないといえるのかとか、その材料は一体どうなのかと、それがどのように変化して味覚が変わっていくのかというところまで検討する。ゆえに、それがおいしいとか、おいしくないという経験によって生じたものはすべて幻影であることが理解できる、ということだね。

◆矛盾のない根源的な教え

（尊師）今回チベットへ来て、修行上の大きなメリットがいろいろあったわけだけれども、その中の一つが、マハー・ニルヴァーナの定義がわたしの考えていたものでよかったということだよね。それが確立したということ。

（ヤソーダラー）そこのところをちょっと。

（尊師）これは、大昭寺のヘッドであるロサン・プンソムという方とお会いしたときに、ブッダ・フッド、つまりマハー・ニルヴァーナについての話をしたわけだけれど、そのマハー・ニルヴァーナの定義が、ヒナ





ヤーナ、マハーヤーナ、タントラ・ヴァジラヤーナとともに同じであると。で、そのマハー・ニルヴァーナの状態というものが、今オウム真理教で説いている真我独存位の状態、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜の状態であるということ、これも一致していると。これから考えて、今のオウム真理教の教えそのものの体系に矛盾がなく、しかも、世界宗教の根源的な教えであるという確信を得たというのがわたしにとっての一つの大きなメリットであった。

（ヤソーダラー） 今まで経典群でそれを確かめられていたということはなかったのですか？ すべて過去世からの経験で打ち立てていた教義が一致したということですか？

（尊師） そうだね。ま、経典群によるチェックはしてはいたけれども、例えば、マハー・ニルヴァーナというのは、こういう状態であるという教えはないんだよね。で、近ごろ、どうもそうじゃないかなと思い出したのは、パーリテキストをチェックしていて、アートマンという言葉がよく出てくるんだね。このアートマンというのは、これはよく使われているヨーガの言葉で〝真我〟と



いう意味なんだよ。このアートマンが、例えばアートマンと合一するとか、アートマンによって煩悩を破壊させるとか、アートマンの独存位に到達するというような教えが、例えば『転輪獅子吼経』なんかに出てくるわけだよ。で、「やはりそうか」と。つまり、ヨーガと仏教は同じ流れであるということに確信を持ったんだね。そのときに。わたしの、オウム真理教の教えというのは、どうしてヨーガと仏教が同じ流れにあるんだ、と、よく質問されるけれど、それは愚問である、と。というのは、真理勝者（如来）の道は一本の道であると。つまり、まず覚者（＝供養値魂〈阿羅漢〉＝三つの状態に目覚めた者、三つの状態とは絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜。この場合、小乗における覚者を指している）に到達するためには、その純粋アートマンの状態に至るべきなんだということなんだよね。で、まあそういう土台があってチベットへ来て、そのマハー・ニルヴァーナの状態を聞いて、マハー・ニルヴァーナの状態とヨーガの最終段階が完全な一致を見たということ。ま、実際は完全な一致とは言いづらいんだけど





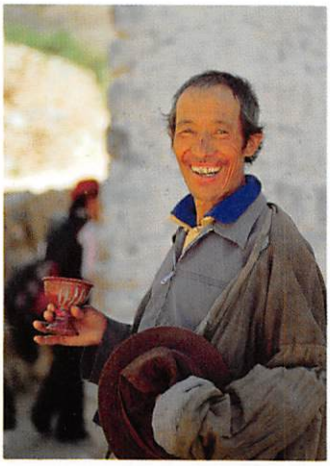
ね。その言いづらい理由というのは何かというと、化身の数とか、それがちょっと違うわけだけれど、つまり、あの覚者の状態でよしとしていたものを真理勝者の状態にまでもってこなければならないと。これはもう際限ない功徳が必要なんだけど。

（ヤソーダラー） ヨーガだとマハー・ニルヴァーナに入れないということだったんだと思うんですけど、今までは。

（尊師） だから今言っているじゃない。つまり覚者から真理勝者への道、これがまさにヨーガと仏教の違い。無数の化身を出すとか、あるいは空の広大なる広がりとかそういうものを追求していく修行体系が仏教なんだよね。別の言い方をすれば。

（ヤソーダラー） それが大乗の修行、四無量心を培う修行……。

（尊師） そうだね。ま、大乗の修行、四無量心を培う修行によってその人の空、つまり無色、非形状の状態は広がり、それに応じて当然形状の化身の数、報身の数、これが変わってくるということなんだね。ま、それが一つの大きなポイント。はっきり言って僧院長とは十数分しか話すことができな





かったんだけれど、こちらとしては土台が固まっているから、一の話ですべてがわかってしまうというか。

（ヤソーダラー）で、わたしたちは土台が固まっていないから「どうしてこんな質問をするんだろう」というような感じがしてしまって。

（尊師）そうでしょ。それはまあ、全く過去世からの流れが違うから。

この「マハー・ニルヴァーナの状態とヨーガの最終段階が完全な一致を見た」という意味がわかりづらかったので、後に個人的にお聞きしてみたところ、次のように語ってくださったので付け加えておく。

◆ヨーガの最終段階は仏教に至る

ヨーガの最終段階といわれる〝アートマンとブラフマンの合一〟イコール独覚の状態、供養値魂の状態であり、神聖行の成就である。これはオウム真理教でいうならマハー・ムドラーの成就ということになる。

一方、仏教の大乗の修行は、四無量心に



よって心を広く大きく高く深くしていく。これによって、形状界からスライドして上に上がっていく。それにしたがって、サンボカカーヤ（形状界の身体＝報身）が増え、それと同時に、ニルマナカーヤ（変化身）の数も増えていく。

そして、アカニシタ天という形状界の最上天に至ると、サンボカカーヤもニルマナカーヤも無数となる。しかし意識の中心は形状界にある。

このように、神聖世界からアカニシタ天にまで上がっていく過程で、同じようにコーザル世界も上がっていく。つまり、空無辺、識別無辺、無所有境、非認知非非認知境へと入っていく。

そして最後の非認知非非認知境が終わった段階がマハー・ニルヴァーナである。そのとき、現象に関して完全に無頓着になるので、形に実体がなくなる。ということは、形状界の実体が破壊されるということで、同じように欲界（現象界）の実体も破壊されてしまうのである。

ということは、さらに、非形状界、形状界、欲界からも解放されるということであ



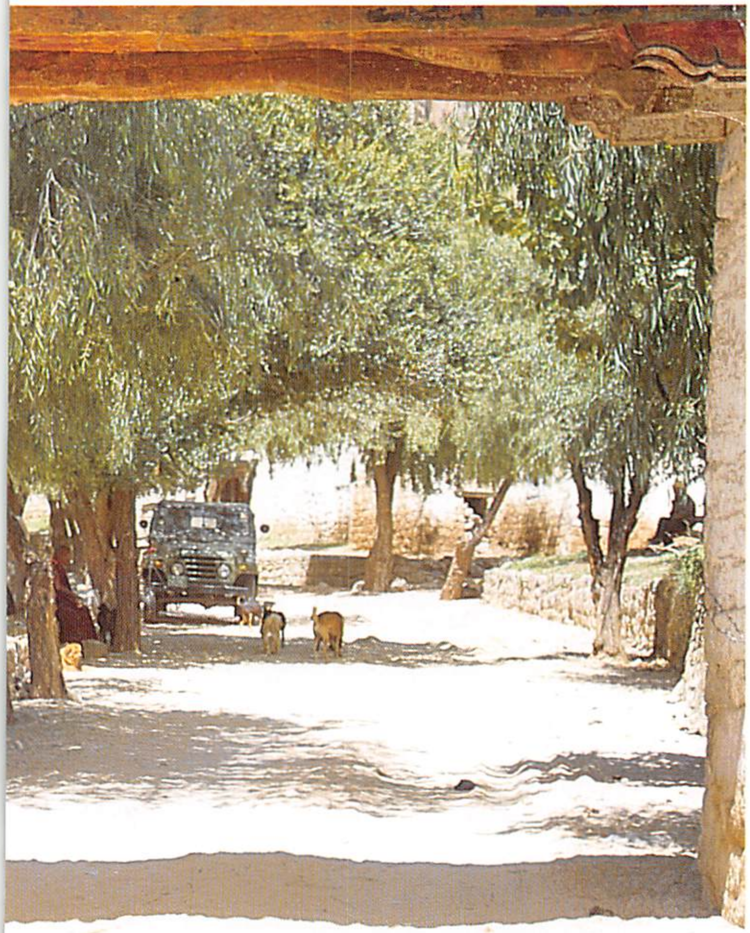
り、完全に解放されるとき、すべてが自由になるのである。

逆にいえば、どのような認知も形成することができるのである。

光源があると考えてみよう。この光を発している部分が真我である。そして、発されている光がコーザル世界（光がデータとして存在する世界＝無色界）。その発されている光にフィルターがあると考えてみよう。そのとき光はフィルターを通して対象に認識させる。このフィルターを通したものが、形状界の身体なのである。

つまり、色の付いた光が何かに照らし出されるとき、照らし出された先が凹凸を持っていると、凹凸があるように見える。これがニルマナカーヤのわたしたちなのだ。

そして、神聖行の成就とは、そのフィルターの一部分が破れた状態なのである。そうすると、非形状界、形状界を貫いて、この現象界に光が射し込む。これが供養値魂の状態であるが、問題は、このときにフィルターの一部しか破られていないから、自己の本質的な心の表われが現象界に現われる場合と、フィルターを通して現象界に現



われる場合の二つの状態が形成される。

だから、アーラヤ識を磨き、修行することによって、この破れの部分をどんどん大きくしていく必要がある。

すべてのフィルターが取り除かれたとき、現象界には、非形状界、形状界を貫いて真我の本質が照らし出されることになる。このとき無数の化身を持つようになる。

このフィルターを破る修行が大乗の修行である。あるいは、一生だけではなく多くの生をかけてヨーガの修行を成し遂げた者のグナがプラクリティ（自性）に還元する。これはヨーガの最終段階の延長上にあることで、仏教の最終段階とヨーガの最終段階は同一だといえるのである。

ここで重要なことが二つある。

一つは、わたしが一回目にダライ・ラマ法王に会いにいくとき、「ヨーガの最終段階は終わった。この上に何があるのだろうか」と思っていたのだが（このとき、ニルマナカーヤ、サンボカカーヤ、ダルマカーヤの三つを既に経験していた）、結局そのカルマの破壊をどんどん大きくしていくんだということに気付かされたことである。



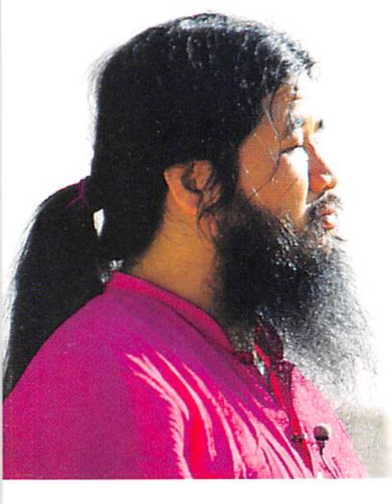
破れに到達して、あとは、心の成熟さえ達成していけば、自然と大完全煩悩破壊（フィルターの全体を破壊し尽くす）に至るんだということがわかったのである。

　ということは、そのヨーガの最終段階の延長上に仏教の最終段階があるということである。

　二つ目として、サーリプッタ、マハーモッガラーナが、ブラフマン——つまりヨーガ的な出家修行者からサキャ神賢の二大弟子になったという事実である。これも、ヨーガから仏教への道筋を示している。

　ヨーガの最終段階は仏教に至る。

　ヨーガの最終段階に至れない者は、仏教の最終段階にも至れないのである。





◆デプン寺とセラ寺

（尊師）それから、もう一つ、わたしが行けて良かったのはガンデン宮殿。このガンデン宮殿には「絶対に行きなさい」というシヴァ大神の示唆があったわけだけれど。最初ガンデン宮殿はないという話だったんだよね。わたしはデプン寺とガンデン宮殿は同じだと行く前から言っていたんだけれど、正悟師たちは「違う」と言っていたんだね。

（ヤソーダラー）あ、そうなんですよ。ガイドブックでは違う場所に書かれていたんですよね。

（尊師）でしょ。でも、わたしは同じじゃないかと言っていたわけ。で「同じじゃないか」と言ったのはわたしにとっての記憶だね。あれは。

（ヤソーダラー）あー、過去世の?

（尊師）過去世の記憶だね。だから、わたしの転生はガンデン宮殿があるときのチベット転生であると見るべきだね。

（ヤソーダラー）なるほど。



セラ寺　チーパ学堂には珍しい馬頭合体仏が。尊師によると、それがヤーメンタカ（シヴァ大神の別の姿の一つ）なのだという。



ガンデン宮殿（ガンデン・ポタラ）
ポタラ宮が建てられる以前にダライ・ラマ５世が住んでいた宮殿。



（尊師）で、まあ、それはいいとしても、そこでンガッパ学堂という所へ行くことができたと。それはわたしにとって最高のやはり喜びというか、そこへ行ければ十分であると考えているわけだけれど、そこでまあ、神々に祈願してすべての経典がわたしの中に内在されますようにと。それによってすべての衆生が利され、大完全煩悩破壊しますようにという詞章、この言葉の力というのが、わたしは最終日の経典集めに影響を与えたんじゃないかと考えているんだよ。

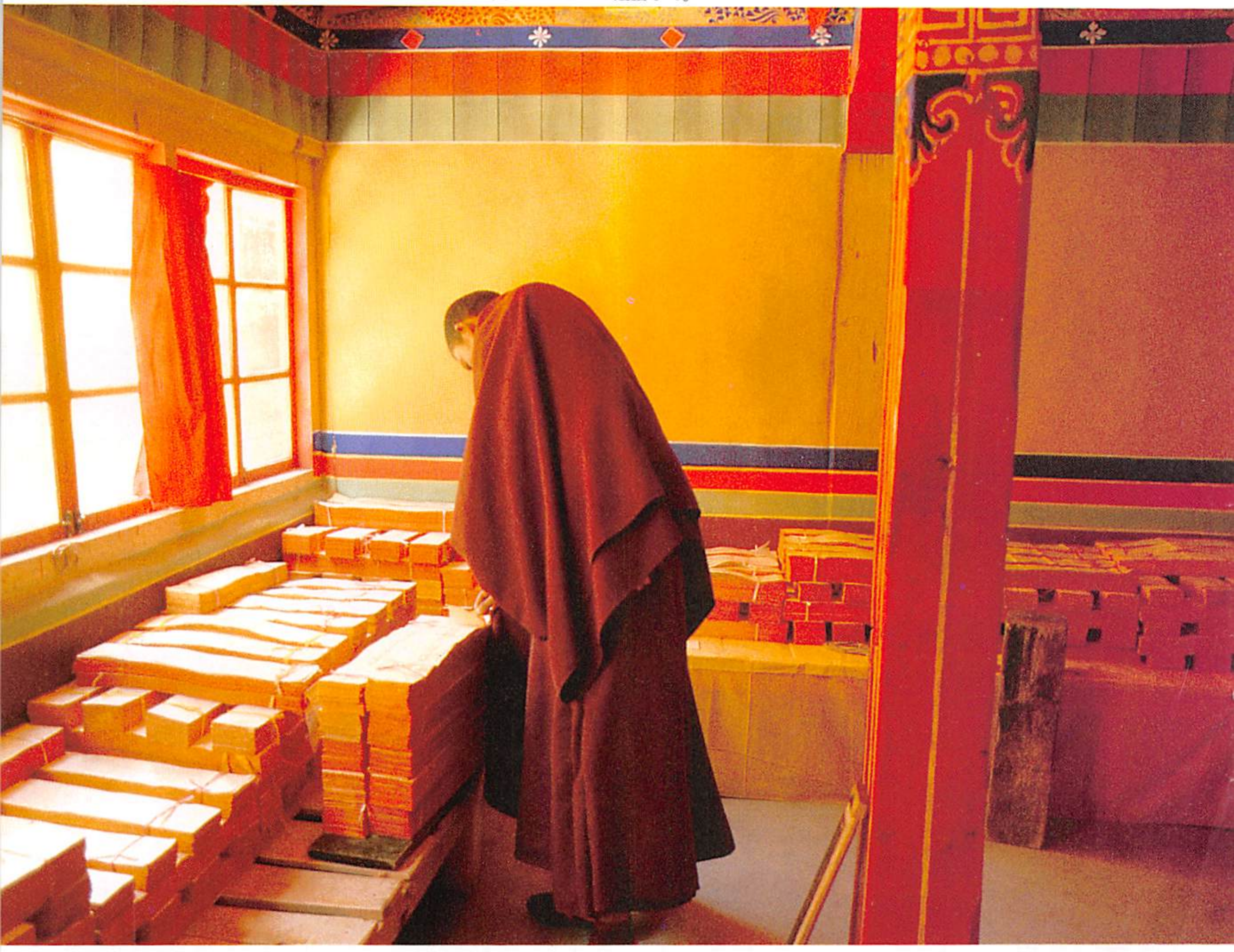
（ヤソーダラー）ああ、そうかもしれないですね。

（尊師）そのデプン寺は修行の空間であったとわたしは感じています、唯一。

（ヤソーダラー）セラ寺の方はどうでしたか？

（尊師）その後セラ寺の方へ行ったんだけれど、入る瞬間からここには何もない、と。ま、経典がここで買えればよいというのがわたしのインスピレーションだったわけだよね。ここはもう日本の大乗仏教のお寺と同じで単なる観光地であると。チベット仏

セラ寺　経典の部屋。案内の僧もその内容については全く知らず、外国人旅行者にバラ売りをしていた。
尊師は、全経典を持ち帰ることに成功。それらが失われることを阻止した。

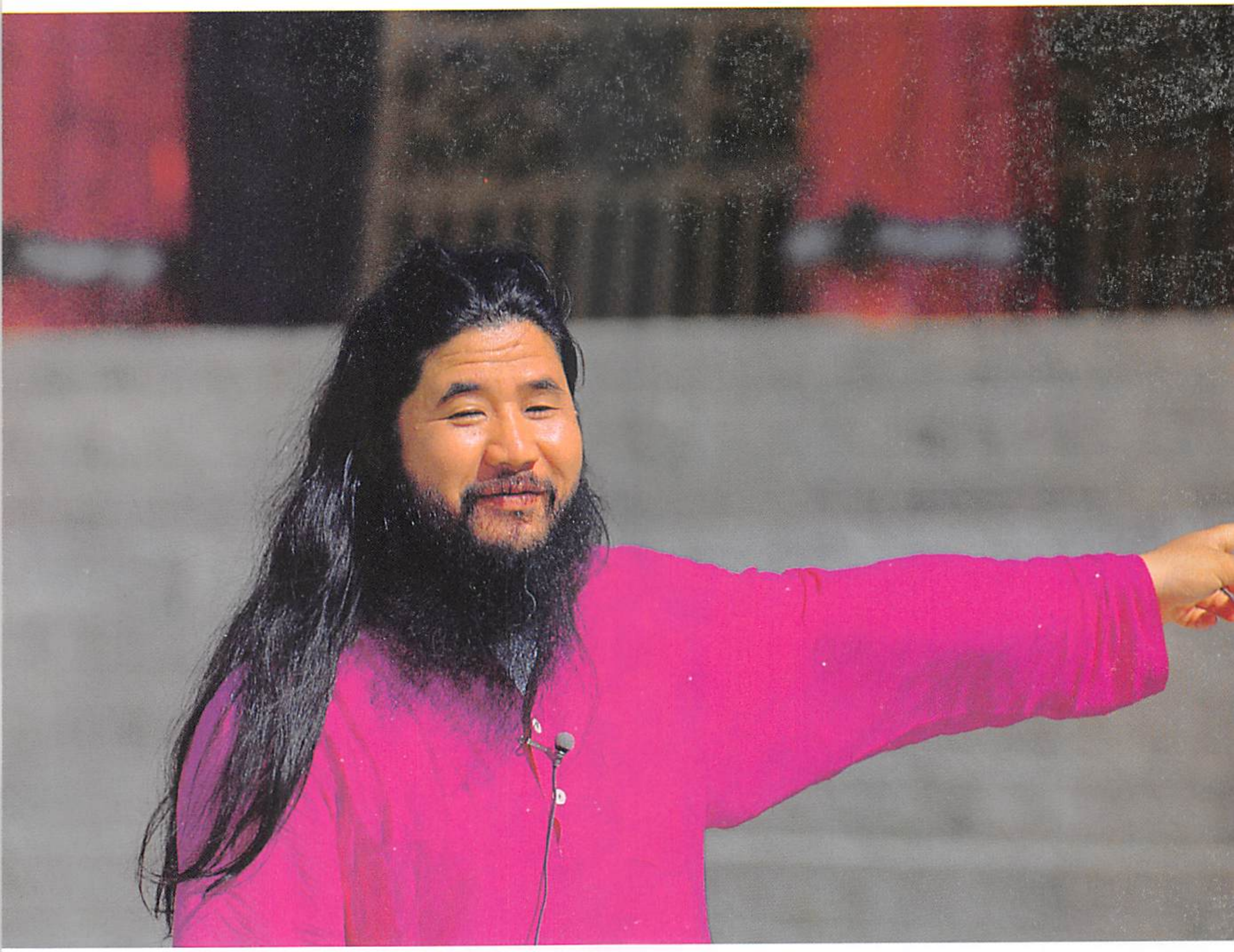


教もここまで堕落させられたか、という印象があったわけね。なぜ、堕落させられたという言葉を使っているかというと、堕落したんじゃないんだよね、させられたんだよね。つまり、今の中国共産党のやり方によって。

（ヤソーダラー）チベット文化をつぶして統一しやすくする、と。

◆ダライ・ラマ法王への期待

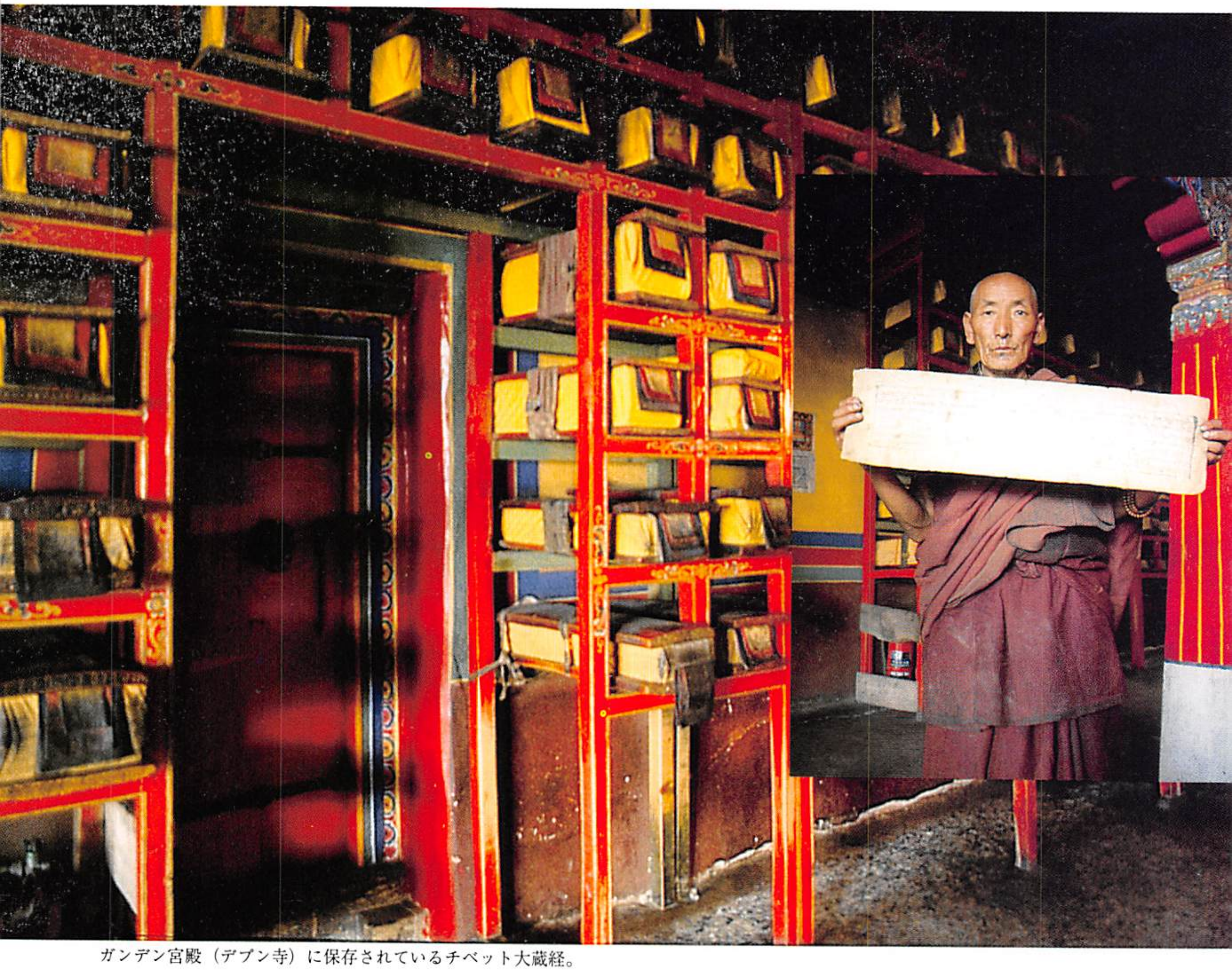
（尊師）そうそう。宗教上のわたしにとっての一番の今回の利益は、ダライ・ラマ法王の偉大さを再認識したということだね。それは、今の中国が解放したぞ、といっているチベット人の生活と、ダライ・ラマ法王が亡命政府でありながら、インドで立てている生活状況を比較すると、明らかに生活水準もインドのチベット人の方が高いし、知的レベルもはるかに高いし、それから経典群の翻訳その他を含めての仏教文化という点においても、はるかに高い。しかも、僧の質がケタ外れに違う。で、ここはポイントだと思うんだけど、いくら経典が残っ



ていてもだれが政治をするのか、だれが法を守るのか、だれが法を実践させるのか、ということによって違ってきているんだということだ。はっきり言って、チベットから亡命したカール・リンポチェのお寺もそうだったし、やっぱりレベルが高いね、今の中国のチベットに比べて。それからもう一つ、マントラの意味合いも失われてきているんだね。というのは、今のチベット人というのは中国語を話すんだよ。で、マントラが中国語の影響を受け変化してきてしまっている。中国的なマントラの読み方になり、そのマントラの音のヴァイブレーションの意味合いが消されてきていると。そういうことからいったら、中国共産党は成功しているんだね。まず、音のヴァイブレーションを消すことによって、アストラルの影響を弱めることができるから。今のままだったら、手も足も出ない。

（ヤソーダラー） つまり、ここではなく、異境の地でチベット文化というものを守るしかないと。

（尊師） 今のままだったら、そうだと思う。だから、ダライ・ラマ法王に期待するしか



ガンデン宮殿（デプン寺）に保存されているチベット大蔵経。

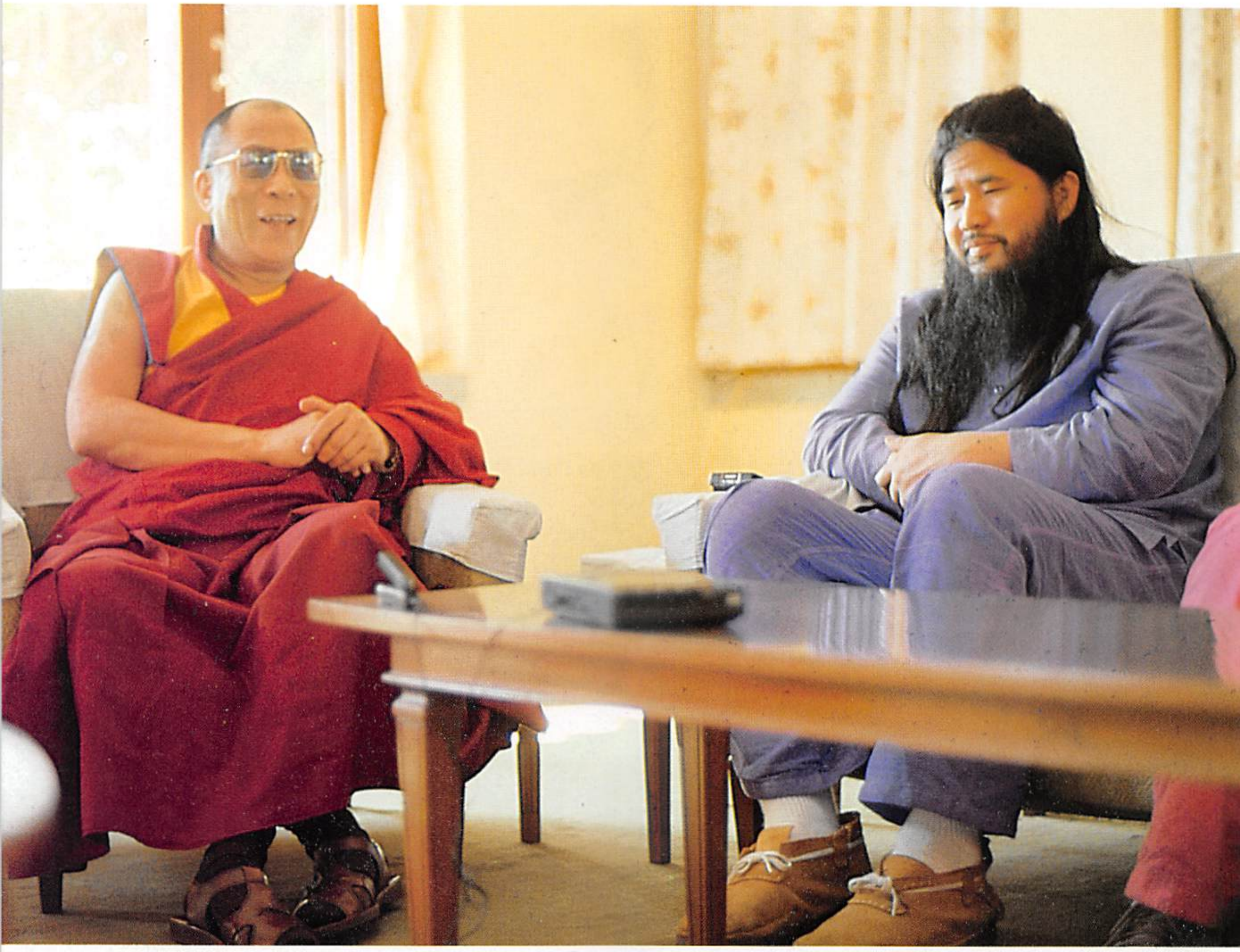
ないんじゃないかな、そういう意味でいったら。それから、中国から独立するためには、意識堕落天的（阿修羅）な闘争ではなくて、やはり戯れ堕落天的（天界）な忍辱の修行、これが必要じゃないかなと思う。忍辱ひたすら忍辱し続けて、そして修行し続けると。それをやることによってのみ、チベットは中国から独立できるんじゃないかな、というのがわたしの印象だね。

♦持ち帰った経典

インタビューにもあるように、デプン寺のンガッパ学堂で尊師は、次のような詞章を唱えられ立位礼拝を行ない、しばらく、タントラ・ヴァジラヤーナの帰依マントラを唱えていらっしゃった。なお、ンガッパとは密教という意味なのだそうである。

タントラおよび金剛乗の真理に基づいた秘儀が内在されますように。

ゲールク派、カギュ派、ニンマ派、サキャ派、すべての真理がわたしの内側に内在されますように。



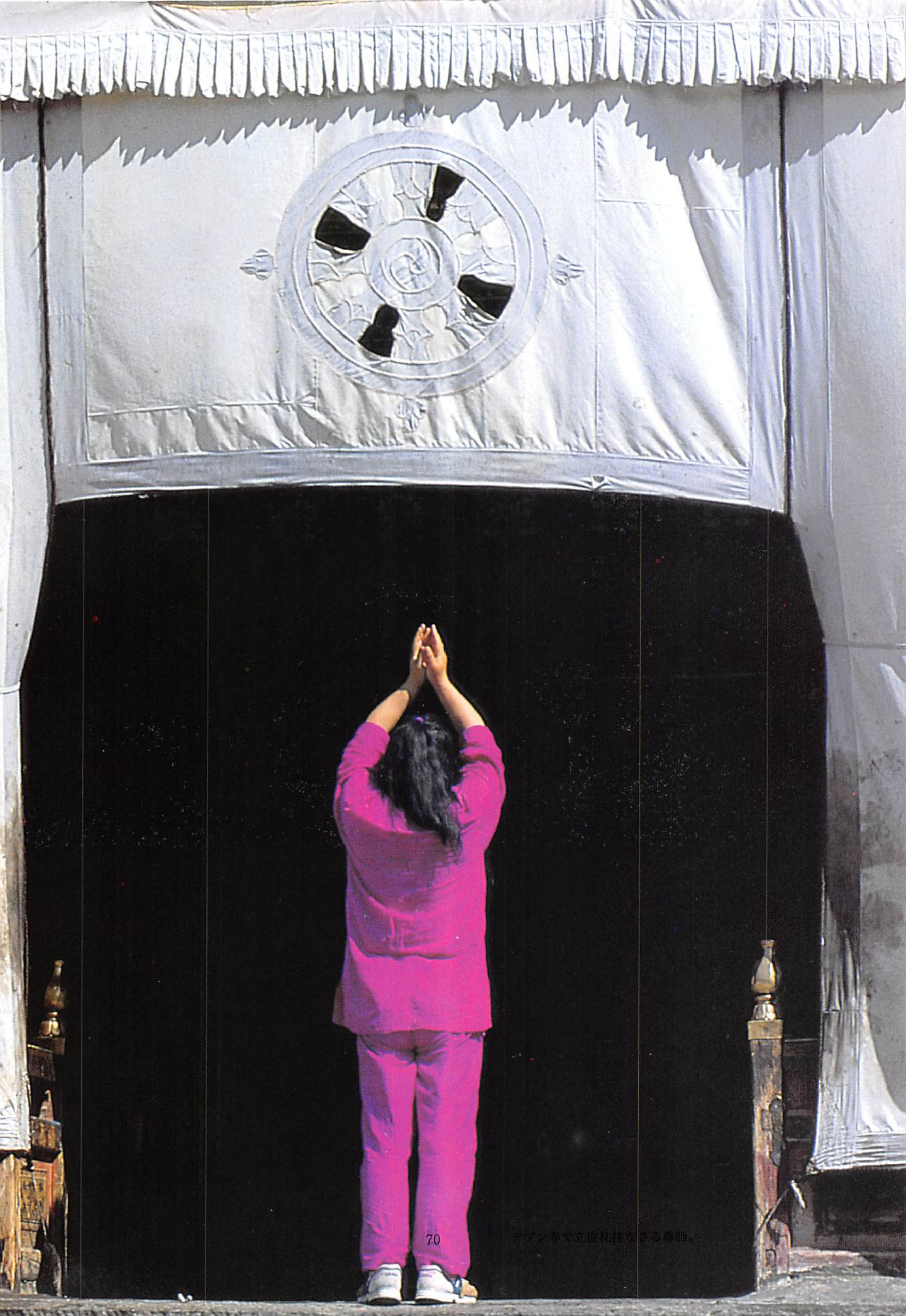
仏教について、世界の未来について、ダライ・ラマ法王と尊師は度々語り合った（インド・ダラムサラーにて）。

それによってすべての衆生が利益を得ますように。

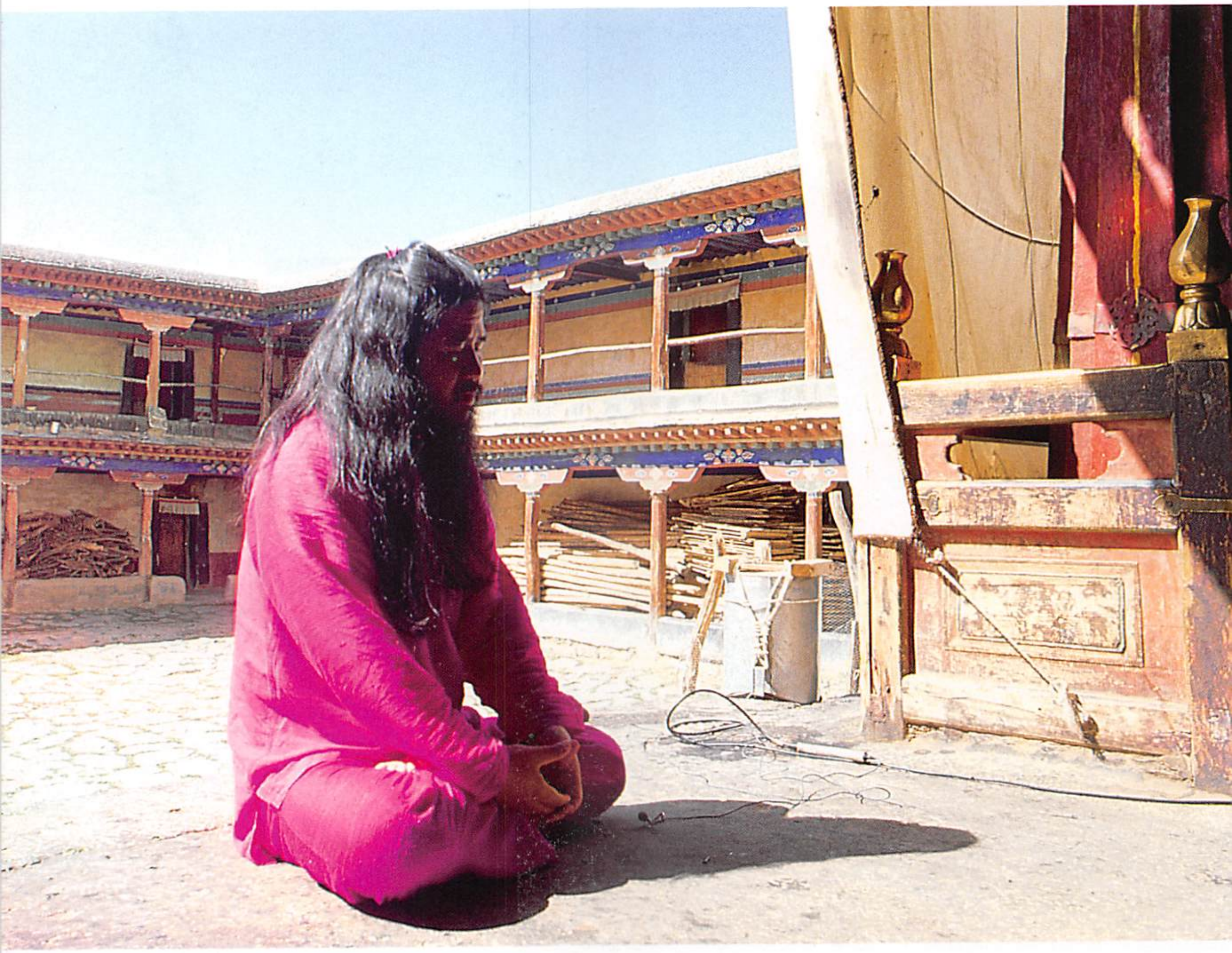
チベット仏教が崩壊していく様を、まざまざと見せつけられた尊師の発願なのだとわたしは思った。

そして、その発願が実を結ぶ第一歩であるかのように、尊師は多くの経典を手に入れられ日本に持ち帰ることとなる。

実は経典は当初外国人は手に入れられないということだったのだが、尊師のお心が中国政府を動かしたのである。



デプン寺で立位礼拝をする修師。



一年かかるか、二年かかるか――オウム真理教のサマナは、チベット語の経典の日本語訳を試みようとしているのだ。しかし、現在『南伝大蔵経』をパーリ語から訳せるようになっているほどのオウム真理教の秘められた力は、必ずやそれを可能とするに違いない。

「わたしが経典を持ち帰るということは、チベットはもう終わりかもしれない。」

インタビュー終了後、尊師はこう付け加えられた。チベットに対する絶望の深さを表わしているかのような言葉だ。

チベットを他山の石だと考えてはいけない。わたしたちはわたしたちで、真理の実践のできる場を守っていかねばならないのだ。

そのために何をなすべきか――一人一人が真剣に考え、実践してゆかねばならない問題であろう。

既に尊師は予言されたのだ。

――日本が近いうちに戦争に巻き込まれる――と。



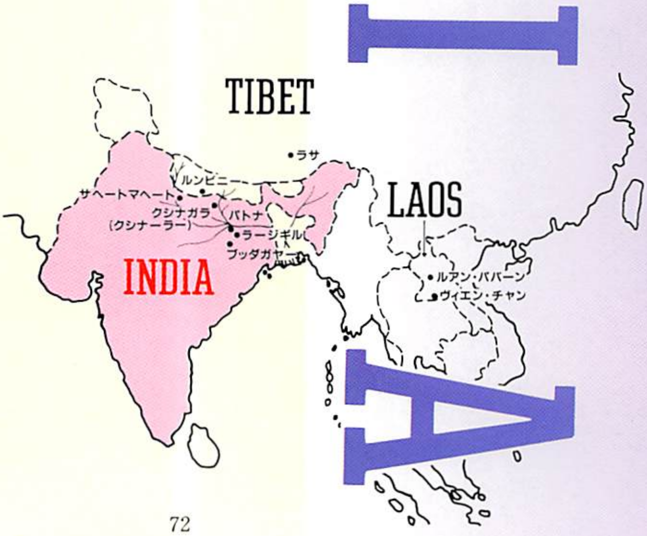
約束の大地 THE DESTINED LANDS インド

INDIA

六月初旬、わたしは、尊師と共にあのサキャ神賢（釈迦牟尼）ゆかりの地を訪ねるという幸運に恵まれた。

（尊師とご一緒なのだから、尊師の神通力によってあっと驚くような発見や出来事が起こるに違いない。いつもそうだもの。）

当然、期待するのは、月並みなガイド・ブックからはるかにかけ離れた、麻原彰晃





封印は解かれた
明かされる仏陀釈迦牟尼の秘密

尊師的展開の数々。そして、その期待に違わぬハプニングの連続。早速、その驚きに満ちた日々のレポートをお届けしたいと思う。

レポートは第一部、第二部、第三部の三つに分けてあり、第一部では、今回の仏跡巡礼全体を通しての尊師のお話をインタビュー形式で載せさせていただいた。その中には、非常に高度なステージの解説や修行内容が含まれているが、これはすべての人類の至福の宝として残しておかなければ、という気持ちを押え難いので、あえて載せることとする。

第二部では、訪れた仏跡一つ一つにスポットを当て、その紹介はもちろん、その地に関係ある仏典、尊師説法、インタビュー、一行の行動実録等をも併せて、〝真の仏跡像〟というものを浮かび上がらせてみる予定である。

また、第三部では、再び渡印し、サキャ神賢が晩年を過ごされたギッジャクータ山(霊鷲山)で頭陀修行をされた尊師が、〝経行の秘密〟について語られている。

それでは、まず第一部、『尊師にとっての仏跡巡礼』から——。



INDIA［第一部］今、伝授される瞑想の秘儀

◆神聖なエネルギーの中で

（ヤソーダラー）今回の仏跡巡礼には、どのような意味があったのでしょうか?

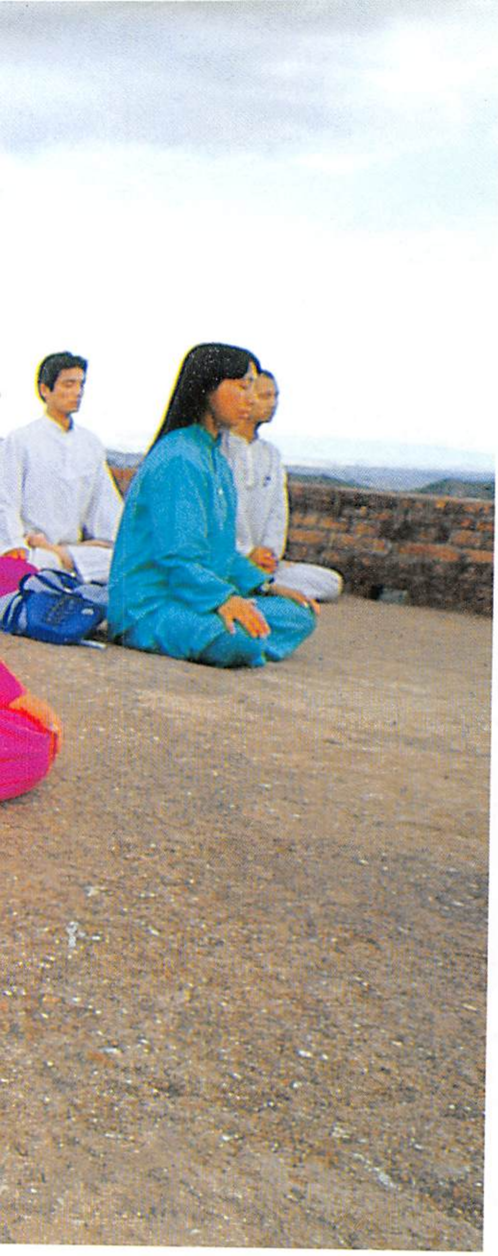
（尊師）オウム真理教の道場というものは、確かに、他の日本のエリアに比べると高い世界へ至る道ができているといえると思うんだよね。ところが、マスコミのオウム・バッシング、国家権力の弾圧、あるいは（自称）「被害者の会」の誹謗・中傷等を受難として受け止めて通過したオウム真理教のアストラル（内的な世界の一つ。仏教の言葉を使うならば色界に当たる）というものは、やはり相当けがされていて、わたしが考えている以上に信徒や内弟子たちに大きな影響を与え、傷を残していたんだね。そして、今回のインドの旅で、オウム真理教が得た最も大きな利益とは何かというと、一緒に行った弟子たちがそういう汚れをかなり浄化することができたということです。

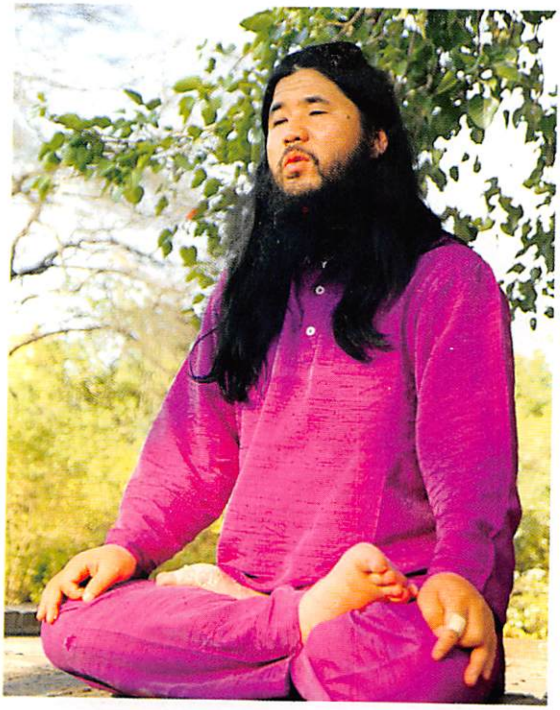
というのは、先程（六月十六日東京の尊師説法祭で）も述べたとおり、アナータピンディカの園である祇園精舎、あるいは、



ラージャガハ（現ラージギル）のギッジャクータ山（霊鷲山）――特にギッジャクータ山の神聖なヴァイブレーションというものは、本当に素晴らしいものだった。どういうふうに素晴らしいのかというと、これは日本的な、つまり、儒教的な感覚と仏教的な感覚との間に大きなズレがあるわけだけれど、儒教というのは楽しみとか、良いことが増大することを喜ぶよね。しかし、仏教というのはそうではなくて、自分の楽しみの部分にしろ、あるいはけがれの部分にしろ、はっきり現われることを喜ぶんだよね。ま、それを現わさせる力を持っているエネルギーをサットヴァのプラーナというわけだけど。で、特にギッジャクータ山はそのサットヴァのプラーナが強かったと、非常に――。これは二千五百年過ぎても強かったと。よって、ギッジャクータ山を中心として、同じように強いエネルギーを持つブッダガヤー、クシナーラー（現クシナガラ）といった聖地へ行き浄化されたことは素晴らしいことだったと思う。

そして、次の巡礼でも浄化されるんだという確信を持てたことは、わたしにとって





大きな喜びだね。ま、それが今回得た大きな利益であったと思います。そして、もう一つは、神変（神通力）を現わす場合の示唆があったということだね。

◆神通力への示唆

（ヤソーダラー）それはパトナの、サキャ神賢がテレポーテーション（瞬間的空間移動）をされたという場所でのことですか？
その場に残されていたデータによって尊師は初めてテレポーテーションの原理をお知りになったということですが……。
（尊師）いや、それもそうだし、ギッジャクータ山でもいろいろあってるよ。それから、良いサマディ（三昧。瞑想の究極状態）の内容というものが具体的になったし……。
（ヤソーダラー）そういう点こそ、多くの人が大変興味を持っているところだと思うのですけれど、もう少し詳しくお話し願えませんか？
（尊師）これは、実はわたしが以前解脱に向けての修行のときになした経験そのままなんだけど、結局、どんどんどんどん深い



サマディに入っていって、で、最後には呼吸が停止すると。そして、異次元に飛び出すと。で、異次元に飛び出してから、その異次元をも超えて、完全に死が起きる。その〝死〟のときに経験はいったん止まるわけだけれど、そこで変化身（下位アストラルと呼ばれる異次元で活動する身体）が出てくるんだね。

この――ここの変化身のプロセスを以前のわたしはパッと通過して、ま、次の深い〝天耳（神々の声を聞いたり、遠くの音を聞いたりする神通力）〟〝他心（他人の心を読む神通力）〟〝宿命（様々な前生を知る神通力）〟と入っていった。結局、その通過の仕方が力ずくだったわけなんだけど、もう少しじっくりと気道（エネルギーの通り道）を深くして、大きくして通過することによって、ま、仏典に説かれている〝一身を多身となし……〟というようなことが実際に可能であるということに気付いたんだよ。

ヨーガにしろ仏教にしろ〝絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜〟の状態に到達することを目的としているわけだけど、この絶対自



由というのが一体何であるのかというと、実はこの化身のことだったんだね。なんで絶対自由が化身なのかというと、意生身というのがあるんだよ。まあ、これは心が生み出す身体のことなんだけどね。この心が生み出す身体とは何かというと、ちょうど鞘から刀を出し入れするのと同じように、あるいは、まあ、ムンジャ草からアシを引き抜くのと同じように、心によってその身体を抜き出し、また心が必要なくなったらその身体を戻すという、そういう状態を形成すると。そして、これが神変、神通のすべてであると。そういう示唆を受けたわけだよ。

(ヤソーダラー) サキャ神賢からの示唆だったのですか?

(尊師) サキャ神賢という言葉自体は合わない。なぜ合わないかというと、サキャ神賢は、煩悩破壊(涅槃)なさっているから、サキャ神賢といえばサキャ神賢なんだけれど、本当はそうではなくてマハー・ボディ・ニルヴァーナ、つまり大到達真智運命魂完全煩悩破壊の世界から、ということになる。それから、もう一つ付け加えるならば、わ



たし自身、世事の煩わしさから離れたいという願望が出てきた。世事の煩わしさを捨てて、早くもう一回完全な解脱の状態を現証したいものだという……。

わたしの場合、今、二つを完全に具足しているわけだよね、覚者（仏陀）の三つの力のうち、一つは他心勝解智――つまり他人の心を完全に理解する力と、それから、もう一つは、仏教で説かれているステージをすべて自分自身で経験して、証智している状態と。そして、現在のわたしが完全に具足していないのが、神変なんだよ。つまりグヤサマジャ（タントラの仏陀）の三面のうちの神変の部分がやっぱり弱いと。これは修行が足りていないということだと思う。

（ヤソーダラー） 右の気道の浄化によって起こる肉体的な神変ということですね。

（尊師） ま、簡単にいえば右の気道の浄化ということになるだろう。そこは、やはり、サキャ神賢はおできになっていらっしゃるから、ま、行ってやらざるを得ないかな、と。いや、やることこそが喜びだし、やる必要があるかな、ということだね。



◆教えと修行を深めるために

（尊師）それから、今、わたしは信徒に対してベースの教えを説いているけど、以前と同じようなタントリック、あるいはヴァジラヤーナ的な教え、あるいはマハーヤーナ的な教えを混在した形での、――何ていったらいいかな――スピード・アップの方法を説いていないのが現状だ。そこらへんがわたしの今自分がなさなければならない責任の放棄だったんだと思うね。信徒にとっての利益ということを考えたら、この教えが必要だというのにね。

（ヤソーダラー）信徒に対する教えを深めていかなくてはならないと思われたということですね。

（尊師）そうだね。

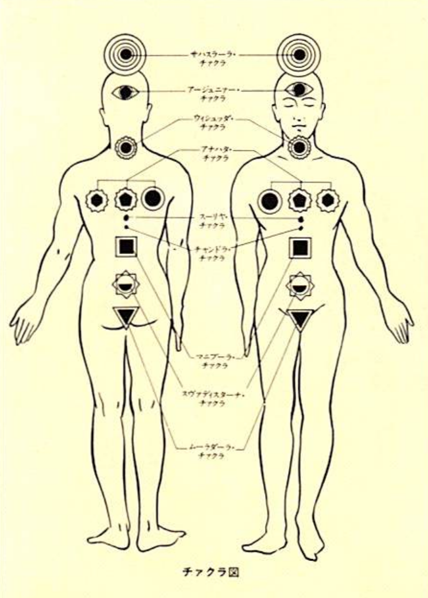
（ヤソーダラー）そのためには？

（尊師）だから、もっともっとわたしの力をアップする必要があると。実はわたしは自分の気道に四カ所完全に結ができていることを透視しているんだよ。（仏跡巡礼中の）バスの中で。その一カ所はスーリヤの



右の気道で、もう一カ所は右のアナハタ・チァクラ（胸にある霊的センター）、もう一カ所は中央のアナハタ、もう一カ所は喉と。で、この四つの気道の結果で、中央のアナハタと喉から入って、右のアナハタとスーリヤにまで結ができたのだろうというのがわたしの見解なんだけど、これが先程言った覚者の状態の右の気道を完全にふさいでしまっているということなんだね。

また、カルマ（日本語で言う〝業〟。なしたことは必ず我が身に返るということ）というものは肯定しようが否定しようが確実に返ってくるんだなということも改めて



チァクラ図

※解脱者が相手に直接霊的エネルギーを移入するイニシエーション。相手の修行を飛躍的に進めるが、エネルギーを施す側は相手のカルマを受け、大変な苦痛を味わう。



感じたね。その理由というのは、まあ、わたしのなした身のカルマというものはあまり良いカルマでない。それは到達真智運命魂（菩薩）の心によってなしたものではあるわけだけれど、ジャンブ州（経典に記述されている人間界に存在する四つの大陸のうちの一つ。カルマがはっきりと現われ、修行に適した大陸とされる。オウム真理教ではインド亜大陸とオーストラリアがジャンブ州に相当するという見解をとっている）のカルマの解放によって二つの現象が出たと。その第一は瞑想ステージがやはり上がっているというか、心の広がり、空間の広がりが、今から五年半前に行ったときに比べてずいぶんと増大していたんだということがはっきりとわかった。

それからパッと瞑想に入ってもバーッと、どこでもジャンブ州では広がると。これは、明らかに自分自身のなしてきた瞑想は正しくて、それは明らかに効果をもたらしていたということだね。ところがそれと同時におなかを下し、おなかに痛みが出たりしたわけだから――それが苦しいとは一度も思わなかったけどね――でも、それは明



らかにわたしがなしてきた行為の中で肉体を傷付ける、エネルギーを下降させる行為が相当にあったということを意味している。

そういう形で見るならば、やはり綺麗事ではないんだなって。もっと深く修行しなければと。修行も形ある修行ではなくて形のない修行ももっと一生懸命やらなければと。特にそのように高い世界とつながっている、そして自分のいろいろなカルマが瞬間的に証智できるところでそれを選択しなければと思ったんだよ。

◆〝法眼〟の回復

（ヤソーダラー）ということは、インドに行かれる前はどうだったのでしょうか？

（尊師）ま、何ていうのかな、わたしの場合は天才だから。天才というのは理解しづらいかもしれないけれど、そういう要素が行く前からゼロだということはないよね。ただ、わたしの場合、日本にいるときは、ただひたすらエネルギーを放出し続けているわけだから——例えば、ギッジャクータ山なんかには、ちゃんとエネルギーが温



存されているんだよね——それを吸収した段階でパッと戻っちゃうというか、そこで自分の実体というか、自分のなしてきた部分の中で良かった部分と、それから修正しなければならない部分が現われるというかね。だから、心にそういう眼がなければ、つまり、もともと心に法眼がなければ、法——ダルマというものは、見ることができないわけだけど、わたしの場合は見る眼はあって、ただ視力が弱かったと。それが視力が回復したということだよね。法の視力が……。

　そして、それは徐々に回復してきたんだと思う。アナータピンディカの園、あるいはギッジャクータ山、あるいはわたしの最も好きな瞑想の場であるマハー・ボディ（注…ブッダガヤーの菩提樹のことを言われている）、あるいはクシナガラと。

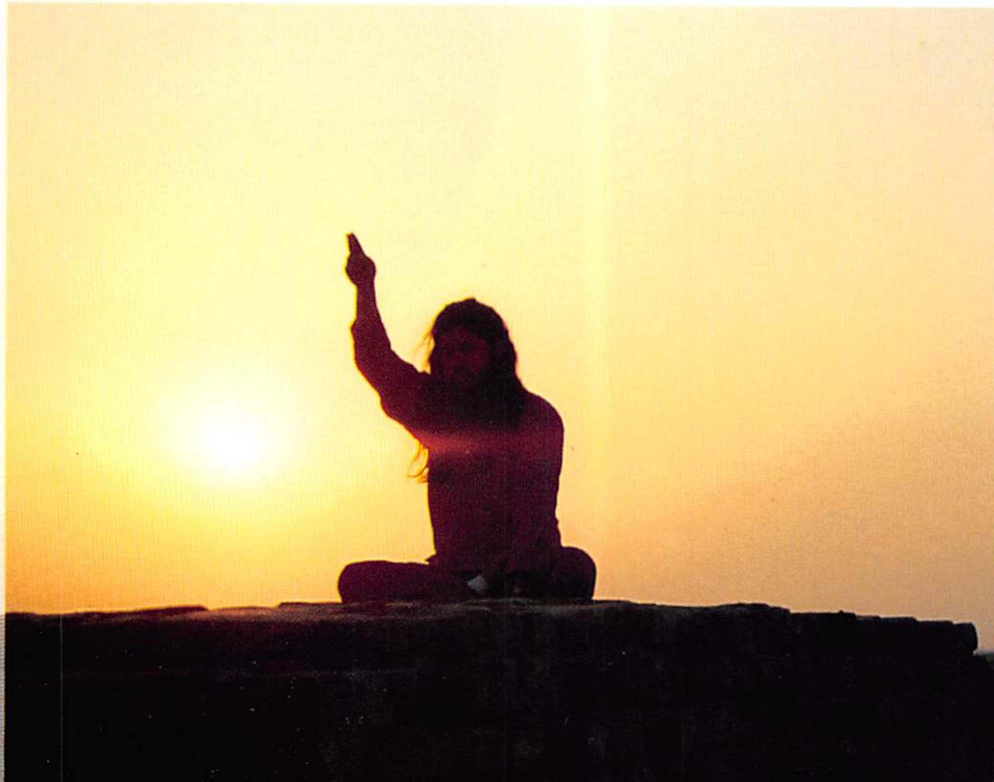
◆完全なる絶対なる神の叡智

（ヤソーダラー）インドに行かれる何カ月か前から、「インドが呼んでいる」という表現をなさっていらっしゃいましたね。その呼び声は示唆だったのでしょうか？



（尊師）完全にそれは示唆だったと思うんだよ。何が示唆かというと、例えば仏跡巡りの前にダラムサラー（ダライ・ラマ法王を中心とするチベット亡命政府のある町）へ行ったわけだが、いきなりカムトゥール・リンポチェ（チベット仏教ニンマ派の高僧）は、『あなたは高い悟りを得ている』から始まって、最後には『イェシェのステージだ』と言われたんだよね、このわたしに対して。このイェシェというのは、要するにパーフェクト・アブソリュート・ディヴァイン・ウィズダム——完全なる絶対なる神の叡智。これがイェシェの意味合いなんだよ。ニンマ派における、あるいはカギュ派におけるね。もう、言い方を換えれば、これ以上なすべきものはない。日本の言葉では無学と言っているけど、オウム真理教の言葉で言うならば超越学——学ぶことを超えた人ということになるわけだけれど、そのステージにあるということ、つまりわたしが最終解脱をしているのが確認されたわけだね。チベットの高僧によってね。

で、『完全にわたしの生きている意味合いは、衆生を済度するためである』という



表現もカムトゥール・リンポチェはされていたしね。それがインドがわたしを呼んでいた第一番目の理由だったのではないだろうか。それを信徒に知らしめることによって、『あなた方の道は正しいんだ。確信を持ちなさいよ。』と、当然言えるということだからね。



チベット仏教・ニンマ派の高僧、カムトゥール・リンポチェ。

◆マハー・ムドラーの修行

（ヤソーダラー）そして、第二が尊師ご自



身の修行、ひいては救済への道の示唆と。
（尊師）そうそう、そうそう。で、わたしのこれからのステージというものは、もっと苦を証智しなければ無理なんじゃないかと思うんだよ。つまり、盲目で放浪するというか——そういう状態を作って初めて出てくるステージなんじゃないかなと。わたしは、この盲目というのは神々が与えてくれたお布施だと思っているからね、自分では。この状態で放浪したら、おそらくひどい目に遭うだろうけどね。
だから、今回のインドの旅で得た二つ目のメリットは、次にわたしが何をなさなければならないのか、どの修行をなさなければならないのか、はっきりと認知できたということなんじゃないかな。
（ヤソーダラー）その修行というのは？
（尊師）その修行は〝経験の止滅〟、そして〝意生身を作ること〟。
（ヤソーダラー）そのために必要な具体的な修行法をお聞かせ願えますか？
（尊師）修行法にはいろいろな修行法がある。特にわたしは南伝系、北伝系のすべてを前生において経験している。まだ日本の、



あるいはこの地球上の仏典に現われていないような密儀というのも、わたしは理解しているしね。

　だから、まあ、ギッジャクータ山でなす瞑想というのは、おそらくマハー・ムドラーの瞑想になると思います。

（ヤソーダラー）すみません。マハー・ムドラーの瞑想と言われても、わからないんですけど。

（尊師）マハー・ムドラーっていうのは、何も難しいことなんじゃなくて、実際に記憶修習している教え、しかも記憶修習の内容というのは仏教全体の教えになるわけだけど、その教えを土台として自分の心を見つめ、自分の心の働きに対してどんどん疑問を投げかけていく瞑想だよ。で、疑問を投げかけることによって疑問を解決していくと。煩悩を一つ一つ滅尽していく瞑想だよ。これは、まあ、無色の瞑想、非形状界の瞑想と言われている瞑想なんだよね（注…後で、この無色の瞑想こそがマハー・ムドラー、あるいはゾクチェンの最終段階の瞑想の修行なのだとお聞きした。マハー・ムドラーは、チベット仏教カギュ派の瞑想



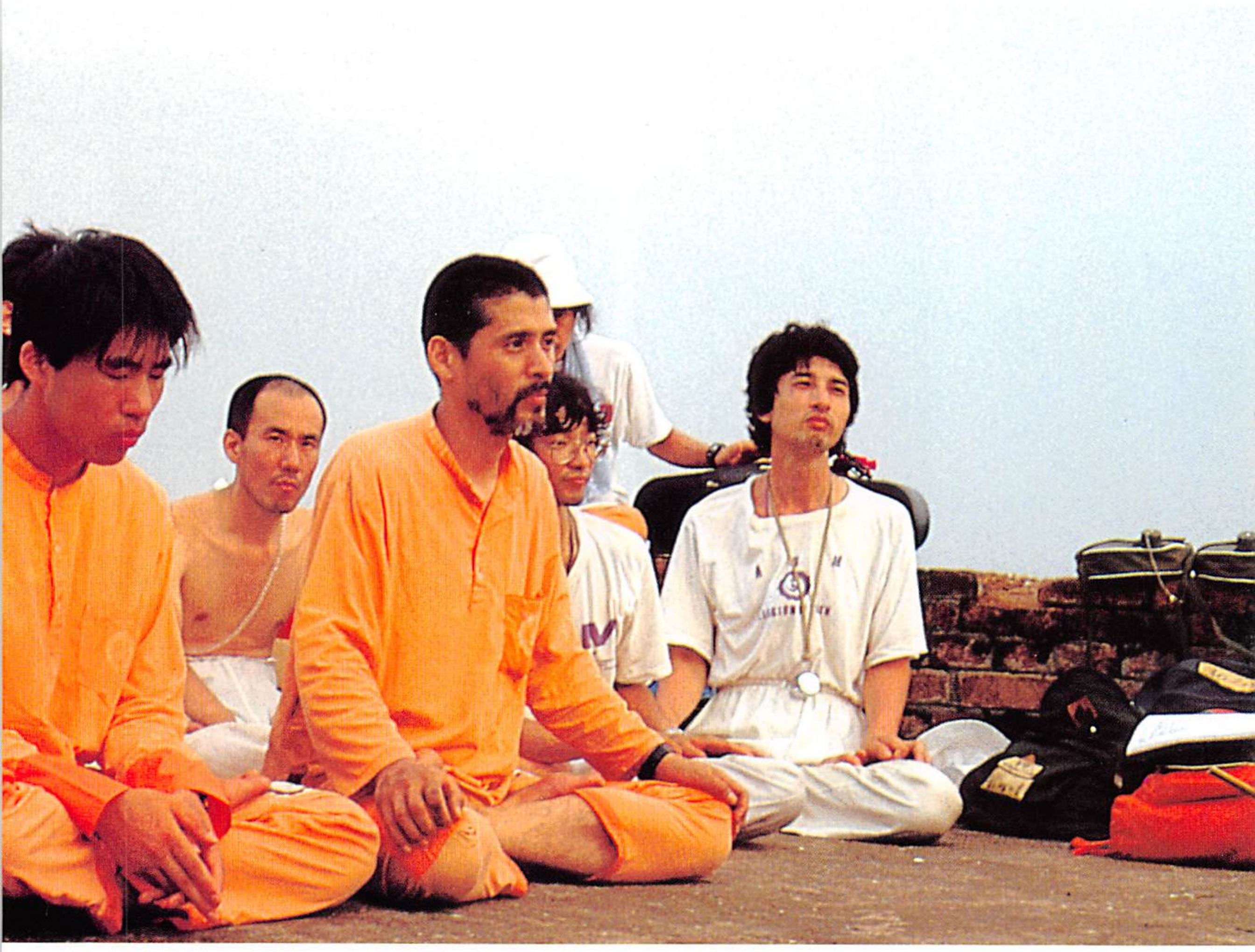
法、ゾクチェンは同じくニンマ派の瞑想法である)。

で、この瞑想はサキャ神賢の経典でいくと何に当たるかというと、有熟考にして有吟味という部分に当たる。ここでは遠離・離貪から来る喜悦を経験する。つまり、第一静慮のことなんだね。それから第二静慮の無熟考にして無吟味、ここでサマディから来る喜悦を経験する。そして、第三静慮のサマディから来る楽、第四静慮のサマディから来る寂静と進んでいくわけだ。

◆ヨーガの最終段階を超えて

(ヤソーダラー) 有熟考にして有吟味――今まで説法では一言で通過してしまっているケースが多いんですけれども、少し掘り下げて話していただけますか?

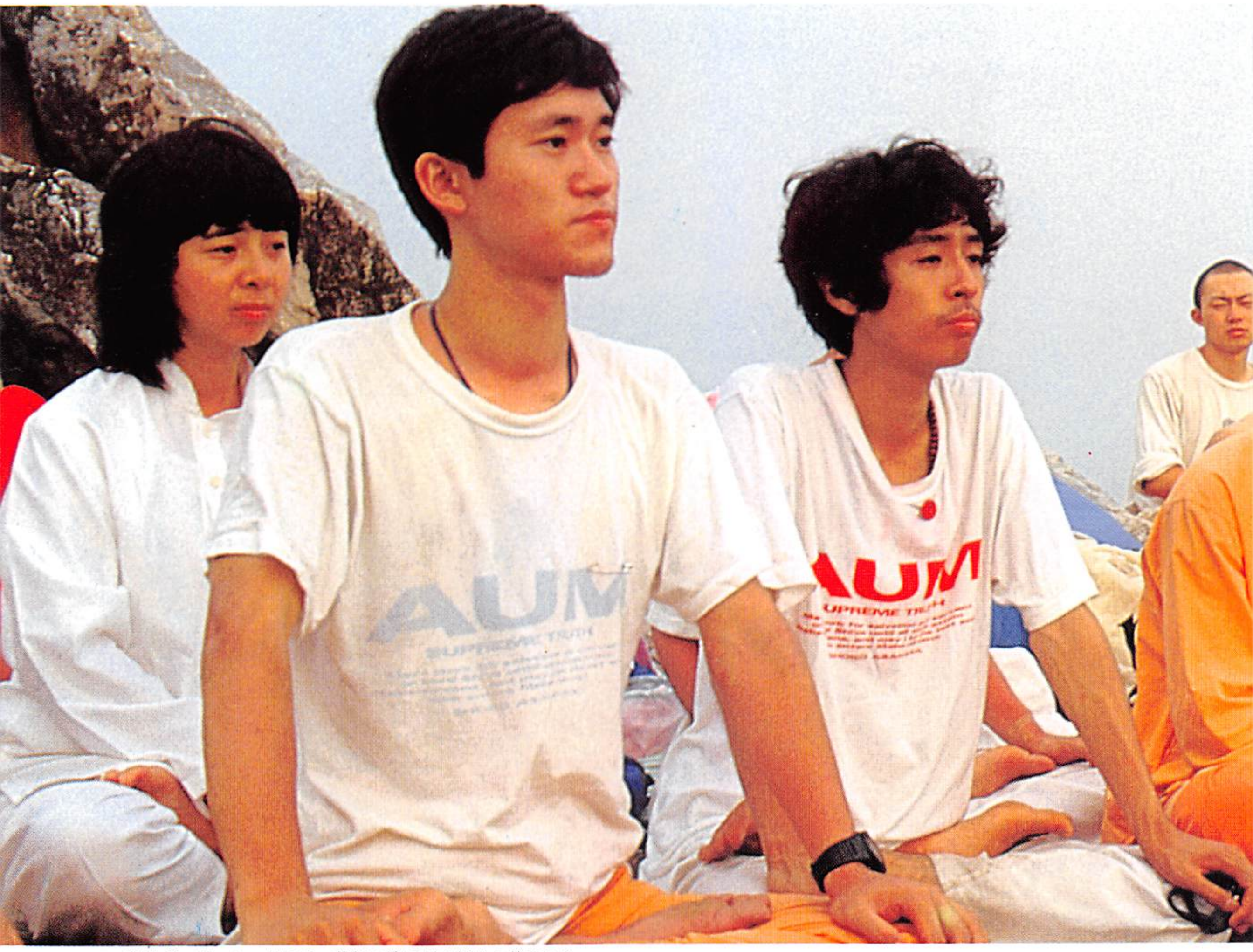
(尊師) 例えば、自分の今まで培ってきた、つまりわたし自身が解脱してから培ってきた情報とはどういうものがあるんだろうかと考える。これが、まず第一段階だよ。その現われた情報に対して、教義をもとに検



討するわけだよ。そして、それが、自分自身のいろいろな意味でのエネルギーの障害になっていることを認知すると。それが、深い意識状態で行なわれるものだから――ナーディ（気道）をコントロールしている深い意識状態だから、その検討した結果、つまり吟味した結果、そのナーディの結はさっと解けてエネルギーがパッと上がると。そこでもうその部分のエネルギーの障害がなくなると。という形で一つずつ一つずつつぶしていくわけだよ。

（ヤソーダラー）マハー・ムドラーの瞑想とは、それをやり続けるわけですか？

（尊師）そうだ。それをやり続けることだね、マハー・ムドラーの瞑想とは。そうすると、最終的には、思考が現われないで喜悦の状態が現われる。ただ、その場合は、身・口・意（行為・言葉・心）における――まあ本来はカルマ落としをなさなければ歓喜の状態は出てこないわけだから――カルマ落としをやりながらそれをやると歓喜の状態が現われる。そして、その次には、その歓喜によって完全に満たされたがために、ちょうどそれはセックスのエクスタシー



聖山ギッジャクータにて。尊師の法に耳を傾ける弟子たち。

状態の後のような完全に心身がリラックスした楽の状態が現われる。とはいっても、現代人には心身が完全に解放されたエクスタシーの状態というものは経験していないだろうけどね。

　で、その心身が解放された楽、これを経験し続けるとその次に、その楽の感覚が実は苦の感覚であることに気付くんだよ。つまり、リラックス、エクスタシーを感じれば感じるほど、例えば根本苦というのも増大すると。やはり苦楽は表裏であると。で、この苦楽が完全に捨断された段階が第四のサマディで、これは寂止、寂静の境地といわれている段階ね。で、その寂静の境地がある段階を過ぎると経験の止滅が起きるんだよ。つまり、これは自動的に完全に感覚が制御されている状態——というよりも感覚が止滅している滅尽の状態と。

　これをもってヨーガは最終段階だといっているんだけれど、実際にはそうではなくて、この後、意生身が登場するんだよ。意生身が登場して天耳界とつながり、他心勝解智とつながり、宿命とつながり、天眼（北伝仏教では、この天眼を遠隔透視能力



としているが、オウム真理教では〝転生先を知ったり、いろいろな世界とつながる能力＝死生智〟という南伝仏教の立場に立っている）とつながり、漏尽（完全なる絶対なる神の叡智）とつながるわけだね。で、漏尽とつながれば、自分の心が完全に止まった状態だから諸現象を正確に見ることができるということだよ。だから、そういう意味でわたしが今生で得たものは、今回のインドで得たものは大きい。こういうことをすべてわたしに気付かせてくれ、そして、これからわたしのなしてゆかねばならない修行を教えてくれたんだからね――。

（ヤソーダラー）本当にお疲れのところ貴重なお話をありがとうございました。特に尊師ご自身のご修行についてのお話には深遠なものがあり、心を打たれました。読者の皆さんも同じように感じられたのではないでしょうか？　第二部では、今回訪ねた仏跡の一つ一つにスポットを当て、引き続き尊師のご印象、あるいは、尊師が神通力によって知られた隠された史実等、興味深い事柄についてお話しを伺いたいと思います。よろしくお願いいいたします。



INDIA〔第二部〕神秘力で知る仏陀釈迦牟尼の真実



◆如来の生誕

今からおよそ二千五百年前、サキャ神賢はこの現象界に降誕された。その時代、現在のネパール南方からインド領一部にかけて、サキャ族がカピラヴァットゥという都を中心として小国を形成していたが、サキャ神賢の父はその国の王スッドーダナ、母は隣国の王女であったマハーマーヤーであった。

当時の習慣にしたがって、出産間近となったマハーマーヤー妃は、スッドーダナ王の許可を得て故郷のデーヴァダハの都へ帰ることになった。そして、デーヴァダハへと向かう途中、ルンビニー園と呼ばれる沙羅樹の遊園に立ち寄ったとき、サキャ神賢を



出産されたと伝えられている。

尊師のご説明によると、

「真理勝者、しかも最終の如来として、この人間界に登場するときには、必ずその母親は立って出産をする。そして、子供の方は、地上に落下するときに、神々によってサポートされ、そして、地に立ち、それから七歩歩いて天上天下を指し、『唯我独存』という言葉を話すことになっているそうです。それから、もう一つ。必ず、その真理勝者を生んだ母親は、七日後に他界するということが条件になっている。」

という。この七日後に他界するという理由については、『本生経』において、

「如来の宿られた母胎は、祠の奥殿のようで、他の人がそれに宿ったり用いたりすることはできない。それ故、如来の母は如来の誕生後七日目に死んで天界に生まれるのである。」

と述べられている。果たして、マハーマーヤーは、出産後七日目に亡くなり、サキャ神賢はマハーマーヤー妃の妹といわれているマハーパジャーパティーによって育てられることとなる。



◆ここは釈迦牟尼生誕の地ではない？

さて、このルンビニーであるが、実際に現地を訪れた尊師の神通力によって、意外なことが判明した。なんとそこは、サキャ神賢生誕の地ではないというのである。早速、尊師の見られた〝真実〟を語っていただくことにする。

（ヤソーダラー）ここルンビニーは、サキャ神賢生誕の地として、仏教の四大聖地の一つに数えられていますね。

（尊師）『大完全煩悩破壊経』の中の、第五誦品に次のようにうたわれています。仏教徒は、四つの聖地を巡拝しなさい。それによって、多くの利益を得るであろうと。その四つの聖地が、まず真理勝者の生誕の地、つまりこのルンビニーですね。それから、真理勝者が解脱なさった場所、つまりブッダガヤー。そして、真理勝者の初転法輪の地（初めて法を説かれた場所）つまりサールナート。そして、真理勝者の入滅の地であるクシナーラー（現クシナガラ）。」



（ヤソーダラー） ここのところですね。

「アーナンダよ、これら四つが、帰依のある善男子が、見るに値し、畏敬の念を起こす場所なのである。

アーナンダよ、そして、帰依のある向煩悩滅尽多学男（比丘）や向煩悩滅尽多学女（比丘尼）や帰依信男（優婆塞）や帰依信女（優婆夷）は、このようにしてやってくるのである。

『ここで、真理勝者がお生まれになった』と。

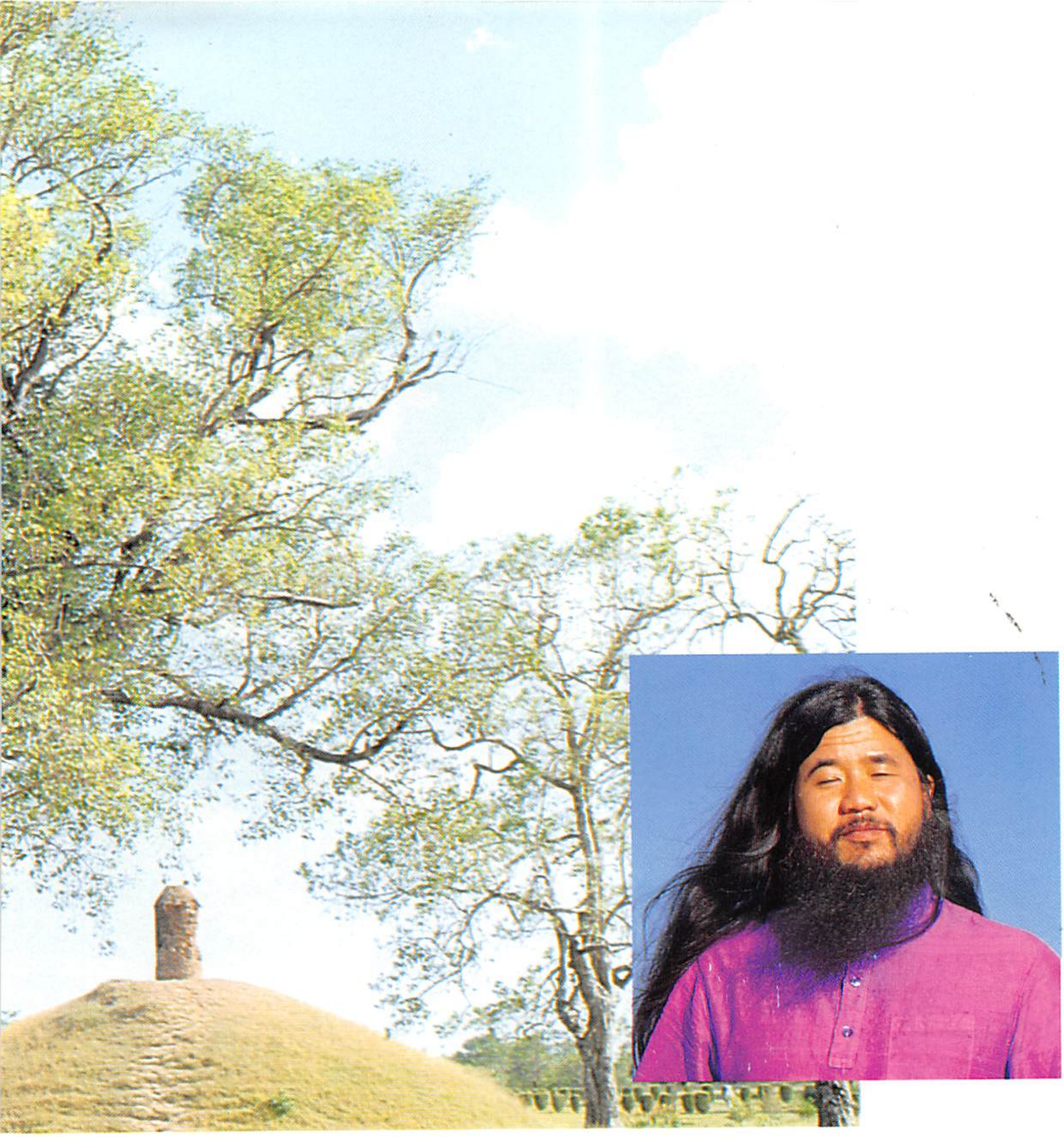
『ここで、真理勝者が無上の最上正覚を現正覚なさった』と。

『ここで、真理勝者が無上の法輪を転がされた』と。

『ここで、真理勝者が存在の繋縛がない煩悩破壊界に完全煩悩破壊なさった』と。

アーナンダよ、神殿を遊行して巡り歩き、浄信の心があって、命を終えたのなら、どんな人でもすべて、その身が壊れ、死んだ後、善趣である天界に転生するだろう。」

（尊師） ところが、わたしはあそこをサキャ神賢生誕の地だとすることに疑問を持っています。その理由というのは、聖地じゃな



いんだね。聖地というのは、独特の雰囲気があるものなんだけど、ルンビニーに関しては、聖地独特の霊的ヴァイブレーションじゃなかったんだよ。まあ、仏教は心の教えだから、そこを聖地だと思って礼拝すれば、それは、聖地ではなくても同じような効果があるのは事実だけど、でも純粋観照智という点から考えるなら、わたしはズレているんじゃないかと思う。

◆動物界とつながる池

（ヤソーダラー）ルンビニーが生誕の地だとされたのは、一八九六年に考古学者フェーラーによってアショーカ王の石柱が発見され、その石柱にブラフミー文字で『アショーカ王は、その在位二〇年に当地に参拝しこの石柱を立てる。シャカムニ・ブッダ（サキャ神賢）はここに生まれた』と刻まれていたからだそうなんですけど、アショーカ王がこれを建てた時点で、場所が間違っていたということでしょうか？　確かに、その石柱は紀元前二五〇年のもので、サキャ神賢の時代からすると数百年も後のものと



アショーカ王

古代インドの統一を実現したマウリア朝の三代目の王で、即位後八年にして深く仏教に帰依し、ダルマ（法）にのっとった政治を志す。その直接の原因は、カリンガ地方を征服した折の戦争の悲惨さを目のあたりにしたことによるという。その政治理念を述べた詔勅は石柱に刻まれるなどして残り、広い範囲にわたって発見されている。

いうことになりますが……。

（尊師）はい、その可能性が高いと思います。しかも、例えば、マハーマーヤーが出産前に沐浴したといわれている池とかあるんだけれど、その池は動物界とつながっていたんだよ。しかし、マハーマーヤーだったらとう利天とつながっているはずだから、つまり七日後に亡くなって、とう利天に生まれ変わっているはずだから、動物界であるはずがないわけで、あの場所は違うだろうということなんだよね。またサキャ神賢ゆかりの場所だったらわたしにはわかるから、やはりあそこは違うといえるね。

そうなると、人々は間違った情報を信じてルンビニーを参拝していることになる。しかし、尊師のお力によって、いつの日か本当の聖地に陽が当たるようになるのかもしれない。ちなみに、当地には、アショーカ王の石柱、池の他にマーヤー妃堂があり、中にはルンビニーから出土した仏陀生誕像がまつられていた。

ブッダガヤー

❖大いなる覚醒の地

♦仏陀への道のり

若き日のサキャ神賢は、サキャ族の王子として何一つ不自由ない生活を送っていらっしゃった。仏典にサキャ神賢が当時の様子を向煩悩滅尽多学男たちに語られている場面が記されているが、それによると、サキャ神賢は〝極めて優しく〟育てられたという。

青蓮華、紅蓮華、白蓮華のある蓮池が王子のために造られ、王子はカーシ（現在のヴァラーナシーを中心とした古代国家の一つ）産以外の衣服を身に着けることはなかった。また、寒さや暑さを防ぐため、あるいは塵や草や露に触れることがないようにと、夜も昼も白い天蓋が王子のために持ち運ばれた。



　さらに、王子は冬・夏・雨季という季節に応じた宮殿を三つ持ち、雨季の宮殿では雨季の四カ月間、女性だけの歌舞音楽に囲まれて、下に降りることがなかったという。

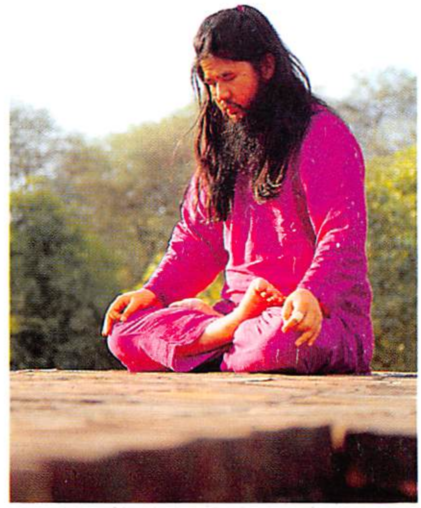
　しかし、この世の無常なるがゆえに、真理を求める気持ちが抑え難く、父母を残し、妃を残し子を残し、王子は出家修行者となる決意をされる（後に養母マハーパジャーパティー、妃ヤソーダラー、息子ラーフラはサキャ神賢の弟子となり出家する）。このとき、サキャ神賢は二十九歳であられた。

　当初、マガダ国のアーラー、ウッダカという、その時代最高の指導者と目された二人に学んだサキャ神賢は、またたく間に彼らと同じ境地に達してしまい、彼らの説いている境地ではご自身が満足できないということをお知りになった。

　そこで、苦行に望みをかけ、苦行者が集まっている苦行林に入り、あらゆる苦行を







六年間（七年間という説もある）も続ける。ところが、その苦行は死に至らしめるほどのものであったにもかかわらず（実際、死んでしまったというウワサが流れたこともあった）、いっこうに悟りの境地に達することができない。

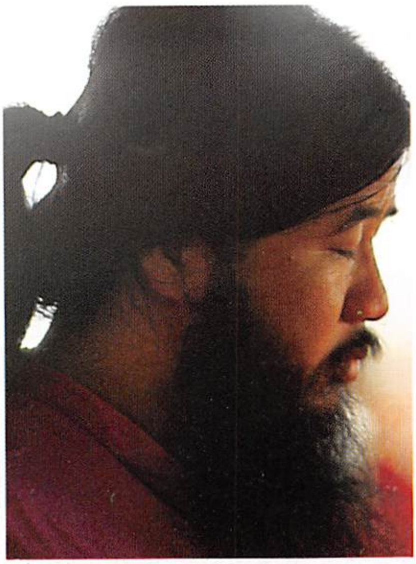
ある日、単なる苦行の無意味さに気付き、苦行を捨てられる。そして、村の乙女スジャーターの供養した乳がゆによって弱り切っていた体を回復したサキャ神賢は、

「たとえ皮膚や筋肉や骸骨が干からびようとも、最上正覚を得るまでは、この蓮華座を崩すまい。」

という強い決意をもって、菩提樹の下に座り、最後の覚醒に至るための瞑想に入られた。そして、ついに真理を悟って覚者となられたのであった。

◆菩提樹の下で

ブッダガヤーでは、五代目といわれる菩提樹が今なおサキャ神賢が瞑想された場所（金剛座――もちろん台座は後世の作）に涼しげな木陰をつくっている。





　尊師がこの菩提樹の下でわたしたちにサキャ神賢の悟りについて説法してくださった。

「サキャ神賢は、この金剛座で四十九日間のサマディにお入りになりました。この四十九日間のサマディの内容については、ヴァジラヤーナで説かれている四十九日間の転生の瞑想だったといわれています。サキャ神賢はその中で非神秘力、そして経験の素因の集積、識別、名色、六処、触、受、渇愛、愛著、そして生存、生というプロセスを完全に認識なさり、すべてを経験し終わられました。つまり、この菩提樹の下で最終解脱なさったわけです。もちろん、この菩提樹そのものは、そのときのものではありません。それから何代か後のものです。

（しばらく尊師はマントラを唱えられ、瞑想される）

　このカルパには多くの最終解脱者が登場しました。そして、多くの人たちを済度しました。わたしもこのカルパの終わり、マイトレーヤとして降誕し、同じように樹下に座り最終の解脱を果たし数千万人の弟子



たちをニルヴァーナに連れていくでしょう。

（再びマントラ）

サキャ神賢は、この金剛座において最後の瞑想にお入りになり、解脱直前、破滅天（悪魔）の軍勢と対決なさいました。なぜ破滅天がサキャ神賢に戦いを挑んだかというと、もしサキャ神賢の悟りが完成されたならば、多くの魂が破滅天の支配から離れるからです。しかし、それは、わたしはあくまでもヒナヤーナ的な教えであると考えています。ヴァジラヤーナにおいては、破滅天もサキャ神賢を応援します。――まあ、この深遠な内容について、今お話しすることができないのは非常に残念ですが――。そして、ここで、本質的にすべてを放棄した心の本性の状態、その心の本性の状態は、不変、常、絶対歓喜、絶対的自由、そして絶対的幸福を備えているんだということをサキャ神賢はお悟りになったわけです。」

仏教徒にとって最高の聖地であるといわれるブッダガヤー。サキャ神賢が大いなる覚醒を得られた、まさにその場をこの目で確認し、そのエネルギーを感じることので



きる喜びは筆舌に尽くし難いものがある。しかも尊師がすぐそばについていてくださるのだ。同行者全員、菩提樹の下で瞑想させていただいたが、多くの人がそれぞれに体験したらしい。実際わたしの中にも、サキャ神賢が二千五百年前に残されたデータが入ってきてわたしを驚かせ感動させたのであった。

サヘートマヘート

釈迦牟尼が二十四年間にわたって雨安居を過ごされ、多くの説法をされたところ

◆サヘート

「このようにわたしは聞いた。
あるとき、覚者はサーヴァッティーのジェータ林にあるアナータピンディカの園にとどまっておられた。」

この言葉で始まる仏典がなんと多いことか。それもそのはず、スダッタ長者の寄進によるこのアナータピンディカの園で、サキャ神賢は二十四年間にわたって毎年の雨期を過ごし、数多くの説法をされたのであった。ここの精舎跡がサヘートである。日本でも、この精舎は『祇園精舎』として平家物語にもうたわれたりして、有名である。

ここでは特に尊師が多くの説明をしてくださったので、そのまま載せさせていただ



くことにする。尊師がその場その場で二千五百年前のデータを読まれ、普通だったらとてもわかり得ないであろうことまでも明確に解き明かしてくださるのである。「素晴らしい」の一言に尽きる。

●アーナンダ菩提樹にて

サキャ神賢は、ご自分がここにいない乾期の間は、「ブッダガヤーから菩提樹を移植して拝むように」とアーナンダに指示されたという。その指示に従ってアーナンダが移植したと伝えられているのが、この樹。もちろん、現在あるものは当時のものというわけではない。

「ヒナヤーナ仏教においては、一切対象に対して拝んではならないということになっている。しかし、実際、このようにサキャ神賢は、アーナンダとスダッタ長者に、自分自身が悟りをお開きになった菩提樹の木をね、そこにお植えになったと。これを見てもわかるとおり、大切なことは霊性の向上、つまり善法の増大、そして悪法の減少にかかわる一切のことはなすべきであり、



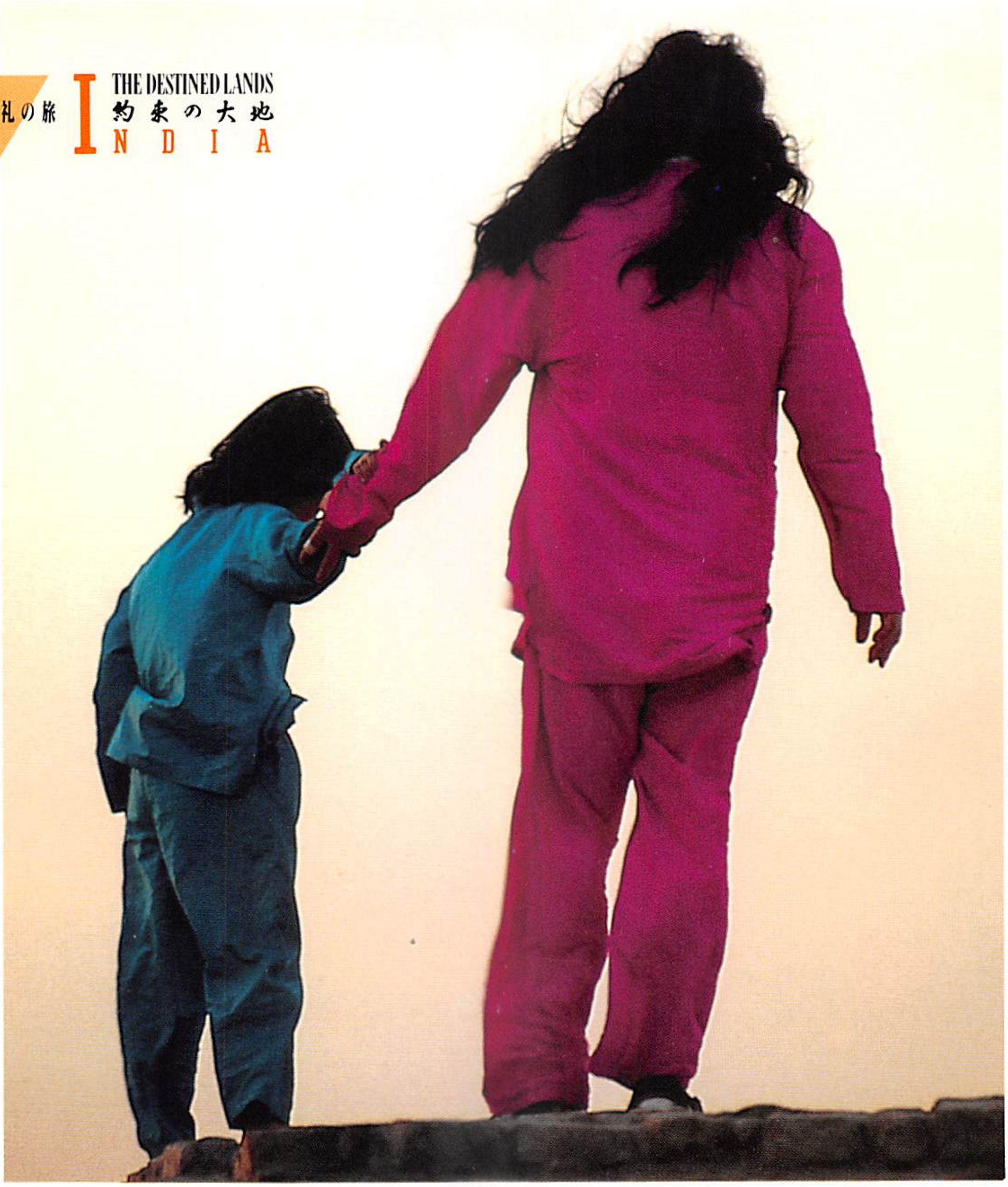


逆に悪法の増大、善法の減少、これがなされるもの、一切をなすべきではない。これは仏教の基本的考え方の一つである。よって、君たちはインドから中国へ伝わったヒナヤーナ仏教の一部をすべてだと考え、そして自己の本質以外を拝んではならないというその言葉に対して惑わされないようにしなさい。いいね。

わたしの、まあ精神的体験からいくならば、ここにある菩提樹より、ブッダガヤーの菩提樹の方がエネルギー、広がりともに強いと思います。おそらく、それは礼拝されている回数その他が、こちらの方が少ないからじゃないかと思う。もっと、もっと、このサーヴァッティーの祇園精舎がみんなの信仰の対象になれば、素晴らしいんじゃないかと思いますね。」

●ミラクル・ポンド横の遺跡にて

「ここでサキャ神賢は水の瞑想をなさいました。そして弟子たちは池の周りに降りていき、同じように座り、そこで水の瞑想をしました。この奇跡の水、ミラクル・ポンドで水浴したのは、サキャ神賢だけでした。



サキャ神賢は、この祇園精舎において弟子たちに三つの法をお説きになりました。その第一は、比丘尼に対する法です。これは、スヴァディスターナ・チァクラから、マハー・ムドラーの門を開くための特殊なタントラの技法です。そして、ステージの低い比丘に対しては、マニプーラ・チァクラからの道、ステージの高い、例えばモッガラーナや例えばサーリプッタのような大聖者に対しては、アナハタ・チァクラからの道をお説きになりました。

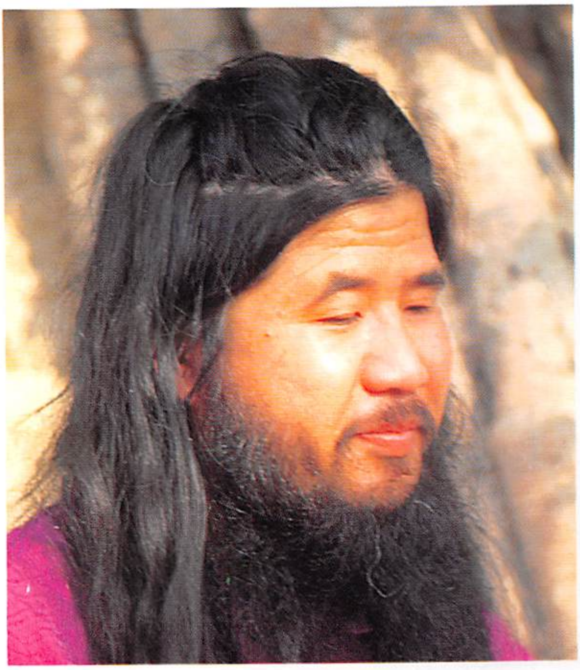
仏教の、仏教的見地から見て完全な解脱の状態とは、そのチァクラに完全にプラーナが流入しないこと、つまり、例えばムーラダーラにプラーナが流入しない、スヴァディスターナにプラーナが流入しない、マニプーラにプラーナが流入しない、アナハタにプラーナが流入しない、ヴィシュッダにプラーナが流入しない、アージュニァーにプラーナが流入しないということです。これは、どういうことかというと、例えば例を挙げるならば、もしその人に情愛、欲情というものが強ければ、その人のプラーナは、スヴァディスターナに流入します。



しかし、その完全なる経験が終わると、スヴァディスターナからプラーナは上方に撤退します。同じように、貪りのカルマを消滅すると、マニプーラから撤退しますし、あるいは片寄った愛着から解放されると、アナハタからプラーナは撤退します。そして、地位や権力から解放されると、ヴィシュッダから解放され、この現世における一切の喜びから解放されると、アージュニァー・チァクラからプラーナが撤退するわけです。そして、サキャ神賢は、その法をもって神聖行、神聖天（梵天）へ至る道だとお説きになりました。

サキャ神賢は二つの法をお説きになりました。その第一は、顕教。顕教は、今皆さんがオウム真理教で翻訳している『南伝大蔵経』に最もよく現われています。もう一つは密教です。これは、アーナンダや他の高弟たちに対しても、決して漏らしてはならない、漏らすことによって大変な悪業を積むという法をお説きになりました。よって、わたしも、ここで皆さんに対して密儀についてお話しできないのは大変残念です。

では、なぜサキャ神賢は秘密の教えを一

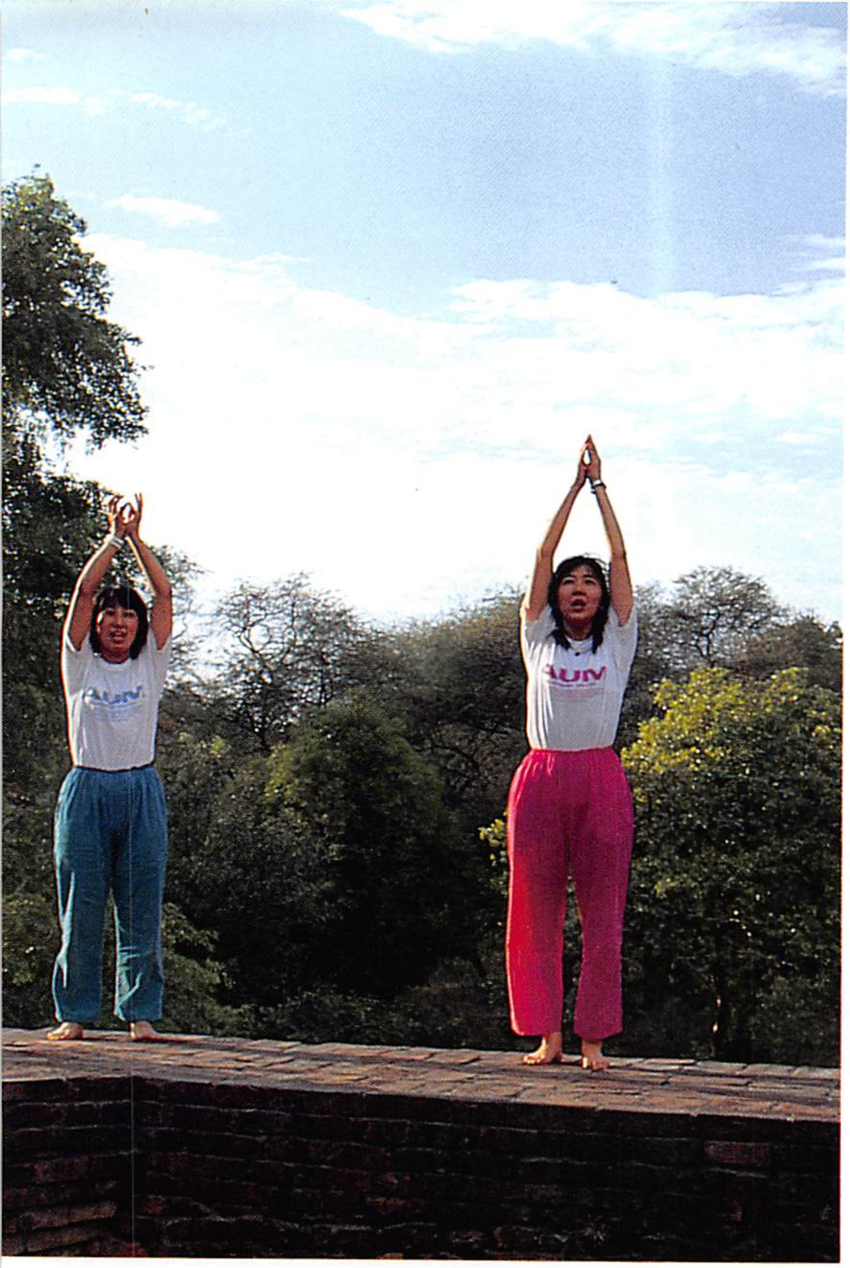




般に表わされなかったのでしょう。それは簡単です。この秘密の教えというものは、大変危険性のある教えだからです。そして、この教えがもしグル（宗教上の指導者）なしに広まるなら、仏教の信頼は完全に失墜したことでしょう。よって、慎重にその法を伝播することのできる者たちだけに対してお説きになったわけです。」

●釈迦牟尼の瞑想の場にて

「その五つの集まり、それは形状・容姿、感覚、表象、そして今までは意志の遂行という言葉を使っていたが、やはりここでは経験の素因、つまりデータと言った方が正しい。そして、その最も奥側に識別、それを善だ悪だ、あるいは善し悪しと判断する、機構が備わっている。この五つをもって五蘊という。そして、この五つの蘊を完全に、理解し、把握し、証智し、そして捨断し、完全にクリアな状態にしたとき、わたしたちは非神秘的な世界から、神秘的な世界へといざなわれる。そして、この五段階の蘊、五つの集まりは、順に深くなっている。そのように考えたら、この五蘊の止滅につい



ては、よりわかりやすくなるだろう。諸君もしっかりと、自己の利益、自己の善法を増大させる修行をなし、悪法を減少させる修行をなしなさい。いいね。」

「サヘートの遺跡そのものは、ちょっと新しいものなんだよね。」

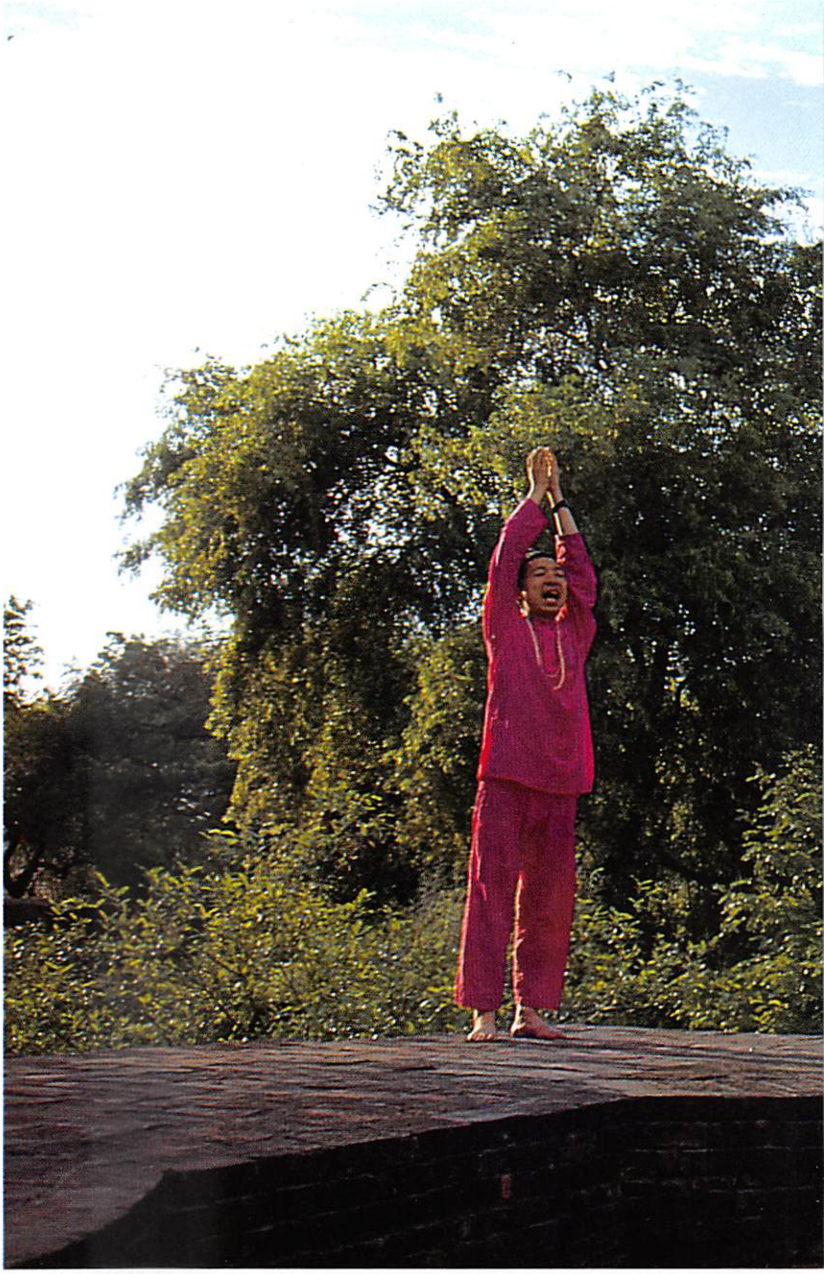
と尊師がおっしゃる。

「はい、レンガ作りの物は、考古学研究所の調査では、二、三世紀のものだということです。」

「ただ形状はほとんど変わっていないだろうとわたしは考えている。」

「それは、サキャ神賢当時は木などでできていた建物だったという推測があるんですけれども、現存しているレンガの遺跡と同じような形で、イニシエーションの場、瞑想の場という使われ方をしていたということでしょうか？」

「はい、そうです。サキャ神賢のいらっしゃった場所、瞑想なさっていた場所のエネルギーの強さというものは、二千五百年経っても変わっていないものね。さすがだと思う。時の流れからいっても、聖者にとっての二



立位礼拝を行なう弟子たち。

千五百年というのは瞬間だからね。」

●入門の儀式の場にて

「出家修行者に対して、サキャ神賢が入門の儀式を行なわれたところである。時期的にはここではヒナヤーナ（小乗）の教えが説かれていたといわれている。しかし、その教えが正しくないことをここで一つ証明することができる。それは、なぜかというと、サキャ神賢が実際、サキャ神賢の弟子として、出家した弟子として入門した弟子に対して、ここで入門の儀式、つまりイニシエーションを行なっていたということだからである。

では、その入門の儀式、イニシエーションは、一体どのようなイニシエーションだったのだろうか。それは、まず、戒律を付与する。戒律とは何かというと、その人が守らなければならない禁戒、そして勧戒のことである。一般的に戒律というと、禁戒だけを指すが、実際禁戒だけではなく、勧戒もここでは伝授されている。そして、それだけではなく、エンパワーメント、強烈なエンパワーメントが行なわれている。その

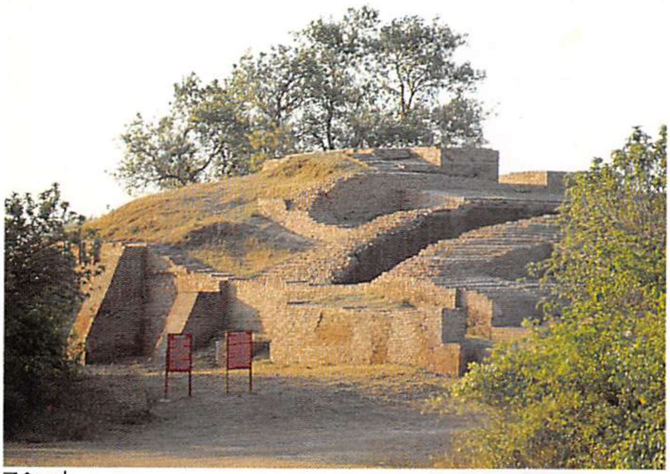


エンパワーメントの主なるものは、水（すい）のエンパワーメント、水（みず）のエンパワーメントである。入門のエンパワーメントはあくまでも水のエンパワーメントである。そして、修行が進んでくる段階で、地のエンパワーメント、火のエンパワーメント、風のエンパワーメント、空のエンパワーメントと伝授される。よって、サキャ神賢が秘密の教えを説いたとする、例えばチベットのタントラ・ヴァジラヤーナの教え、これは真理であると、わたしは確信している。」

◆マヘート

マヘートはサーヴァッティーの都の跡であり、サヘートから0・五キロほどの所にある。ここに残っているのはパッティー・クティー、カッチー・クティーと呼ばれているレンガ作りの遺跡が二つだけである。

パッティー・クティーの方は、発見者であるカニンガムが、殺人鬼アングリマーラが改悛した地に建てられた「アングリマーラ塔」だろうと推定しているというが、尊



マヘート
サーヴァッティー（舎衛城）の都の跡。
これは尊師がケーマー比丘尼のものであると推察されたストゥーパ。



師によると話が全く違ってくる。サヘートと同じく、レンガは後世のものであるにせよ、その場のエネルギー、データからそこがもともと何に使われていたかを尊師は確認されたのである。まさに神通の世界だといえよう。

「ここは僧の座っているヴィジョンが見えるね。ということは、僧のいた場所だということになるね。」

と尊師。しばらくして、このようにおっしゃった。

「わかったぞ、この場所が何か。ここは、まず成就した者たちがね、ここは、あの、成就した者たちが、その後のリトリートした所です。で、目的は何かというと、あの、地獄から神聖天まで含めて、欲六界、あるいはその神聖天を含めた世界をこの世に現象化するための瞑想をやってたところだね。

例えば、ここにいると、完全に体が全部入っちゃうんだね。入っちゃうとはどういうことかというと、ここは地獄に通じる道でもあるということなんだよ。天へ通じる道でもあると。だから、上からは神聖天と地獄と両方の光が射してきて、両方の道が

サヘート
“サーヴァッティーのジェータ林にあるアナータピンディカの園”の跡

できてると。ある意味では、大変、あの、徳のない人にとっては危険な場所だね、ここは。今は地割れとかは起きないだろうけど。そこまで現わすことのできる人はいないから。やっぱり、成就したとしても、それを現わすだけの瞑想をしない限り、凡夫は救済できなかったんだな。」

「現わすというのは、凡夫に対して現わすんですね。」

「そして救済するということなんだね。カルマを現象化させることは、その人たちを真理に結び付けるただ一つの方法だから。もし、この世にカルマが存在しないというふうにみんなが認識するんだったら、当然それは修行にも入らないだろうし、悪業を積むだろうし、あるいは自己のカルマを認識させるだけの瞑想がなければ、当然それは、あの、自己のカルマが落ちているという段階でも、自分のカルマだと思わないだろうしね。」

「あの、瞑想の力によって、カルマを現象化させるということなのですか?」

「というよりも、欲六界を、あの、完全にこの世に現わすというか、神秘的な力を持っ

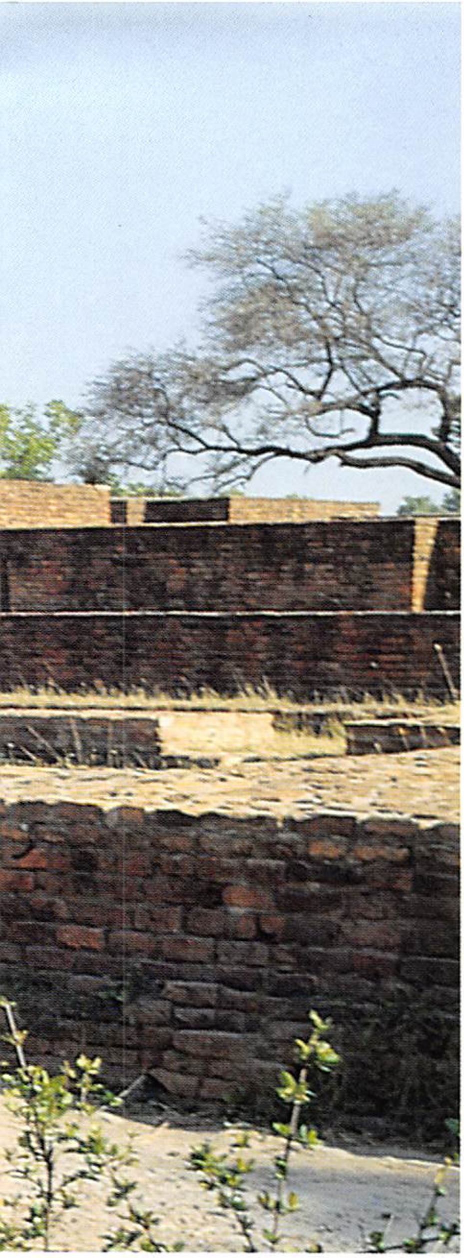


て、この世に現わす。そのための瞑想。だから、偉大な聖者方が、ここでは相当瞑想しているはずです。

で、まあ、ある段階までは、山にこもって修行するわけだけど、成就した後、あの、祇園精舎に生活していた人たちは、あの祇園精舎の一般的な僧の指導だけではなくて、そういう成就者が、今度は成就の後の修行をするという空間があったわけだよね。その中の一つだとわたしは思います。すごく、あの、ある意味ではコプト教（原始キリスト教）と似ているよね。というか、やはり独房がないと、実際自分の内側というのは、理解できないんじゃないかね。なぜかというと、ここは一つポイントになるわけだけど、自分のカルマか、相手のカルマかわかんない場合に捨断してしまうことによって、完全に自己のカルマであることが認識できるわけだから。

しかし、ここ、すごいね、ほんとにね。完全に体が入っちゃうね。なんか、立っていても、下につっかえがないという感じだもんね。いつ、大地が割れて吸い込まれるかわかんないというような感じだね、ここ







は。きっと、それも、わたしだから理解できるんだろう。
　人間はいくらカルマから逃げたって、そのカルマは蓄積されていってるだけなんだよ。だから、カルマが現象化しないからいいんじゃなくて、いずれは現象化するものなんだ。例えば、パセーナディー王の妃マッリカーは一回犬と交わっただけで一週間地獄へ落ちた。あるいは、ビンビサーラ王の末期は、息子に幽閉されて殺されたと。こういう仏典にある記述を見ても、現世願望を叶える教えじゃないんだね、仏教というのは――。むしろ証智仏教と言った方がいい。証智仏教とは何かというと、自分のカルマを見極める仏教、見極める教えということだ。で、何をなしたら一番利益になるのかを知る教え――これが仏教なんだよ。
　だからサキャ神賢が『凡夫というものは、この教えを見ることはできないだろう』とお考えになった理由が、実はここにあるんだね。凡夫というものは、喜び、楽だけを、自分の楽しみだけを追求して生きていると。しかし、実際はそうではなくて、悪業については、しっかりと蓄えられていると。そして、それが次の三悪趣に至る経験を形成しているということなんだよ。しっかりと苦というものを証智して、現実というものが結局は苦しみによって構成されているんだということを衆生に教え示すことこそが最高の教えなんだ。」

　遺跡の話が単にその話だけにとどまらず、奥深い教えにまで瞬く間に発展していく。こんなときはいっそうグルに接する喜び、法に接する喜びを感じることができる。
　なお、同じくマヘートにあるもう一つの遺跡についても、尊師は次のように語られている。



「これは皆さんもよくご存じの、在家信徒で最も有名なスダッタ長者の家の跡だといわれています。しかし、この空間は戯忘天（戯れ堕落天）へ至るための道ではなく、神聖天へ至るための道がしっかりとできています。サキャ神賢もお説きになったとおり、スダッタ長者は偉大なる布施をなし、偉大なる奉仕をなし、そして除冷淡天、つまり戯忘天の第四位の世界である、除冷淡天へと転生しました。ということは、この場所、この場所は、スダッタ長者の跡ではなく、他の偉大なる覚醒者、神聖天へと至った魂のストゥーパの場所であると考えるべきでしょう。わたしは、この場所を偉大なる向煩悩滅尽多学女であられるケーマー比丘尼のストゥーパだと考えています。」



ギッジャクータ山（霊鷲山）
❖釈迦牟尼が晩年修行され、法を説かれたところ

◆くつがえされる定説

この山は、サキャ神賢の時代にマガダ国の首都ラージャガハ（王舎城・現ラージギル）があった盆地を囲む五つの山の一つである。この山に晩年のサキャ神賢が長く滞在され、修行された。一般にこの時期にサキャ神賢が『法華経』（大乗の教え）を説いたとされるが、尊師はこの説をもくつがえされた。一部の弟子に対しては大乗よりも高度なタントラ・ヴァジラヤーナの教えを説かれたというのである。

山頂で、尊師はこう語られた。

「弟子たちよ、よく聴きなさい。ここで偉大なる覚者であるサキャ神賢は、大乗の法をお説きになった。そして、その大乗の法を聴いた弟子たちは、わずかに一二五〇名であった。では、なぜ一二五〇名だったのであろうか。それは、ここには成就者のみ集められ、そして法話をなさったからである。それは、なぜであろうか。つまり、四念処（小乗仏教の修行法の一つ）の修習もできていない者、変化身も出せないものが、真の世界を実感することは難しい。それは、

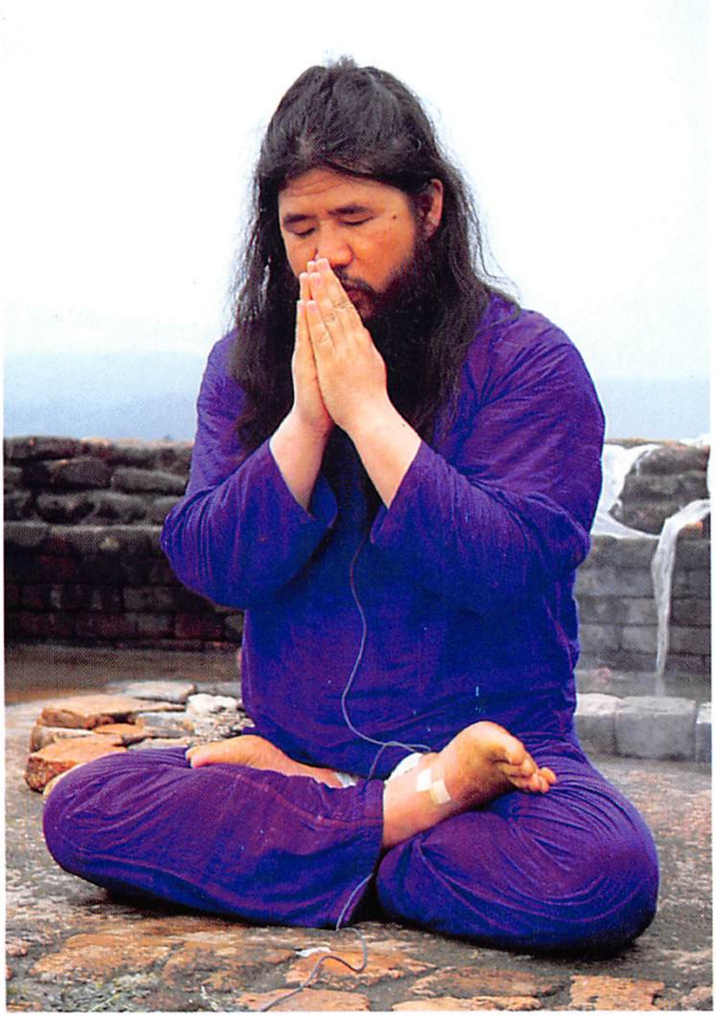


大変困難なことである。よって、マハー・ムドラーの成就者、覚醒者一二五〇名をここに集められ、そして法をお説きになられ、仏陀の意味合い、仏陀の喜び、そして仏陀の自由さをお説きになったのである。

確かに、サキャ神賢入滅のときには、数十万人の弟子がいた。しかし、その中の覚醒者は、ほんのわずかであった。そして、その覚醒者には、大乗の道、あるいは、その一二五〇名の一部に対しては、タントラ・ヴァジラヤーナの道をお説きになったのである。

はるかな昔、十万カルパの昔から、修行をお続けになられたサキャ神賢。そのサキャ神賢の法、この法が今生修行を初めてスタートした者に理解できようはずがない。よって、段階を追って法をお説きになったわけである。わたしも、君たちが想像もつかないような過去から修行してきている。よって、オウム真理教の法も同じように深遠なのである。」

その後尊師をはじめとして一行全員がその場で瞑想し、サキャ神賢のために、歌と舞踊を供養したのだった。



◆洞窟に隠された瞑想場

　さて、ギッジャクータ山には、いくつかの洞窟が点在しているのだが、そのうちの一つの中にお入りになられた尊師は、やや興奮のおももちでしゃべりながら内部を確かめられた。

「ここは、間違いなくイニシエーションの場だ。少なくとも、相当に高い成就者が瞑想していたことは間違いない。わたしはサキャ神賢じゃないかと思う。こっちだ。この方が強いな。何か、揺れるような感じがするんだよ。」

さらに次の洞窟でも、

「間違いない、ここはサキャ神賢がお座りなさった台座じゃないかな、ここのところは。ほら穴そのものは、そんなに強いエネルギーじゃない。だから、弟子のエネルギーだろう、おそらくこれは。ここは、間違いない。この空間は。」

と言われた。

　そして、一とおりご覧になられた後、次



のように教えてくださったのである。

「ここは、あまり知られていませんが、おそらくサキャ神賢の、まあギッジャクータ山の瞑想場であったと思われます。このエネルギーは、あの、ギッジャクータ、つまり、あの、わしの岩（山頂）よりも、ここの方がエネルギーが強いです。

この洞窟の中で、サキャ神賢は、二つの法をお説きになりました。その第一は、欲界からジャンプする法。つまり、オウム真理教では、小乗のツァンダリーとか、あるいは……まあ、要するにスヴァディスターナ・チァクラからジャンプする道です。そして、第二の道は、神聖天からジャンプする、つまりアナハタからジャンプする道です。この二つの法をお説きになりました。うん、確かに、これエネルギーが上がるな。」

それにしても、尊師はこの聖なる山を修行の場として特に気に入られたようである。そして、サキャ神賢と「今度は修行のためにギッジャクータ山に滞在する」と約束されたのだそうで、早くも七月初旬に出発される予定である。一体どんな修行になるのだろうか?



パトナ

❖釈迦牟尼がテレポーテーションをしたところ

◆仏典に見る釈迦牟尼の神通

齢八十歳に達せられたサキャ神賢は、ラージャガハのギッジャクータ山を出発し、法を説かれながら旅を続けられるが、ついにクシナーラーにて完全煩悩破壊をされる。その期間の出来事を記した仏典として『大完全煩悩破壊経』があるが、その中の第一誦品の最後に、サキャ神賢が弟子の向煩悩滅尽多学男たちと共にテレポーテーション（瞬間的空間移動）を行なわれた記述がある。それは、

「そして、覚者はガンジス河に赴かれた。そのとき、ガンジス河は満水となっていて、カラスが水を飲めるほど、岸までいっぱいに満ちていた。そこで、ある者は舟を求め、ある者はいかだを求め、ある者は小さないかだを結んで、向こう岸に行こうとした。

そのとき、覚者は、あたかも力強い人が曲げた腕を伸ばし、伸ばした腕を曲げるという、まさにそのように、ガンジス河のこちらの岸から消えて、向煩悩滅尽多学男出家教団と共に向こう岸に現われたのである。



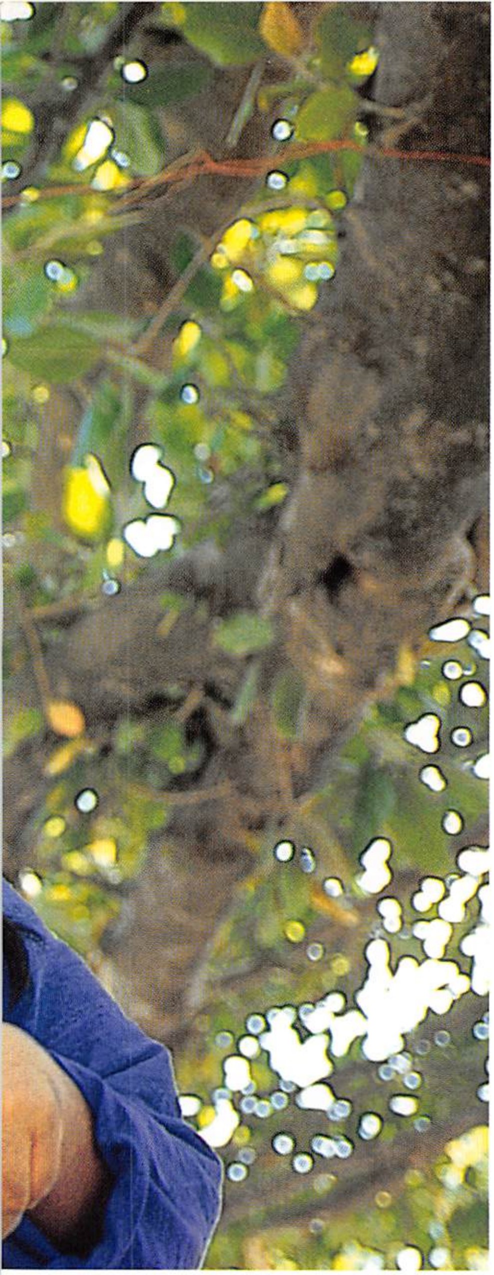
そして、覚者は、ある者は舟を求め、ある者はいかだを求め、ある者は小さないかだを結んで、向こう岸に行こうとするのをご覧になった。そこで、覚者はその意義を知り、そのとき、この狂喜句を唱えられたのである。

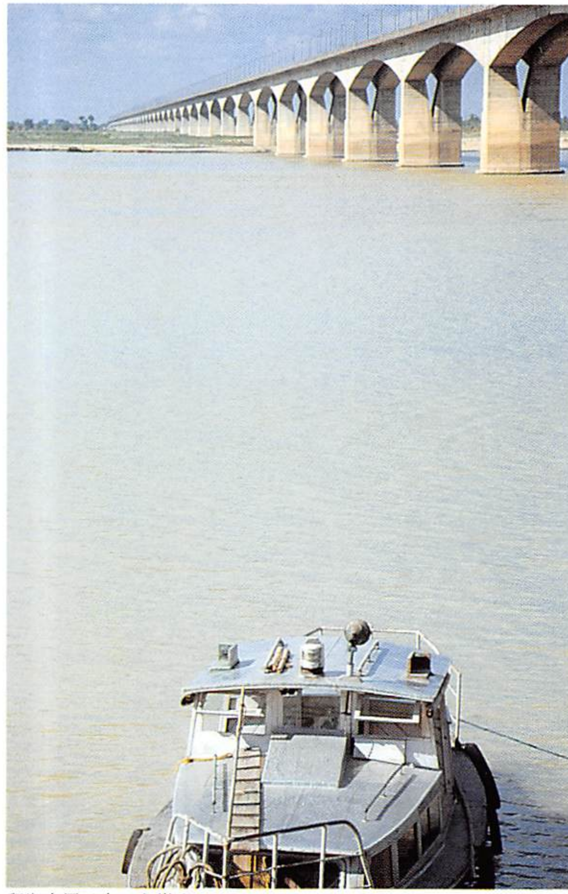
海や川を渡る人々は、
橋を架けて、沼地を避けて、
人は小さないかだを結ぶ。
『渡った者』は、聡明な人々である。」
というものである。

◆テレポーテーションの秘密

さて、その地に立たれた尊師は、突然次のように話し出された。

「まず、天眼によって対象を見、こちら側の五大エレメント（肉体を構成する五つの元素）を空に還元し、そして対象において五大エレメントを生起させると。これだけです。そのときの方法としては、まずクンバカ（呼吸を止めること）を行ない、クンバカと同時に精神を集中し、五大エレメン





釈迦牟尼は向こう岸までテレポーテーションされた。

トを崩壊させ、空に還元させ、対象に移動させると。もう少し物理的力を使うのかなと思ったのだけれど、全然物理的力を使わないみたいだね。」

と。なんと尊師は二千五百年前にサキャ神賢が現場に残されたデータを読み取られたのだという。そして、瞬間的にテレポーテーションの原理をお知りになられたと。さらに、

「五大エレメントを霊視し、それを破壊すると。それができればテレポーテーションできるし、それは今のオウム真理教の指導者のレベルであれば、そんなに難しいことではない。」

とも。

「なぜ、仏典が『あたかも力強い人が曲げた腕を伸ばし、伸ばした腕を曲げるという、まさにそのようにガンジス河のこちらの岸から消えて……』という表現を使ったかわかったよ。ここで瞑想していて。

地遍を無辺に拡大するわけ。水遍を無辺に拡大するわけ。火遍を無辺に拡大するわけ。風遍を無辺に拡大するわけ。空遍を無辺に拡大するわけ——どうなると思う？



そうすると――。

普通人間というのは、人間の枠組み内で自分の五大エレメントが存在しているわけだけれど、それを空間いっぱいに広げるなら、広がる部分に関してのテレポーテーションは自由なんだね。だから曲げた腕を伸ばし、伸ばした腕を曲げるという表現を使っているんだよ。つまり、いったん空に還元して五大エレメントを広げるんだよ、対象に対して。それから固定させるわけ。」

尊師の神通力は、だれ一人理解し得ぬまま二千五百年もの長きにわたって封印されていた真実を再びこの世に甦らせたのであった。



❖大涅槃の地

◆入滅の予言

「わたしはもう老いぼれ、老け込み、年を取り、高齢になり、晩年を迎え、八十歳になった……。」

　サキャ神賢は、侍者のアーナンダにこう言われたが、実際にサキャ神賢が完全煩悩破壊（入滅）をする決心をされたのは、実は、その年齢のためではなかった。それは、アーナンダに対して何度も、

「真理勝者（如来）は、四つの如意の基礎を修習し、真面目に行ない、進めることを行ない、骨子を行ない、経験し、吟味し、よく着手した。アーナンダよ、したがって、もし望むならば、真理勝者は一カルパでも、一カルパ余りでもとどまることができるのである。」

と語って、アーナンダにグルである自分を求める心があるのかどうかを確かめようとされたにもかかわらず、アーナンダの方は全くそのお言葉に反応せず、また、この世にとどまっていただけるように祈願することもなかったからなのである。なぜアーナ



釈迦牟尼涅槃像（完全煩悩破壊像）。ＡＤ５世紀の作。

ンダは祈願しなかったのか――それは、その心に破滅天がとりついていたからだという。

　ヴェーサーリーにおいてついに完全煩悩破壊の予言がなされた。

「尊師よ、今こそ覚者が完全煩悩破壊をするときなのです。」

と言う破滅天に対して、こうおっしゃったのである。

「悪しき者よ、あなたは静まるがよい。程なくして、真理勝者の完全煩悩破壊があるだろう。今から三カ月過ぎた後、真理勝者は完全煩悩破壊するであろう。」と。

　真理勝者のステージになると、自分で自分の完全煩悩破壊の時期を決定することができるのだが、サキャ神賢は、このとき自らの生を破壊する瞑想に入られたのであった。

　それを知ったとき、いうまでもなくアーナンダは驚愕し、

「尊師よ、覚者は一カルパおとどまりください。最上善逝は一カルパおとどまりください。多くの人々の利益のために、多くの人々の幸福のために、この世への慈悲のた



めに、神々と人々の福利と利益と幸福のために。」
と祈願した。が、サキャ神賢は、
「なぜ、あのときそう言わなかったのか。アーナンダよ、もしお前が真理勝者に祈願するならば、二回までは、真理勝者はその言葉を拒むが、三回目は受け入れるであろう。アーナンダよ、したがって、これはお前の罪である。これはお前の過失である。」
と答えられ、さらに、
「真理勝者は、明確に言葉を語った。『程なくして、真理勝者の完全煩悩破壊があるだろう。今から三カ月過ぎた後、真理勝者は完全煩悩破壊するだろう』と。真理勝者が、自分の生命のために、この言葉を取り消すという、この道理は存在しないのである。」
と付け加えられた。

◆最期のとき

さて、その後もサキャ神賢の旅は続いた。まさに最期の瞬間に向かっての旅であった。
ヴェーサーリーからバンダ村、ハッティ



村、アンバ村、ジャンブ村、ボーガ市と説法をされながら、ついにパーヴァーに達せられた。

パーヴァー。そこで、かじ屋の子チュンダがサキャ神賢に運命の供養をした。サキャ神賢は供養の中にあるキノコ（あるいは柔らかい豚肉）を自分に供えさせ、他の食物を向煩悩滅尽多学男出家教団に供えさせてから、残ったキノコを穴の中に埋めるよう命じる。——そのキノコこそがサキャ神賢の生命を断つ直接の原因となった。

こうわたしは聞いた。
かじ屋のチュンダの食事を受けられて、
賢者は死に至るほどの、
激しい病気に侵された。
キノコを受けられたことで、
尊師には激しい病が生じた。
下痢をしながらも、覚者はこうおっしゃった。
「わたしはクシナーラーの街に行こう」と。

サキャ神賢は、クシナーラーに向かう途



中でチュンダに対する非難を心配されて、
「チュンダの後悔は、
『友よ、真理勝者はあなたの最後の托鉢食を召し上がって、完全煩悩破壊なさった。したがって、あなたにはその利益があり、あなたにはその恩恵があるのだ。』
として追い払われなければならない。」
と言い残し、最期の地、クシナーラーへとお入りになった。そして言われた。
「さあ、アーナンダよ、サーラ双樹の間に、頭を北に向けて、私に寝床を敷いてくれ。私は疲れた。横になりたいのだ。」
最期のときが刻一刻と迫っていた。
アーナンダは、精舎に入って、かんぬきをかけ、泣きながら立ち尽くしていた。それに気付かれたサキャ神賢は彼を呼び、
「もうよい、アーナンダよ。嘆き悲しむのはおやめなさい。アーナンダよ、わたしは前もって、このように宣言したではないか。『快いもの、愉快なものといえども、すべては別のものであり、離別するものであり、変化するものである』と。
アーナンダよ、どうしてここでそれが得られようか。それは、生まれ、成長し、集



ラーマーバル・ストゥーパ　釈迦牟尼の遺体はここで荼毘に付された。アーチャリーと共に右にょう（古代インドの礼法）をされる尊師。

積し、崩壊する法則であって、『ああ、それが崩壊しませんように』という、その道理は存在しないのだ。

アーナンダよ、慈愛があり、利益があり、安楽であり、二元ではなく、無量である身の要素の蓄積によって、長い間、あなたは真理勝者に奉仕した。慈愛があり、利益があり、安楽であり、二元ではなく、無量である言葉の要素の蓄積によって、長い間、あなたは真理勝者に奉仕した。慈愛があり、利益があり、安楽であり、二元ではなく、無量である意識の要素の蓄積によって、長い間、あなたは真理勝者に奉仕したのである。

アーナンダよ、あなたはよくやった。そして、努力をしなさい。早く無漏になりなさい。」

と声をおかけになった。

それから、向煩悩滅尽多学男たちに最後の法を説き、マッラ族の礼拝をお受けになり、そして、遊行者スバッダに法を説き(彼が最後の直弟子となった)、そして——

言われた。

「さあ、向煩悩滅尽多学男たちよ、わたしは今、君たちに告げよう。諸々の構成要素



は滅亡の法則である。不放逸によって目的を達成しなさい。」

これがサキャ神賢の最後のお言葉となった。

◆入滅の場所を探して

現在クシナーラーにはサキャ神賢が完全煩悩破壊された地点を示す、マハー・ニルヴァーナ・ストゥーパ、荼毘に付された地点に建てられたラーマーバル・ストゥーパと呼ばれる仏舎利塔、そしてマハー・ニルヴァーナ・ストゥーパの前には最近ビルマの仏教徒によって建てられたマハー・パリニルヴァーナ・テンプルがあり、中にはサキャ神賢の完全煩悩破壊像が安置されている。この像は一八三三年に地中から発掘されたものだそうである。

このクシナーラーで面白いことが起こった。わたしたちがクシナーラーに泊まった日の夜半過ぎになって、

「尊師がこれから散策に行かれるそうです。」

という連絡が入った。わたしはてっきり経



行（集中して歩く修行）されるのだとばかり思って外に出てみると、意外にもほとんどのサマナ（オウム真理教の出家修行者）が尊師のもとに集まっている。そして、尊師の発表。

「仏典に説かれている内容をもとにサキャ神賢の入滅なさった場所を探ろうと思っている。現在、マハー・ニルヴァーナ・ストゥーパのある地点が、入滅の場所だといわれていますが、わたしはそこは違っていると考えている。実際、今までいろいろな人が、いろいろなアプローチをしたわけだけれど、どこで入滅なさったかは、はっきりわかっていないんだね。それを探し出してみようじゃないか、というのが今回の目的だ。」

これこそ、尊師あっての展開である。わたしはワクワクしてきた。早速、懐中電灯を持ってホテルを出発する。

◆完全煩悩破壊とは……

「サキャ神賢は、当時ヒランニャヴァティー河と呼ばれていた河を渡って、このクシナーラーに入られた。そして、それは村の地図



釈迦牟尼が入滅された場所を神秘力によって探される尊師。

で検討したところ、西側に存在するとしか考えられない。」

「あとはエネルギーでお探しになるのですか？」

わたしの問いに、尊師が答えられる。

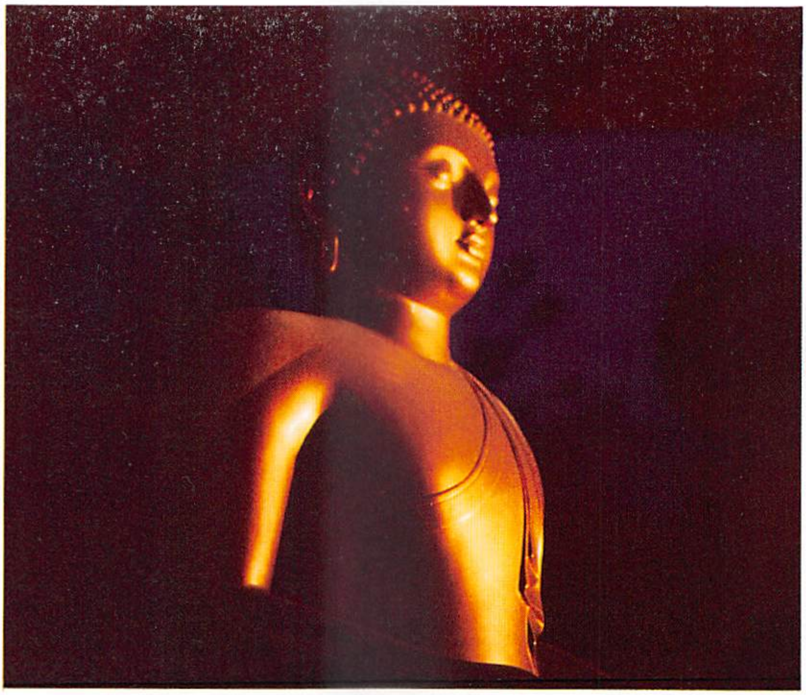
「いや、エネルギーではないです。おそらく天眼と天耳になるんじゃないかと思います。もしそこだったら、天の音楽が鳴り響いているはずだから。そして、わたしが西側だということを断定した段階で、天から音楽が聞こえてきたんだよ。だから、まず西っていうことは間違いない。

——しかし、この空間のエネルギーっていうのは、やはりお前たちみんな好きじゃないだろうなあ。この空間のエネルギーはいいなあと思ったら、本当に涅槃の意味がわかっているんだよ。わたしはこの空間が一番好きなんだなあ。」

「完全煩悩破壊って、簡単にできるんでしょう、尊師？」

とアーチャリー（三女）が聞く。

「完全煩悩破壊すると死だよ。肉体がなくなっちゃうよ。簡単にはできないだろうね、やっぱり。」



「現世大涅槃との違いを教えていただけますか？」

「現世涅槃っていうのは、現世で煩悩を完全に破壊した状態。ところが、完全煩悩破壊というのは、現世大涅槃のときでさえ残していた生命を切るわけだよね。つまり、もっと深い部分にアプローチしなければならないんだね。普通は三日くらいかかる。サキャ神賢の場合は、それを三カ月後に設定なさって、ゆっくりゆっくり記憶修習を始められたんだね。だから、もう最後の『疲れた、疲れた』というのは何かというと、肉体を維持するだけのエネルギーを残さないで、プラーナを撤退させていっていたということ。わたしの場合も、やはり完全に『涅槃します』と言ってから、やはり三カ月くらいかかるかなあ？　それくらいに設定して準備すると思うね、わたしだったら。」



◆入滅ポイント発見！

さて、尊師はご自身で感じられるままに歩いていかれた。そして、とうとうその場所を突き止められたのだった。それは、一般にサキャ神賢完全煩悩破壊の場と信じられている所から、約一キロ離れた所で、現在はなんとカシアーの町へと通じる舗装道路ができていたのである。

「ここだよ。道ができちゃったんだね。だからわからなかったんだよ。」

そう言って、その場で頭を北にして横たわられた尊師を、わたしたちは声もなくただ見つめた。

翌日になって、わたしは念のためにマイトレーヤ正悟師と共にパトナ市内にあるインド考古学研究所を訪ねたが、考古学者のシャラン氏によると、

「現在メインサイト（マハー・ニルヴァーナ・ストゥーパのある場所）が、サキャ神賢入滅の正確な場所であるという考古学的証明は何もない。そこにモニュメントがあったからそう信じられているだけである。」



釈迦牟尼の入滅は夜の最後の更（明け方近く）のことだった。折しも同じ時刻、尊師はその場に――。

また、そのモニュメントについても、
「ここでサキャ神賢が入滅したという記述は一切ない。」
とのことで、現存する遺跡等から、そこがそうであると推測するに足る物証は何一つないということがわかった。

玄奘の『大唐西域記（全十二巻）』によれば、この付近に例のアショーカ王の建てたストゥーパがあったというが、今も見つからないままであるし、また、もし仮にそれが見つかったとしても、ルンビニーの場合と同じく、アショーカ王が石柱を建てたから、そこがそうであると断定することは、

玄　奘



三蔵法師の名で知られている初唐の高僧。十六年にわたるインド旅行から帰国した後、一三三五巻もの経典を翻訳。『大唐西域記』はその旅行記で、インド各地の仏教事情、政治等について書かれている。



もちろんできないことであろう。

　やはり、わたしたちにとって、尊師の示された場所が礼拝すべき聖地なのである。尊師のそういうことに関しての神秘的なお力の正しさは、これまでも数多くの証明がなされているのだ。

◆時を経てなお光輝く空間

「ここは、真っ昼間みたいに光が強いだけでなく、白い映像が残っていたんだよ。」

　尊師は起き上がられてから言われた。

「映像が残ってる——えっ、残っていたんですか?」

「残っていたんです。そして、サキャ神賢の光っていうのは、やはり何キロも照らし出しているんだね、まだね。

　なぜ四大聖地を回ると利益があるかというと、サキャ神賢の解脱なさったデータというものがあって、それによって心が照らし出されるんだね。心が照らされることによって、自己の悪業とか煩悩とかいうものがはっきりと証智できて、それを捨断する形になると。よって、四大聖地を巡回する







後方にあるものがマハー・ニルヴァーナ・ストゥーパ。一般にこの地点で釈迦牟尼が入滅されたと信じられている。

ことは利益があるんだよ。だから、聖地巡拝というものは意味がある。

同じようにグルを礼拝するのも同じ意味があるんだね。つまり、自分自身が功徳がなく、光がなくても、礼拝することによって心がそちらに向かう。向かうことによって内側の心のけがれとか、あるいは煩悩のけがれとか証智できるんだね。証智しない限り捨断はあり得ないから、証智して捨断する。捨断することによって、結局煩悩は落ちるよね。煩悩が落ちることによって、結局悪趣のデータが落ちていくよね。悪趣のデータが落ちていくことによって、善趣である天界に生まれ変わるというわけなんだね。」

わたしたちが尊師の説かれる法を聴き、グルと法に接する喜びを味わっているうちに、いつの間にか辺りは白々と夜が明け始めていた。また暑い一日が始まる——。



◆目的は〝完全煩悩破壊〟……

帰国してから尊師との間に次のような会話があった。

「とにかく一つ言えることは、あそこのエネルギーは異常に強かった。しかもね、涅槃、煩悩破壊的なエネルギーがすごく強かったということだ。」

「そうですね。『大完全煩悩破壊経』を読んでいて気が付いたんですけど、尊師はクシナーラーで〝捨断〟しようとされたのではないでしょうか? わたしにイラ立ちが起こりましたから。ここのところです。

わたしの寿命は熟した。

わたしの生涯はもうわずか。

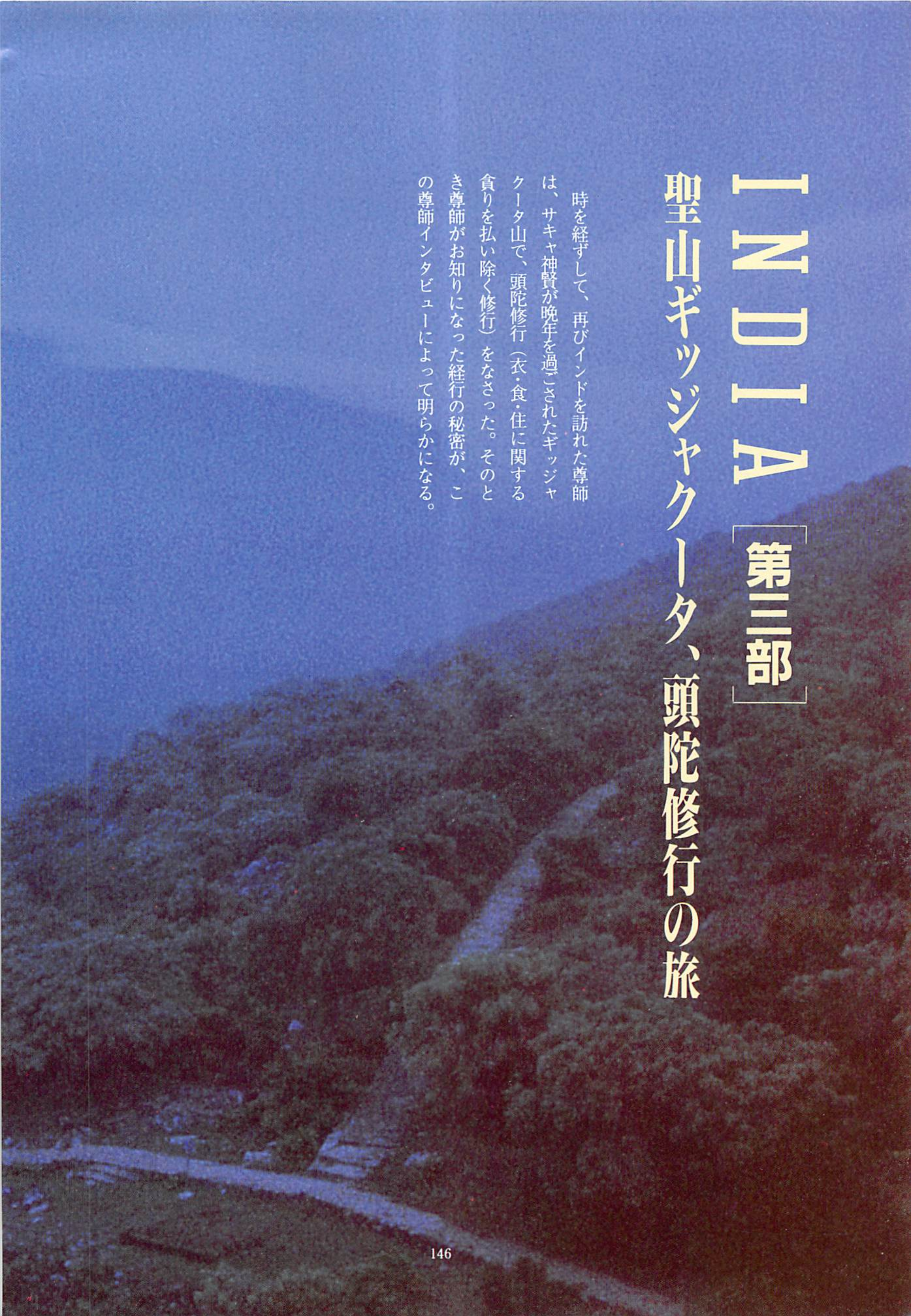
君たちを捨断して行こう。

こういう状態になられたのではないかと。」

「そうだね。まあ、サーヴァッティー(サヘートマヘート)ではそれほどでもなかったけれども、確かにそのあたりからわたしの心の動きが出てきたのは事実だね。もともとわたしは修行者だから、わたしの目的は何かというと絶えず完全煩悩破壊……。」



「ご自分のでしょうか？」
「もちろん、すべての魂の……。だけど、それがどういう境地かわたし自体わかっているから、そういう形で心が傾くんだね。」
「そういうとき、こちらは『覚者は一カルパおとどまりください……』と祈願すればよいのでしょうか？」
「まあ、祈願されれば残るだろうけども。ただ、あまりにもオウム真理教は現世的すぎるよ。宗教的ではなさすぎる。だから、自分自身の存在の意義というか――それがなくなった場合……。」
尊師のお言葉が途切れた。わたしは怖くて、聞き返すことができなかった――。
――尊師が末長くこの現象界におとどまりになり、わたしたちに真理を説き続けてくださることを願うのみである――



INDIA［第三部］

聖山ギッジャクータ、頭陀修行の旅

時を経ずして、再びインドを訪れた尊師は、サキャ神賢が晩年を過ごされたギッジャクータ山で、頭陀修行（衣・食・住に関する貪りを払い除く修行）をなさった。そのとき尊師がお知りになった経行の秘密が、この尊師インタビューによって明らかになる。











◆経行の秘密

（ヤソーダラー）ギッジャクータ山への修行の旅で、尊師ご自身が新しく得られたことなどありましたら、お聞きしたいのですが――。

（尊師）今回の旅でわかったことが一つある。それは、経行の秘密です。もともと経行とは言葉の上では歩き回るという意味しかない。しかし、仏典では、集中して歩いているサーリプッタやサキャ神賢の姿が描写されている。ということは、経行が重要な修行の一つであったことを意味しているといえよう。そして、今回はその、どうして重要だったのか、という経行の秘密に気付くことができたんだね。結局、経行はトゥモ（体に熱を発生させるヨーガのこと）を起こすんだよ。わたしも実際、二日目の経行では最高脈拍百五十、そして、体温が八度三分まで上がったことを記憶している。その次の日が、脈拍百四十、体温七度八分と。

（ヤソーダラー）経行中の集中、クンバカ、



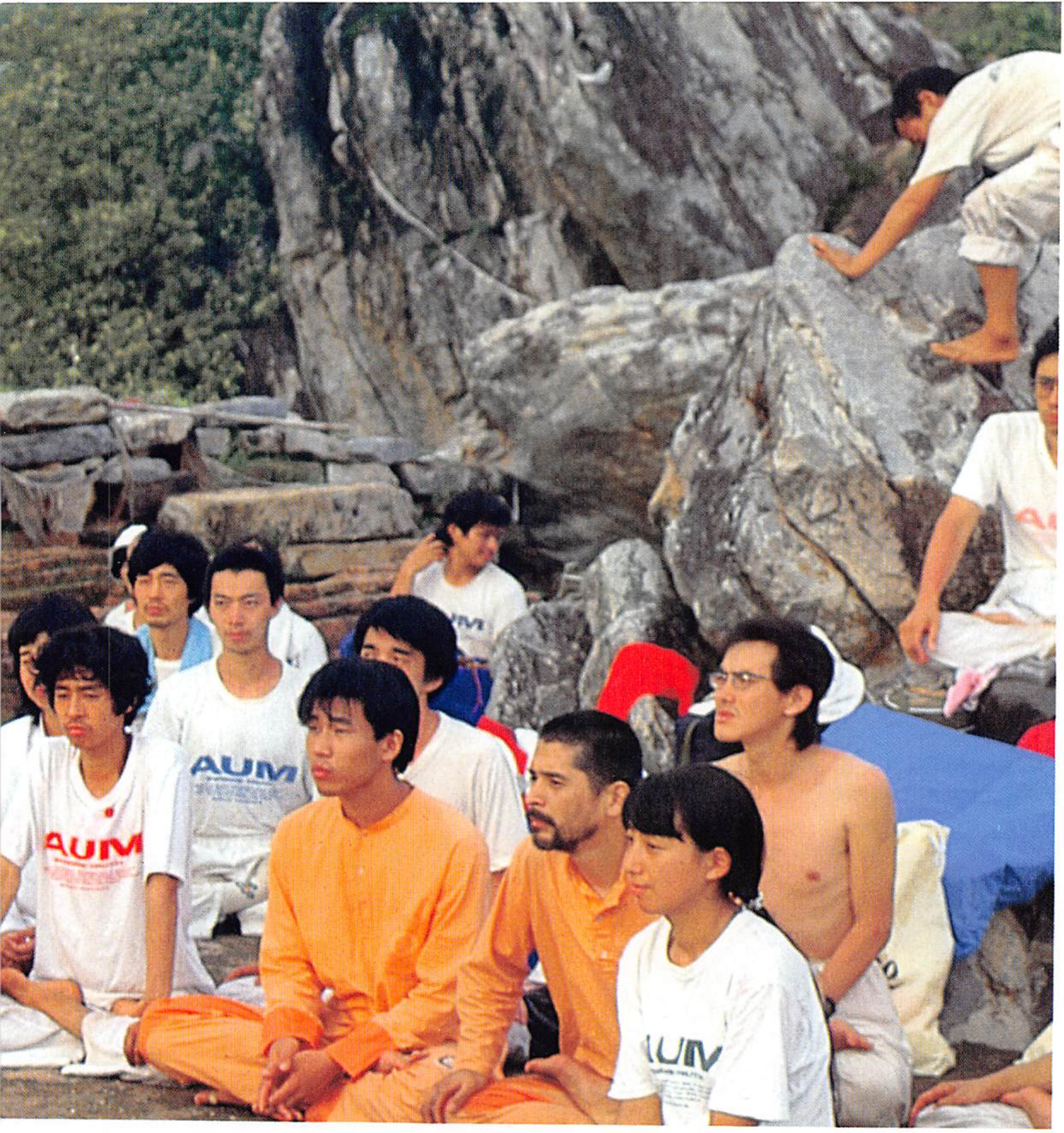


スピード、外気温の高さなどが総合して、トゥモを起こしたのだと思いますが、このトゥモの意義を教えていただけますか。

〈尊師〉 当然トゥモが起こることによって、肉体から意識は離脱しやすくなり、深い三昧に入りやすいというメリットがあるよね。

〈ヤソーダラー〉 どうしてそうなるのでしょうか。

〈尊師〉 まず、トゥモが起きることによって、意識のもうろう状態が起きる。意識のもうろう状態が起きることによって、普段肉体に愛著している識別の、つまり意識の肉体に対しての愛著が弱まるんだね。それによって簡単に肉体から離脱しやすくなるということだ。それからもう一つは、ものすごくエネルギーを使うわけだから、それによって大変疲労すると。疲労するがゆえにやっぱり同じ現象が起きると。つまり、意識が肉体から離脱しやすくなると。そして、実際に離脱することによって、この世だけじゃなくて、いろいろな世界があるんだということを意識が経験できるようになるんだよ。まあ、それだけではなくて、人間の、人間を構成している管、この管も高



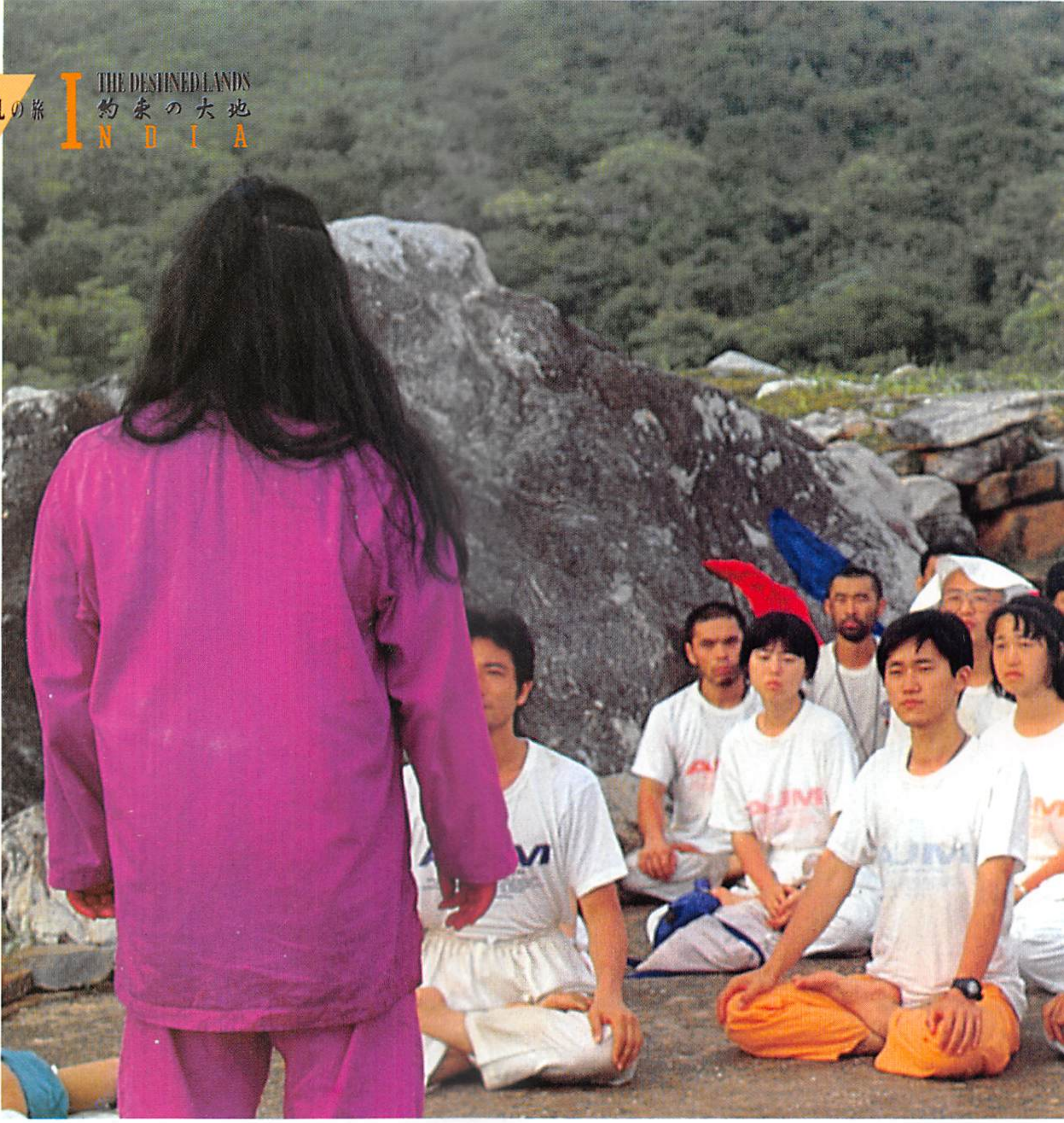
温によって浄化される。そして浄化の後エネルギーが中央管に入り、スシュムナー管を上昇してブラフマランドラ（頭頂より若干手前）をぶち抜いたときに、意識が肉体を完全に離脱する。だからトゥモによって三つの方向からそういう経験をすることができるようになるといえるんだね。

（ヤソーダラー） それは、尊師および弟子が、ということでよろしいですか。

（尊師） そうだね。ただ、ステージの高い弟子ということだね。ステージの低い弟子は、はっきりいって今回わたしのペースについてこれなかったから。体を壊したり、あるいは体がはれ上がったりとか、いろいろなカルマの解放が起きたことによってね。

◆カルマの解放

（尊師） そうそう、トゥモのもう一つの特徴としては、カルマの解放が起きやすくなるということがいえる。それはどういうことかというと、低温より高温の方が運動エネルギーが高くなって運動しやすくなり、カルマの解放が起こるということ。運動し





やすいということは、それだけカルマの動きが早くなるということなんだね。

（ヤソーダラー）ちょっとわからないんですけど。

（尊師）例えば、例を挙げるならば、ここに何か果物があったとしよう。低温と高温ではどちらの方が腐りやすいかと考えたら、高温の方が腐りやすいでしょ。

（ヤソーダラー）高温の方が早く動きが出る……カルマもそういうものなんですか。

（尊師）そう、カルマもそういうものなんだよ。だから、よくいわれるのは、南方系、つまり熱帯系の人が明るくて、逆に北方系



の人が落ち着いていると。で、明るいというのは、それだけ自分を表現すると。つまり、カルマの解放が早いといえるね。で、北方系の方は、暗い、落ち着いているといえるが、それだけ、カルマの変化が遅いということを意味しているわけだね。逆の言い方をすると、南方系の方が北方系よりカルマのたまりが少ないんだね。

◆身を捨ててでも修行を極める

（ヤソーダラー）最後に、旅全般について何か一言お願いします。

（尊師）まあ、今回大変有意義な旅だったわけだけれども、わたしは二日目にアキレス腱を痛めたよね。しかし、アキレス腱を痛めていても、ギッジャクータ山ではテーピングをしてずっと修行を続けたよね。

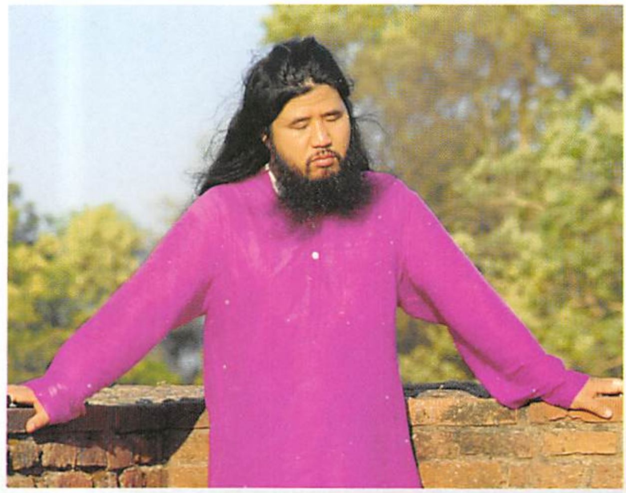
（ヤソーダラー）はい。

（尊師）日本に帰って検査してもらったら、やはり右足のアキレス腱が断裂していることがはっきりしたんだよ。大体三分の二が切れて、三分の一がやっと残っているという状態。このことを通じて、わたしは自分



経行修行によってアキレス腱が断裂。それでも、尊師は修行を続けられた。







の中に、それでもやり通すという精神力、そして、自分の身を捨ててでも修行を続けるという姿勢ができ上がっているということを改めて知ったわけだ。ある意味で自分に対して安心感を持ったね。身を布施するくらい、できるようになってるな、とね。また、今回参加した弟子たちも、それぞれがそれぞれの経験をして、いっそう修行する気を起こしている。これもギッジャクータ山での修行の成果だよね。

(ヤソーダラー) やはり、サキャ神賢のデータの残ってる聖地での修行というものは、必ず何かしらの結果を生むんですね。

(尊師) そういうことだね。

これからは、わたしもサマナも信徒もこういう形での修行の機会が増えていくんじゃないかな。

普通だったら、とても気付かないようなところに、非常に重要な意義を見い出す尊師——。ただただ、驚くばかりである。

そんな尊師に、深遠な法をわかりやすい言葉で説いていただくことのできるわたしたちは何と幸せなことか——。



最高の智慧、神をも超えた力……
最終解脱者があなたを変える！



オウム真理教

その修行ステージの高さゆえ、
〝イェシェ――完全なる絶対なる神の叡智〟
とチベット仏教の高僧より称えられる
麻原彰晃尊師。
最高の智慧と神通力を有した
日本でただ一人の最終解脱者です。
その麻原尊師が、
あなたに贈る幸福へのプログラム。

病から解放されたい……
最高の幸福を得たい……
解脱と悟りを得、神通力を
ほしいままにしたい……
こんなあなたの願いを、
麻原尊師が仏教・ヨーガ・密教の
あらゆる秘儀を駆使して、
速やかにそして確実にかなえます。

※資料請求券を貼付したハガキ、または電話にて最寄りの本・支部までご連絡ください。入信案内等、詳しい資料をお送りします。

キリトリ線

約束の大地
資料請求券

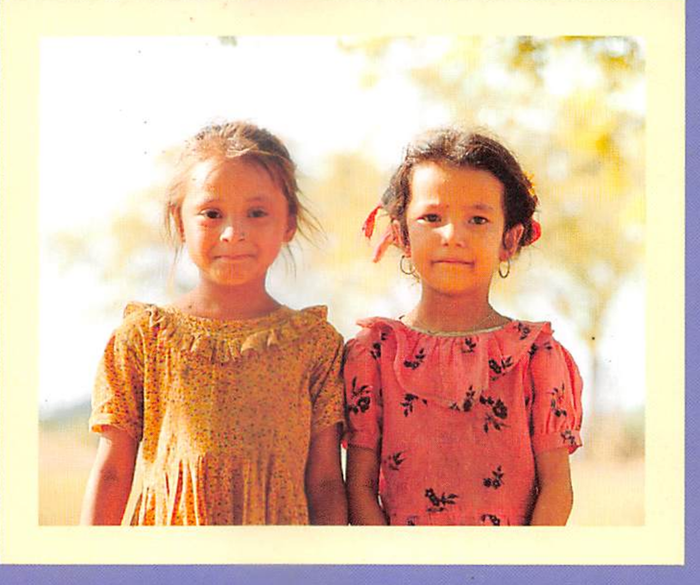
◆── 各道場のご案内 ──◆

富士山総本部　0544(54)1267
〒418-01　静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部　03(3327)8565
〒156　東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部（杉並道場）　03(3396)9393
〒167　東京都杉並区下井草4-4-4　井口ビル2F
大阪支部　06(397)1022
〒532　大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部　052(252)0709
〒460　愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部　011(241)4938
〒060　北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部　075(371)3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部　022(268)3904
〒982　宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部　0762(51)8457
〒920　石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部　082(264)6250
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部　045(243)8079
〒231　神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢崎長者町ビル204
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部　0292(26)8044
〒310　茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
船橋支部 0474(66)4965
〒274　千葉県船橋市新高根6-26-18
深谷出張所　0485(74)6205
〒366　埼玉県深谷市萱場441-8
布施精舎　03(3476)5065
〒150　東京都渋谷区道玄坂1-15-3
〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St. #2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hugel 48, Endenich, 5300 Bonn 1, S.R.Germany

麻原彰晃の世界スペシャル
約束の大地
1991年11月3日　初版発行

定　価　1200円（1165円）
編　集　オウム出版広報編集部
文　　　ヤソーダラー正大師
発行者　松本知子
　　　　石井久子
発行所　株式会社オウム
　　　　東京都世田谷区世田谷2-8-17
郵便番号　154
電　話　03(3439)6043
振　替　東京2-109325
※乱丁・落丁がありましたらお取り替えいたします。

ISBN4-900497-87-8　C0014　P1200E





ISBN4-900497-87-8 C0014 P1200E 定価1200円(本体1165円)